

地(知)の拠点大学による
地方創生推進事業(COC+)

地域イノベーションを推進する
三重創生ファンタジスタの養成

平成29年度 事業報告書

事業協働機関

他大学・高等教育機関

四日市大学
皇學館大学
鈴鹿大学
鈴鹿大学短期大学部
鈴鹿医療科学大学
三重県立看護大学
四日市看護医療大学
三重短期大学
高田短期大学
鈴鹿工業高等専門学校
鳥羽商船高等専門学校
近畿大学工業高等専門学校

企業・団体 ※50音順

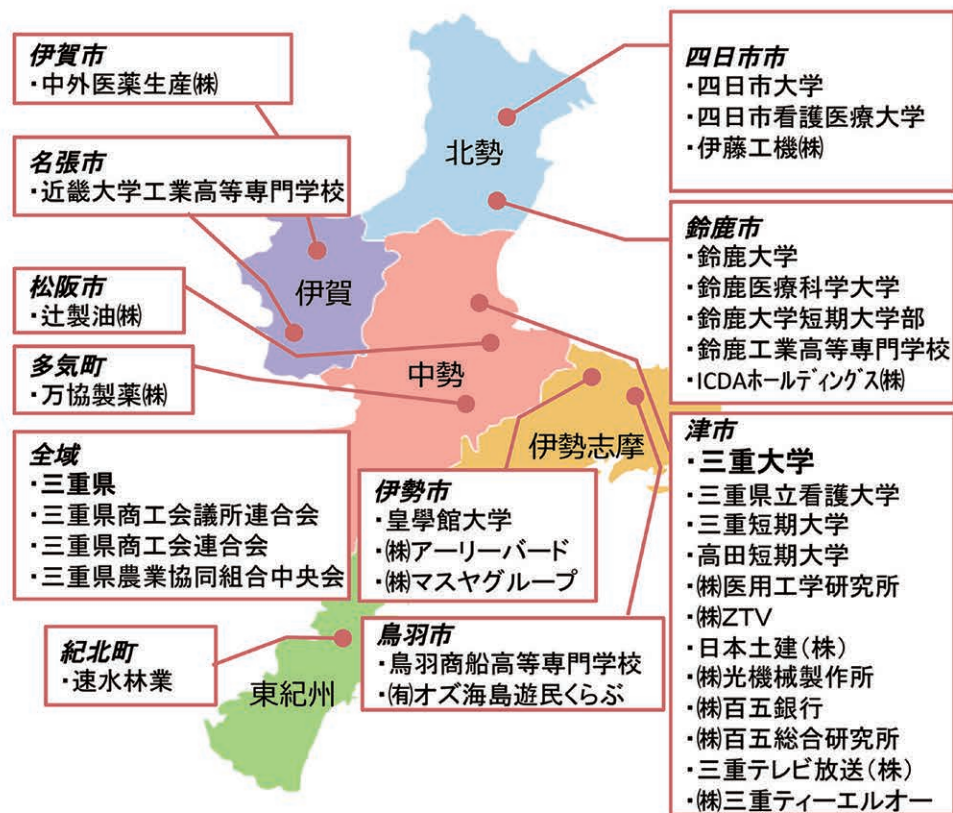
(株)アーリーバード
ICDAホールディングス(株)
伊藤工機(株)
(株)医用工学研究所
(有)オズ海島遊民くらぶ
(株)ZTV
中外医薬生産(株)
辻製油(株)
日本土建(株)
速水林業
万協製薬(株)
(株)光機械製作所
(株)百五銀行
(株)百五総合研究所
(株)マस्याグループ本社
三重県商工会議所連合会
三重県商工会連合会
三重県農業協同組合中央会
(株)三重ティーエルオー
三重テレビ放送(株)

自治体

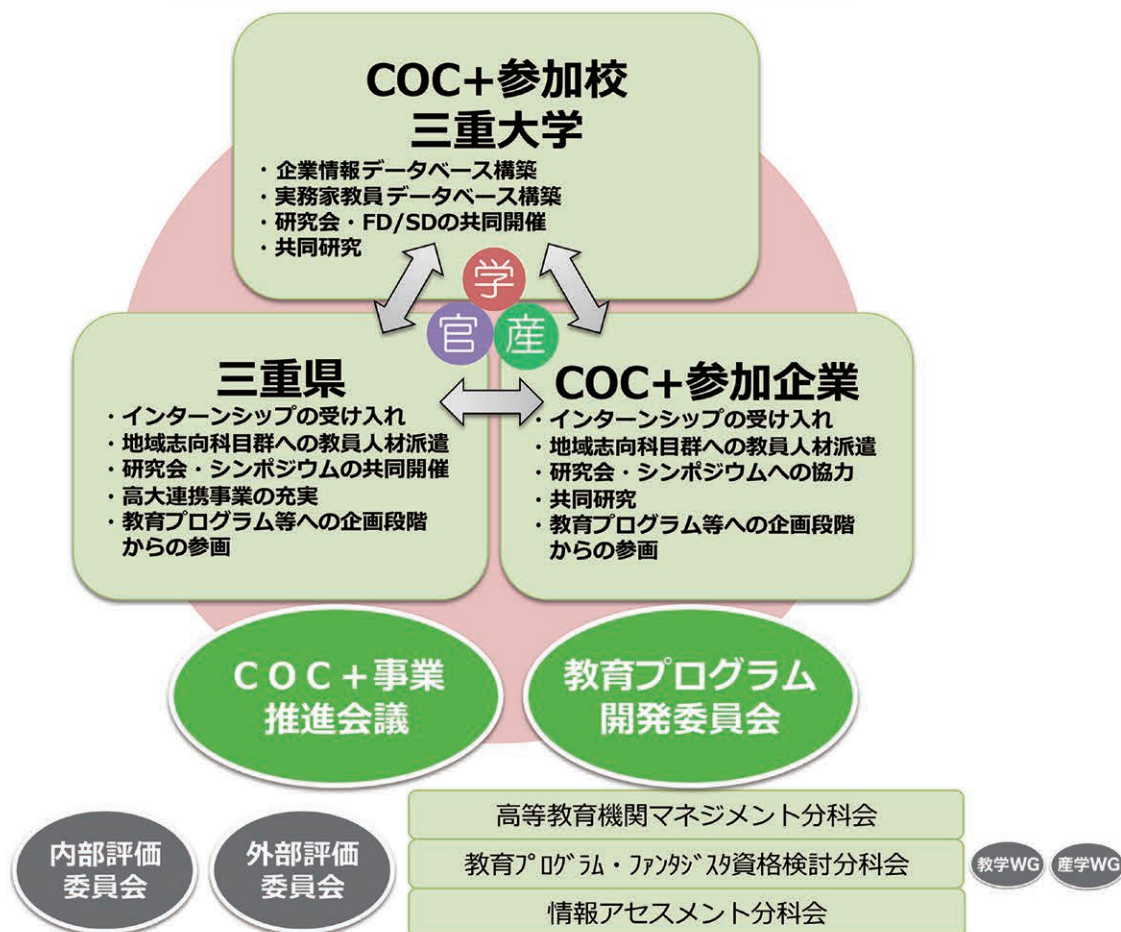
三重県

– 3 –

COC+事業協働機関一覧及びCOC+事業組織図



COC+推進コーディネーターを配置



目次

はじめに

三重大学COC+イメージ図	3
地域に関する学生の学びと経験	6

平成29年度事業実施概要

<各種事業・イベント>

Jobキャラバン	10
インターンシップ受入に関するFD・セミナー	12
みえリーディング産業展	13
COC+シンポジウム	14
インターンシップトライアル事業	18

<学生団体>

三重創生ファンタジスタクラブ 木曽岬わいわい隊	24
三重創生ファンタジスタクラブRetake 三重から魅え重へ	26
三重創生ファンタジスタクラブ 三重もちもちプロジェクト	28
三重創生ファンタジスタクラブ広報チーム	33
三重創生ファンタジスタクラブ多文化共生チーム	35

<教育プログラム>

三重創生ファンタジスタ ベーシック資格	36
三重創生ファンタジスタ資格(食と観光、次世代産業、医療・健康・福祉)	37
三重の歴史と文化	38
三重の産業	39
「三重の歴史と文化」、「三重の産業」における授業アンケート結果	42
PBL型集中講義(食と観光実践)	43
PBL型集中講義(次世代産業実践)	47
PBL型集中講義(医療・健康・福祉実践)	49
三重の地場産業	52
地域発見型インターン	53
三重創生ファンタジスタループリック	54
トランス・ラーニング	61
三重創生ファンタジスタ資格証書	65

<COC+に係る三重大学内の活動>

三重大学長による県内企業訪問、エースセミナー	66
スタートアップセミナー	67
三重大学地域拠点サテライト	68
県内就職支援に伴う種々活動	70
三重大学共同研究スタートアップ促進事業及び地域貢献活動	72

<COC+後継組織>

高等教育コンソーシアムみえ	74
---------------	----

<その他>

各種制作物	78
各種会議	81
COC+中間評価	85
外部評価委員会各委員の評価(平成28年度事業評価)	86
「地域イノベーションを推進する三重創生ファンタジスタの養成」事業自己評価シート	88

地域に関する学生の学びと経験

県内全高等教育機関が連携した教育プログラム

三重大学COC+の大きな特徴として、県内の全高等教育機関が連携した教育プログラムの構築が挙げられる。全ての高等教育機関が事業協働機関となっている三重県では、COC+大学である三重大学が中心に事業を進めるのではなく、全高等教育機関が足並みを揃えて事業を展開していくことを前提に協議を始めた。その甲斐あって、平成28年度には教育プログラム開発委員会直下に第2分科会（教育プログラム・ファンタジスタ資格検討分科会）教学WGを設置し、WGには全ての高等教育機関教務担当者が入って検討する体制を構築できた。平成28年度から先行して開始した三重大学「三重創生ファンタジスタ資格認定副専攻コース（12単位相当）」（以下「副専攻コース」という。）を参考に、全ての高等教育機関が参加できる「三重創生ファンタジスタ（ベーシック）資格（6単位相当）」（以下「ベーシック資格」という。）を構築し、平成29年度には県内9高等教育機関（四日市大学、皇學館大学、鈴鹿大学、鈴鹿医療科学大学、三重県立看護大学、四日市看護医療大学、三重短期大学、鈴鹿工業高等専門学校、鳥羽商船高等専門学校）がベーシック資格を開始した。平成30年度からは高田短期大学が開始する等、県内全体で三重創生ファンタジスタ養成事業が始まっている。

学内が協力した全学的な教育プログラムを構築

COC+大学である三重大学は、平成28年度に副専攻コースを整備し、全学部の学生が三重創生ファンタジスタを目指すことが出来るよう教育プログラムを構築した。既存の授業の中身を見直し、三重県や地域に関する話題を取り入れることや所属学部以外の授業を履修できる仕組みを作り、1学年の入学定員が1,310名のうち、1,000名近い学生（平成30年度入学生）が三重創生ファンタジスタを目指して勉学に励んでいる。また、既存の授業に加え、三重創生ファンタジスタ専任教員が三重県の歴史や文化、産業構造を学んだり、実際に地域へ足を運んで実情を体感できるオリジナル科目を複数構築し、教育プログラムを強化した。

全高等教育機関学生が参加できる「三重を知る」共同授業

三重創生ファンタジスタ専任教員オリジナル科目は、三重県の財政的支援を得て、「三重を知る」共同授業（5授業）を平成28年度に開発、平成29年度に実施した。三重県を知り、愛着を持たせる座学授業「三重の歴史と文化」、「三重の産業」の2授業（後述38～42ページ参照）は平成29年度において試行的に三重大学のみで開講を行い、平成30年度以降は単位互換協定を用いて県内全高等教育機関に開放される。また、同じく平成29年度に開講された現場に出て地域の課題を体感し、他者と協働することでコミュニケーション能力や主体性等を育成するPBL型集中講義「食と観光実践」、「次世代産業実践」、「医療・健康・福祉実践」の3授業（後述43～51ページ参照）は、県内の様々な高等教育機関学生が参加したことで、様々な観点からグループ活動が行われ、教育効果の高いものとなった。

平成30年度新規開講授業の開発

上記5つの授業の実施に加え、平成29年度には新たに2授業を三重創生ファンタジスタオリジナル授業として開発した。

「三重の地場産業」（後述52ページ参照）は、地場産業を通して三重という地域を見つめなおし、他者と協働して現状の分析や課題解決の提案を行う等、少人数制の授業方式をとった。ゼミレベルを想定しており、他者との議論を通じて柔軟な思考力を高めることを目的とした授業である。

「地域発見型インターン」（後述53ページ参照）は事前・事後学習を含めた教育インターンシップであり、魅力的な県内企業を多数知る取組みでもある。地域について深く学んだ学生が本授業を通して県内企業の魅力を知り、県内就職に繋げる出口戦略の一端を担っている。

COC+オリジナル科目

地域について知り、地域への愛着を育てる

三重の歴史と文化、三重の産業

現場に出て、他者と協働することでコミュニケーション能力や主体性等を高める

食と観光実践、次世代産業実践、医療・健康・福祉実践

他者との議論を通じて柔軟な思考力等を身につける

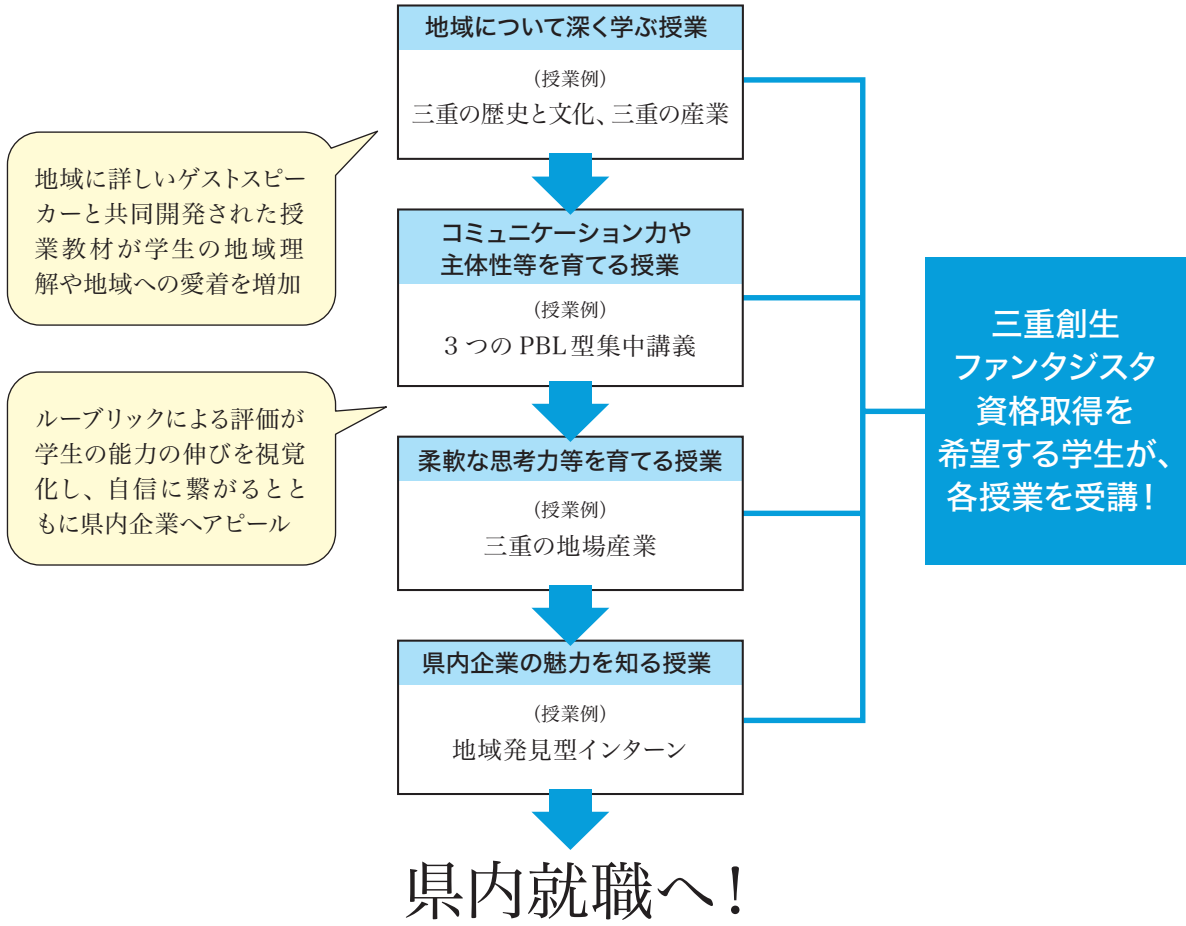
三重の地場産業

地域について深く学んだ学生が県内企業の魅力を知る

地域発見型インターン

従来の教育カリキュラムだけでなく、平成29年度より開始されたCOC+オリジナル科目において新たに地域について「知る」（再発見・再認識）-「学ぶ」（体験・経験を通して学ぶ）-「考える」（再構成・発信）活動を意図した教育プログラムを再構成することにより、学生が地域について学び課題意識を持つ機会を増加させている。

（COC+事業において開発された地域理解に関するオリジナル教育プログラム）



学生の成長を測るルーブリック

3つのPBL型集中講義では、三重創生ファンタジスタ専用のルーブリック（後述54～60ページ参照）を作成して学生の成長を可視化する取り組みを行った。各授業において学生の成長が見込める、特に伸ばしたい力を教員間で相談の上決定し、事前・事後学習を踏まえてどの力がどの程度伸びたかを計測した。平成30年度には三重創生ファンタジスタを養成するオリジナル科目が増えるため、本ルーブリックをさらに見直した上で活用し、学生の成長を捉えるとともに、ルーブリック評価による学生の地域人材としての成長を県内企業へアピールすることで、本授業を受講した学生への県内就職に対するインセンティブになるよう積極的に働きかけている。

県内全高等教育機関で活用できる授業教材の作成 ー地域理解促進や三重への愛着を育てるためにー

短期大学や高専等、授業カリキュラムや専門授業の関係上、地域について深く学ぶ授業を位置づけることができない高等教育機関があるという課題が教学WG内で明らかとなった。地域理解や地域愛を育む授業は、三重大学の教養教育授業の中で「三重の歴史と文化」、「三重の産業」が位置づいているが、南北に長い三重県の地理上、単位互換協定で授業開放しても近隣高等教育機関学生しか受講できない欠点がある。e-ラーニング等LMSを用いて発信することも検討したが、開発費・維持費を考えると、地域について深い知識を伴わない教員でも一定のクオリティを出すことが出来る授業教材（後述61～64ページ参照）を作成し、著作権などに注意を払いながらインターネット上で共有することが最上との判断に至った。これにより、全ての高等教育機関で同一の教材を使い、地域について学ぶ機会を整えることができた。

地域人材を育成する課外活動学生団体「三重創生ファンタジスタクラブ」

上記の正課で行われる教育プログラムとは別に、地域貢献活動を行ってみたいと考える学生を支援するため、平成29年4月に課外活動学生団体「三重創生ファンタジスタクラブ」（後述24～35ページ参照）を三重大学内に設置し、約20名の学生が加入し活動を開始した。学生の熱意もあり、人数は少ないながらも多様な活動を実践してきており、コミュニケーションスキルや課題解決力の向上が認められている。平成30年度以降は県内各高等教育機関で地域貢献活動を行っている学生団体と協働し、三重創生ファンタジスタクラブの活動をさらに発展させていく予定である。

学生の学びと経験

県内全ての高等教育機関、地域企業、自治体が連携して構築した、地域について深く学び、主体性等を育成するCOC+教育プログラムを始めとし、三重創生ファンタジスタクラブといった有志による地域貢献活動プログラムを加え、地域人材である「三重創生ファンタジスタ」を養成する環境が整った。今後は学生の地域における学びと経験を県内の関係者に周知、啓発することに力を注ぎ「三重創生ファンタジスタ」が三重県内におけるキーフレーズとなることや、県内就職における強いインセンティブになるよう努めていく。

平成29年度 事業実施概要

Jobキャラバン

[各種事業・イベント]

平成29年4月29日(土)に三重大学、四日市大学、5月10日(水)に皇學館大学にてJobキャラバンを開催した。Jobキャラバンは高等教育機関に入学したばかりの意識の高い学生を中心に、県内企業の若手社員とざくばらんに仕事等について対話を行うことで、大学生活をどのように過ごすべきかのマインドセットを行うことや県内企業の魅力を知り、県内就職率向上を目指す取組。三重大学会場では、三重大学生21名、三重短期大学生が13名、四日市大学会場では四日市大学生が5名、皇學館大学会場では皇學館大学生が92名参加した。

三重大学会場

三重大学会場では県内企業等を7社招き、1社あたり5～7名程度の学生を割り当てた。企業から簡単な企業紹介があった後、学生は10分程度で様々な質問を社会人になげかけ、時間が終わり次第、次の企業と対話をしていくスタイル。

全ての企業と対話することができるため、特定の業種の考え方に縛られることなく、幅広く社会人の考え方を吸収できるところが特徴。学生からのアンケート評価も高く、平成30年度は複数回実施し、県内企業を知る機会を増やしていくこととした。

【参加企業等】

株式会社光機械製作所、株式会社ドリームエージェント、日本土建株式会社、株式会社ZTV、株式会社ヒラマツ、一般社団法人わくわくスイッチ、三重県



▲三重大学会場の様子

四日市大学会場

四日市大学会場は、三重大学会場で参加した3企業等が四日市大学生5名と様々な対話を行った。方式は三重大学同様で、3企業全てと長時間対話することができたため、実りのある時間となった。

【参加企業等】

株式会社ドリームエージェント、一般社団法人わくわくスイッチ、三重県



▲四日市大学会場の様子

皇學館大学会場

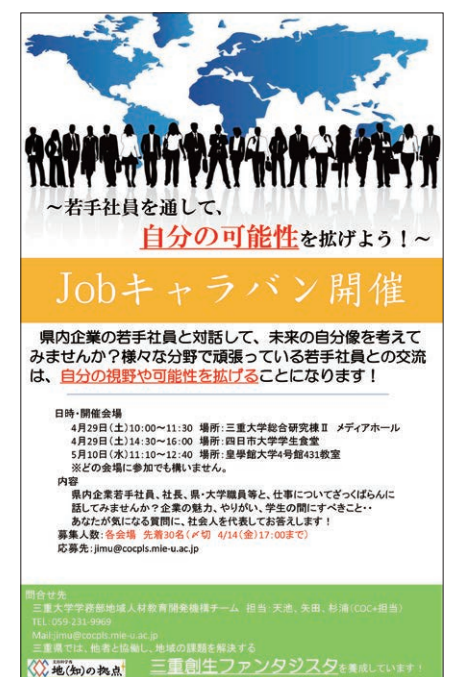
皇學館大学会場では県内企業等を5社(皇學館大学職員は除く)招き、初年次のゼミ授業に位置づけ実施した。三重大学や四日市大学とは異なり、1企業に対し10名程度の学生がじっくりその企業と対話する時間を設けたことで、各種話題が掘り下げられ、その企業の魅力が十分に伝わる取り組みとなった。またファシリテーターとなる各教員が学生に本授業の目的であるキャリア形成に対して気付きを与えるようにすることで、教育効果を伴ったものとなった。

【参加企業等】

有限会社オズ海島遊民くらぶ、株式会社マスヤ、株式会社サン浦島、株式会社尾鷲物産、三重県、皇學館大学職員



▲皇學館大学会場の様子



▲学生募集のポスター

学生の声

○ 理系・文系問わず様々な企業の社員の方々と身近に話ができて、今までは関心をもっていなかった分野の企業にも興味が芽生え、もっと広く深く様々な企業について調べてみたいと思いました。また、どの企業の方も、自分の仕事について、やりがいや苦労したことでも生き生きと話をされていたのがとても印象的でした。これから社会に出て働く中で、大変なことや思うようにならないこともあると思いますが、それも含めて楽しめる、やりがいを感じられるような企業を見つけたいです。(三重大学会場)

インターンシップ受入に関するFD・セミナー

[各種事業・イベント]

県内就職率向上に向けた出口戦略の検討をするため、県内中小企業を中心に教育プログラム開発委員会第2分科会（教育プログラム・ファンタジスタ資格検討分科会）産学WGを平成28年度に設置した。産学WGの検討で、県内就職率向上については県内企業を理解するインターンシップが重要施策になるが、県内企業の中には受入れ方がよく分からない企業も多数存在するという意見から、企業向けのインターンシップ受入セミナーを実施することとした。

効果的なインターンシップとは？

平成29年6月6日（火）三重大学において「効果的なインターンシップとは？」をテーマにFDを行った。講師には一般社団法人わくわくスイッチ代表理事の中村憲和氏をお招きし、実際のインターンシップ事例の紹介やインターンシッププロジェクトの設計方法等をグループワーク形式で検討した。



▲講師の中村氏はCOC+においてもオブザーバーを担っている。

本FDは高等教育機関関係者向けに開催され、教職員11名が参加した。県内企業への受入セミナーの前段として学生を派遣する高等教育機関として必要な知識の修得に努めたことで、平成30年度に実施する教育型インターンシップ「地域発見型インターン」の内容に反映することができた。

企業向けインターンシップ受入セミナー

平成29年7月4日（火）三重県中小企業家同友会事務所にて、「インターンシップ受入セミナー」を開催した。実際に学生のインターンシップ受入を検討している、県内中小企業7社から参加があった。本セミナーでも、一般社団法人わくわくスイッチ代表理事の中村憲和氏をお招きし、インターンシップ先の開拓をすることができた。



▼企業向けセミナーの様子



みえリーディング産業展

[各種事業・イベント]

平成29年10月27日（金）、28日（土）四日市ドームにて開催された「みえリーディング産業展」に出展し、COC+の県内企業への啓発を行った。平成27年度～29年度までのCOC+活動実績をパネル化し、ブース来場者へCOC+の概要説明を行った。28日（土）には地域活動を行う学生団体「三重創生ファンタジスタクラブ（MSFC）」（後述24～35ページ参照）の学生達が事業協働機関2社を取材する等、学生達の成長にも本イベントを位置づけた。

みえリーディング産業展とは？

みえリーディング産業展は、先端分野から地域密着型の産業まで、多様な分野の企業や団体を一堂に集めた、三重県内最大級の産業展示会。県内外の188企業・団体が222ブースを出展し、製品やサービス、技術、研究成果などを展示する。

平成29年度は27日（金）来場者2,951名、28日（土）来場者2,273名、合計5,224名の来場者となった。



▲当日の様子。多くの県内企業関係者が来場する。2年連続で出展した。

ブースでのCOC+啓発

COC+のこれまでの実績を7枚のパネルにまとめ、ブース来場者へCOC+の概要説明を行った。ブース来場者へアンケートをとったところ、まだまだ認知度は高くはないものの、無差別にアンケートした約4割の来場者がCOC+を認知している等、県内へ認知されつつある。



▲来場者アンケート（回答数80）

MSFCによる事業協働機関への取材

MSFC広報チーム（後述33～34ページ参照）がCOC+事業協働機関である、株式会社マスヤと辻製油株式会社へ取材を行った。取材をより良いものにするために、取材する前にどれだけ企業を研究する必要があるか、また学生が知りたい情報を分かりやすく提示するためにはどのような構成で取材内容を記事にするか等、学生同士で切磋琢磨しながら検討し、学生の学びに大きく役立った。



▲スタッフジャンパーで取材する学生の様子

株式会社マスヤ取材記事



辻製油株式会社取材記事



▲参加した広報チームメンバー

COC+シンポジウム

[各種事業・イベント]

平成29年11月26日(日)三重大学 講堂(三翠ホール)において、三重大学COC+シンポジウム「地域イノベーションを推進する三重創生ファンタジスタの養成～明日(みらい)のファンタジスタの現在(いま)～」が開催され、県内大学関係者等232人が参加した。本シンポジウムでは、高知大学の受田浩之 副学長・地域連携推進センター長をお招きし、「地方創生に向けた高知大学の挑戦」と題した基調講演を行った。また、4つのテーマを設定した分科会および学生の地域活動等を報告するポスターセッションが行われ、最後に山本俊彦 理事(教育担当)・副学長により三重大学におけるCOC+の取り組みが紹介された。

シンポジウムの目的・開会挨拶

平成27年度に文部科学省「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」に採択されて以来、COC+では、県内全ての高等教育機関、事業協働機関とともに、地域のイノベーションを推進できる人材「三重創生ファンタジスタ」を養成すべく、教育プログラムの構築、充実に注力してきた。

COC+の中間年にあたる本年は、これまで培ってきた教育プログラムや、各学生団体の地域活動にスポットをあて、特色ある三重大学の取り組みを報告することを目的として、COC+シンポジウム「地域イノベーションを推進する三重創生ファンタジスタの養成～明日(みらい)のファンタジスタの現在(いま)～」を開催した。



▲三重大学長 駒田 美弘



▲三重県副知事 渡邊 信一郎 氏

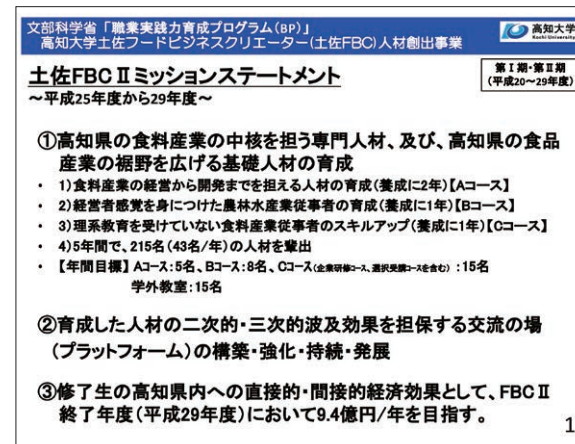
開会あいさつでは、三重大学 駒田学長よりCOC+の目標達成に向けてのオール三重体制で進めていくことが掲げられ、また三重県 渡邊副知事からは、若者の県内定着、地域の活性化・地方創生が果たされるよう三重県もしっかり連携していきたいという言葉をいただいた。

基調講演：地方創生に向けた高知大学の挑戦

基調講演では、高知大学副学長・地域連携推進センター長の受田浩之氏に、「地方創生に向けた高知大学の挑戦」と題して、高知大学の取り組みをご報告いただいた。食品産業の中核人材育成の土佐フードビジネスクリエーター人材創出事業、県内7ブロックの産業振興監のいる本部に大学の教員が常駐するサテライトオフィスなどについて詳しくお話しいただくとともに、COC+の取り組みとして「地方創生推進士」というローカル資格をつくり、地域に対する理解と愛情を有する、自律的で協働能力を持った人材を養成する取り組みや、地域の雇用創出という観点から、観光人材育成カレッジを立ち上げ、若手社員の自律化支援事業等も実施し、雇用創出の推進を図っていることなどをお話しいただいた。



▲高知大学副学長・地域連携推進センター長 受田 浩之 氏



▲説明スライド(一部抜粋)

分科会Ⅰ：地方大学の魅力をどう発信する？学生募集と戦略(講演)

分科会Ⅰでは、株式会社進研アド 改革支援部 岸本直哉氏を講師として迎え、「地方大学の魅力をどう発信する？学生募集と戦略」というテーマで講演していただいた。

今後、大学を取り巻く環境がどのように変化していくか、そのなかで一番重要になるといわれている高大接続改革がどのように影響し、学生を集めていくことができるのか、広報に関しては確かなエビデンスを基にした情報発信の仕方などについてお話しいただいた。



▲株式会社進研アド 岸本 直哉 氏

分科会Ⅱ：全学改組担当職員から見た地域のニーズに対応した教育組織改革のなかで事務職員ができること

分科会Ⅱでは、高知大学法人企画課の宮内卓也氏をお招きし、「全学改組担当職員から見た地域のニーズに対応した教育組織改革のなかで事務職員ができること」と題して、ご講演いただいた。



▲高知大学職員 宮内 卓也 氏

講演では、SPOD(四国地区大学教職員開発ネットワーク)の次世代養成ゼミナールで学んだこと、全学改組担当職員への着任と5年間の取り組み、地域協働学部の設置や「教職協働の観点から見た設置手続き」などについてご報告いただいた。そのなかで、教職協働の重要性や職員に求められているものとは何かについてもお話しいただいた。

分科会Ⅲ：学生にとっての魅力的な働き場とは？学生が地域、産業界に求めるもの

分科会Ⅲでは、社会人2名、学生3名を招き、パネルディスカッション形式で「学生にとっての魅力的な働き場とは？学生が地域、産業界に求めるもの」というテーマについて議論が行われた。冒頭に、雲井 純地域活性化推進コーディネーターより近年の採用動向について報告があり、ディスカッションでは、企業の採用にあたっての課題や要望、インターンシップの状況などについて社会人パネラーから発言があり、学生からは就職に対する率直な思いが述べられた。若者に地元に残ってもらうにあたって、学生があまり地域の企業を知らないという課題があり、地域の優良企業の紹介や情報発信が重要であることなどが、課題として指摘されていた。



▲分科会Ⅲの様子

分科会Ⅳ：高等教育機関との連携が生み出した新しい授業のカタチ

分科会Ⅳでは、平成29年度に県内高等教育機関が連携することによって新たに開設された夏期集中のPBL型授業に関する意見交換をパネルディスカッション形式で行った。平成29年度は「食と観光実践」、「次世代産業実践」、「医療・健康・福祉実践」という3つのPBL型授業のなかで、学生がどのように能力を形成していったか、学習成果を明確化・見える化することを目的にルーブックという評価指標を取り入れた。本分科会ではルーブリックを活用した講義において、教員側・学生側双方の苦労や達成感、今後の課題などについてディスカッションがおこなわれた。



▲分科会Ⅳの様子

学生によるポスターセッション（地域活動等事例報告）

本シンポジウムでは、三重大学、四日市大学、皇學館大学、鈴鹿大学、鈴鹿医療科学大学、鈴鹿工業高等専門学校、鳥羽商船高等専門学校の学生らがそれぞれの地域活動等事例の報告を行った。

ポスターセッションでは参加者の投票で「最も応援したいと感じた地域活動事例」として、三重大学の「29市町PR動画作成プロジェクト Retake」、鳥羽商船高等専門学校の「うみどりーードローンを用いた水産業支援システムー」が選ばれ、表彰を受けるとともにCOC+事業協働機関である株式会社マスヤグループ様より「おにぎりせんべい」が贈呈された。



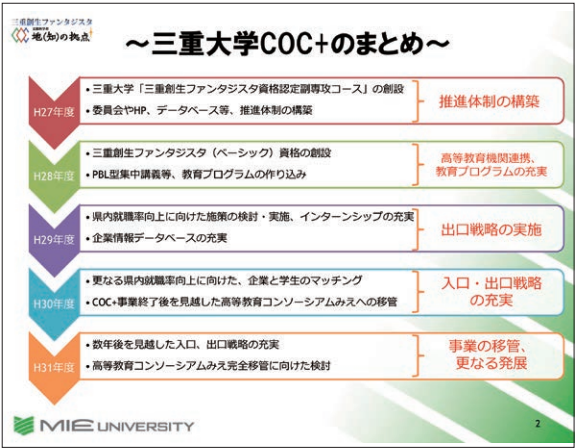
▲ポスターセッションの様子

三重大学COC+の歩み～高等養育機関との連携が生み出した教育プログラム～

最後に、COC+事業推進責任者として、三重大学 山本俊彦理事より「三重大学COC+の歩み」と題して、COC+の取り組み状況、成果等を含めた概略について説明があった。高等教育機関との連携と成果、3つの分科会を中心としたCOC+推進体制、三重創生ファンタジスタ資格の入口・出口戦略、三重創生ファンタジスタクラブの創設、事業終了後のCOC+実施体制として高等教育コンソーシアムみえの創設及び活動事例などが報告された。



▲三重大学理事(教育担当)・副学長 山本 俊彦



▲説明スライド（一部抜粋）

閉会挨拶

閉会の挨拶では、高知大学の受田先生にシンポジウムの講評も含めてご挨拶いただいた。COC+が県内のすべての高等教育機関で進めている取り組みであることを高く評価していただき、学生たちの事例報告には、もう少し遊び心を取り入れると、新しいひらめきやイノベーションにつながるかもしれないというアドバイスをいただいた。

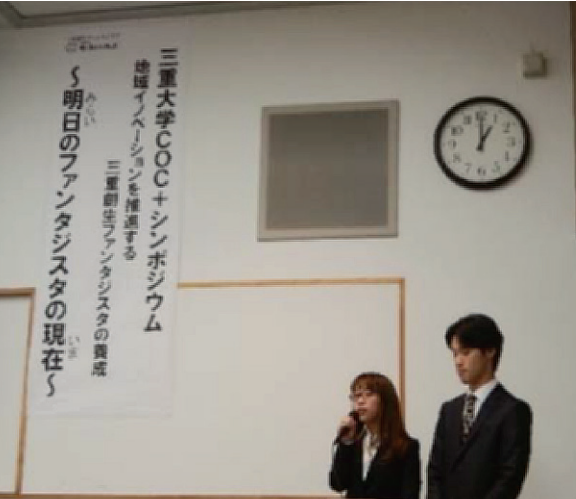
最後に、四日市大学の小林慶太郎副学長より、三重創生ファンタジスタの養成はまだ道半ばであり、どうやってファンタジスタという人材を育てていくのか、質をどう担保するのか、どう評価していくのか、どのように先につなげ役立てていくのかという課題が残されていることをお話しいただき、COC+が終わった後もこの取り組みを三重県に定着させ、各高等教育機関からしっかり地域のことを考え・役立つ学生を続々と県内に送り出せるようになることが大事であるとのことのお言葉をいただいた。



▲四日市大学副学長 小林 慶太郎 氏

学生の声

○ 今回のシンポジウムでは、三重創生ファンタジスタクラブの岡本守永さん（人文学部2年）と井田千尋さん（生物資源学部2年）に総合司会を担当していただいた。このような経験は初めてだということであったが、しっかりと大役を果たし、最後に「地域活動に取り組む学生がたくさんいること、地方創生の取り組みがたくさんあること、またその質の高さに触れたことは、とても励みになりましたし、これからの活動に活かしていきたいと思いました。」と感想を述べてくれた。



▲学生司会の様子

インターンシップトライアル事業

[各種事業・イベント]

国を上げた施策により、全国的に学生のインターンシップへの参加は増加の一途をたどっている。しかしながら一方で、県内高等教育機関の学生に目を向けると、県内企業へのインターンシップ数は多くない。加えて、学生が県内企業について知る機会も少ない。その理由としては複数考えられる。その一つに、県内企業の多くが中小零細のため発信力に欠け、高等教育機関への働きかけや、中長期的な人材の確保・育成などが十分に行えていないのではないかと想定される。

学生の中には、県内地域の各種産業の現場を体験し、将来のキャリアデザインを構築する際に、県内への就職に活路を見出す者もいるはずであり、将来的に地域へ貢献する可能性を大いに秘めている。そこで、県内企業へのインターンシップを通して、学生自身の職業観の醸成や仕事への理解を深める。また、平成30年度以降は単位互換制度の対象である「地域発見型インターン」(後述53ページ参照)の授業を通して、全高等教育機関学生が受講できるようになる。

事業内容と結果

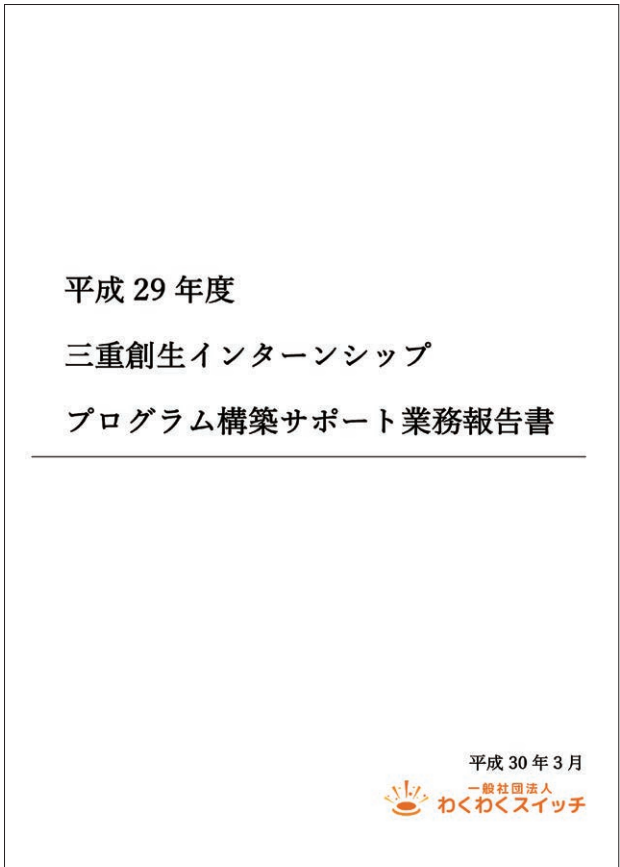
本事業は、1day型のインターンシップをベースとしている。また、採用直結型ではない、キャリア教育的な側面を強化している点に特徴がある。

また、インターンシップのトライアル事業の位置づけに関しては、平成30年度の教養教育での授業化(単位化)を目指しているため、「トライアル」と銘打っている。

取組みの詳細内容に関しては、本事業の連携先である一般社団法人わくわくスイッチの報告書(後述19～23ページ)を参照頂きたい。

結果の概略のみ記すと、本事業に参加した学生の感想としては、概ね高評価を受けている。その理由としては、1日3社(午前1社、午後2社)、それも職種・業種の違う会社を見学できた事、また、会社の社長や若手社員へ直に質疑応答ができた事、これらが学生の心を掴んだようである。当初の目的でもあった県内の中小零細企業と学生の接点を創出できた事は、学生はもとより企業にとっても有益であったといえる。

一方で、1日3社の見学は、企業サイドと学生サイドのマッチングに膨大な時間がかかる事が露呈した。それを踏まえて、平成30年度より実施するインターンシップ授業「地域発見型インターン」は1日2社とし、じっくりと学生に企業を知ってもらうプログラムとする事とした。本トライアル事業には、事業協働機関である「万協製薬株式会社」、「速水林業」に協力いただいた。また、夏期、冬期(各5日)で開催された本事業には、4高等教育機関(三重大学、四日市大学、皇學館大学、鈴鹿大学)の学生延べ41名(院生1名含む)が参加した。



目次	
プログラム概要.....	3
実施概要.....	4
プログラム実施の流れ.....	4
企業開拓・選定の基準.....	4
インターンシップ実施数報告.....	4
事前/事後研修.....	5
インターン実施詳細.....	7
事例紹介.....	9
学生アンケート集計表（別表参照）.....	11
考察および今後の課題.....	12
学生アンケート集計および分析.....	12
所感.....	13
今後の課題.....	13

実施概要				
プログラム実施の流れ				
開発・設計		研修・運用		評価
事業計画策定 プログラム開発	企業開拓 個別プログラム設計補助 学生接客	マッチング	インターンシップ実施 事前研修 夏期および冬期 事後研修 取材 志とめ 報告、評価	アンケート分析 事業報告
企業開拓・選定の基準				
(1) 三重県内に住所を置く中小企業を「ものづくり」「食と観光」「生活サポート」に分類 (2) 三重大生が集合しやすい津もしくは四日市から日帰りでルートが組める地域 「津周辺」「四日市方面」「伊賀方面」「南勢方面」「尾鷲・熊野方面」 (3) 特色のある中小企業 (ア) 社長が面白く、魅力的である。 (イ) 事業もしくはプロジェクトが先進的であったり、特徴がある。 (ウ) メディアなどで取り上げられたり、行政から表彰されたりしている。 (エ) 受入に協力的で受け入れ態勢が整っている。 ※業種によっては、曜日や時期で繁忙期があり、調整が必要であった。				
インターンシップ実施数報告				
	夏期	冬期		
学生数	のべ 19 名	のべ 13 名		
企業数	14 社	13 社		

事前/事後研修

事前研修会の実施

事前研修会の内容：午前中に企業向けのインターンシップ受入れ導入研修を行い、午後からは学生に向けたビジネスマナーやビジネススキルアップ研修を行う。短期間で成果を上げるためのマインドセットとスキルアップの研修を実施する。

時期	時間	対象	内容	ねらい
10:00～	10分	企業	●導入（研修会の流れ説明）	研修の意味付けを行う
10:10～	15分		●アイスブレイク ・グループごとの自己紹介を通してお互いを知る	他者認知を行い場を和ませる
10:40～	30分		●インターンシップ活用セミナー ・インターンシップを効果的に活用する方法について	受入れ方法のコツを理解させる
11:10～	60分	学生	●プロジェクト設計ワーク ・各企業ごとのインターンシッププログラムの詳細を詰めていく	プログラムの型を作り成功イメージを明確にさせる
12:10～	50分		お昼休憩	
13:00～	10分		●導入（研修会の流れ説明）	研修への意味付けを行う
13:10～	20分		●アイスブレイク（ハイタッチで自己紹介） ・より多くの人との自己紹介を通してお互いを知っていく	他者認知を行い、場を和ませる
13:30～	40分		●ビジネスマインドセット研修 ・インターンシップに臨む心構えについて ・ビジネスマナーと安全管理について	受け身な姿勢から主体的な姿勢に
14:10～	40分	学生	●ビジネススキルアップ研修 ・取材スキルアップ研修 ・コミュニケーションスキルアップ研修	方法を学び、社員との関わり方のイメージを作る
14:50～	60分		●業種・職種探求ワークショップ ・三重県の業種や職種についての講座とワークショップ	業種・業界のマクロの視点を広げる
15:50～	30分		●目標設定ワーク ・プログラム参加のキャリア画での目標設定を行う	ゴールを明確にし意欲を高める
16:20～	30分		●振り返り・修了	研修の学びを深く落とし込む

事後研修会の実施

事後研修会の内容：企業と学生が交えた成果報告を行い、分科会を通してそれぞれの学びを落とし込んでいく。終盤の目標設定を通して今回のインターンシップの学びを今後につなげていく。

時期	時間	対象	内容	ねらい
13:00～	10分	学生・企業	●導入（研修会の流れ説明）	研修の意味付けを行う
13:10～	15分		●アイスブレイク（ハイタッチで自己紹介） ・より多くの人との自己紹介を通してお互いの交流を図る	他者認知を行い場を和ませる
13:25～	30分		●成果報告 ・数人の学生から成果報告を行い学びを共有する ・各グループごとの学びの共有	学びを共有し相互に刺激を与え合う
13:55～	60分		●企業・学生に分かれての振り返りワークショップ 【企業】学びを共有する 【学生】振り返りと学びのシェアリングを行う	プレゼンを通しての気づきを深く落とし込む
14:55～	30分		●行動宣言タイム ・学生、企業双方からの今後の目標の発表	アクションを宣言し決意を固める
15:25～	30分	学生・企業	●振り返り、アンケート記入	研修の学びを深く落とし込む
～16:00			●修了	

事例紹介

万協製菓株式会社
経営者 代表
若手社員 代表
学生向け 分科会開催



○多数メディアも報じる『独自の社長の在り方』が顕著に表れる
社長のユニークな考え方、コミュニケーション術により、硬くならず、他にない取材の雰囲気や環境をつくることができた。

○ユニークな『社内改善案』と社員が考える会社の在り方が他企業との大きな差別化である
社内でも見られる社内での取組みや社員のための制度など、独自の在り方を社員も理解し、実際に使われている結果を見せることで、学生に対して他企業との差別化をさせた。

『社長の「自分がやりたいことの先に企業がある」という言葉に納得しました。』『メディアで情報を知っていたが、イメージ通りの会社であるということ。社長に対する、尊敬と信頼を感じた。』『工場内をもっと詳しく見て回りたい。』『フィギュア館への情熱をもっと詳しく社長から聞いてみたい。』

速水林業株式会社
経営者 代表
若手社員 代表
学生向け 分科会開催



○国規模の行政との連携や開発の『実績から業界』を示す
業界の歴史と現状、会社のサービスを詳しく説明する中でパワーポイントを利用して、数字や図によってイメージしづらい煩雑な行政との仕事をわかりやすく伝えた。

○ビジネスだけでなく、アートとして捉える“木材”のなどクリエイティブな『職業観』を伝えることができた
通常のビジネスとしての木材取引だけでなく、独自にLINEスタンプを開発していることや、長期インターンシップの活用による新たな挑戦について等、未来を見据えたクリエイティブな考え方・会社のあり方を伝え、若者の興味を引いた。

『若手の社員さんの、現実的で真摯な働く想いに心が動いた。』『経営者の価値観が他に訪れたところと全く違い、視点が勉強になった。』『作業をしている現場をみる機会があればみたい。』

株松阪電子計算センター

株松阪電子計算センター
経営者 代表
若手社員 代表
学生向け 分科会開催



○大学生を理解した上で、業界の説明と企業の『差別化』が解説できる
パワーポイントを利用して、業界の歴史と現状、御社のサービスを詳しく説明した上で大学生に伝わる言語で松阪電子計算センターの魅力を伝えることができます。

○中期(5日間)・長期(1ヶ月)・企業説明会など学生と一期一会ではなく、明確な『次回アクション』がある
インターンシップの機会や企業説明会があるなど若者がこの企業と繋がりたいと思えば繋がることができ、活動できる機会が提供できます。

『職場見学中、各部署の方々がそれぞれ質問に答えてくださりよく理解できた。』『説明がとても分かりやすく、求めている人材像や展望など具体的にイメージできた。』『もう少し社長に話を聞きたかった。』『ほとんどの人が理系なのかと思っていましたが、文系・理系が半分と知り驚いた。』

株浅井農園

株浅井農園
経営者 代表
若手社員 代表
学生向け 分科会開催



○『グローバル(Global+Local)なビジネス』を体現している
海外の人材やインターンシップ生、新しいビジネスモデル等の話のなかで、地域にとどまらず、日本・世界に広げていく“視点”をプレゼンや過去事例から具体的に“つたえ共感を生んだ”

○『ヴィジョンが明確な経営方針』を可視化・多言語化している
自分たちとはどのような企業で、何が強みで、どんなポリシーを持って、どんなヴィジョンを持っているのかを明確かつ段階的に日本語・英語と図解することで伝えた。

『農業のイメージががらりと変わり、最先端の技術に感動した。』『先代の会社を継ぐにも、起業のような形で大きく方針が変わることもあった。』『社長にお話を聞いてみたかった。』『実際にトマトを食べてみたかった。』

インターン実施紹介

期間	日程	企業名	ジャンル	地域	学年
夏期	8月8日	(株)鹿の湯ホテル	食・観光	菟野町	
		(株)たまや	生活・サポート	四日市	
	8月17日	万協製菓(株)	ものづくり	多気町	3
		(株)プラトンホテル	食・観光	四日市	3
		釜屋(株)	生活・サポート	四日市	3
	8月22日	(株)伊賀の里モクモク手づくりファーム	食・観光	伊賀	2
		三岐鉄道(株)	生活・サポート	富田	M1
		(株)金星堂	ものづくり	桑名	3
	8月23日	尾鷲物産(株)	ものづくり	尾鷲	2
		ホテル季の座	食・観光	紀伊長島	3
		(株)松阪電子計算センター	生活・サポート	松阪	
	9月11日	大玉運輸(株)	生活・サポート	明和町	2
		万協製菓(株)	ものづくり	多気町	3
		(株)浅井農園	食・観光	津市	3
					3
					3
					3
					3

冬期	2月13日				
		三浜紙器(株)	ものづくり	四日市市	
	2月14日	(株)ヴァイティン三重ファミリークラブ	食・観光	桑名市	
		三浜紙器(株)	ものづくり	四日市市	3
		(株)鹿の湯ホテル	食・観光	菟野町	
	2月15日	(株)PlanB	生活・サポート	四日市市	
		(株)松阪電子計算センター	生活・サポート	松阪市	1
		(株)浅井農園	食・観光	津市	3
	2月20日	(株)シラキ	ものづくり	津市	1
		万協製菓(株)	食・観光	多気町	1
		(株)松阪電子計算センター	生活・サポート	松阪市	3
	2月21日	(株)ヒラマツ	ものづくり	津市	2
		(株)喜場	食・観光	津市	2
		大玉運輸(株)	生活・サポート	松阪市	2
		速水林業	ものづくり	津市	1
					2
					2

※参加学生は、各日程3社ずつ訪問するプログラムとなっております。

学生アンケート集計表（別表参照）

考察および今後の課題

学生アンケート集計および分析

(1)参加満足度

本プログラムに参加した学生の満足度は非常に高く全参加者から回収したアンケートの平均値は5段階評価中4.7であった。大学1年次から大学院1年次まで全般的に高評価であった。

(2)参加動機

参加の理由として1日に3社回れるという声が多かった。自分では中々選ばない業種や全く違う業種を1日で回るといふ点や企業の社長と直接的に会って話せることなどが決め手になって参加したという声などがでた。

(3)プログラム効果

(ア)中小企業への認知度の変化： 参加前 2.1 → 参加後 4.1

プログラムに参加しての変化の中でもっとも数値の変化が大きかった。また三項目の中で参加前の数値が最も低かったという点でもいかに地域の中小企業が知られていないかということが分かる結果となった。

(イ)中小企業への関心度の変化： 参加前 3.0 → 参加後 4.6

参加前の数値は、5段階中3と低くないもの決して高いものではなかった。しかし、参加後の興味は非常にあり、4.6という数字は特色のある地域企業を選定したという背景があるにしろ、驚異的な高さであると言える。

(ウ)中小企業への就職へのモチベーションの変化： 参加前 2.6 → 参加後 4.3

訪問した企業もしくは地域の中小企業にインターンシップや企業説明会など前向きな行動がプログラム参加前後で変化があったかを確認したが、この数値も1.7ポイント増え4.3と非常に高い数値となった。また本プログラム参加後の希望を聞いたところ、面談や説明会に参加したいなどポジティブな反応を示した参加者が39人中22人と過半数を超え、インターンや訪問先企業の説明会を受けてみたいなどの声が出たのは本プログラムの成果と言える。

所感

本学生の職業観を醸成することおよび地域の中小企業への興味関心を引き出すことに本プログラムが高い効果をもたらすことがアンケート結果などからわかった。特に就職活動を本格的に始める前の低学年時にこうしたプログラムに参加することによって将来のキャリアの選択肢が地域の企業にも広がると思われる。プログラムの設計に関しては、学生に興味を持ってもらうと共にキャリア教育の効果が上がるように様々な工夫を凝らした。特に1日という非常に短時間で学習効果を高める為に、従来のバスツアーのような単なる企業の見学で終わらせないために主体的にプログラムに取り組めるよう取材という要素を取り込んだ。事前学習で取材の仕方や名刺交換などのビジネスマナーなどのスキル面、地域の中小企業の産業構造や訪問先企業の基本情報などを調べる知識面、地域で「はたらく」「くらす」について考えてもらうキャリア面での研修を実施し、プログラム当日は、車中でコーディネーターが一人一人の興味関心に合わせてフォローした。また事後学習では、合同研修の中で取材内容をプレゼンしたり、感想を共有することによって、自分以外の参加者の学びを共有する機会などを創出した。

今後の課題

本プログラムの継続的な実施および改善には、受入を実施してくれる地域の企業側の協力を引き出し、企業にとつての満足度を上げることが必要不可欠である。企業にとっては、採用活動につなげたい、認知度を上げたいというニーズがあるものの受け入れ体制が十分整っていない、繁忙期と重なるなど1日とは言え、負担が伴うことも多い。日程などの調整ももちろんだが、学生へいかに魅力的に紹介できるかのアドバイスや学生からのフィードバックを丁寧に返すなどした個別の対応が必要であると思われる。これは学生へのフォローも同様であり、1週間や1ヶ月のインターンシップなどと同様に個別面談などを実施し、学生の興味・関心や指向性に合わせて企業とマッチングしたり、その後のフォローが重要になってくると思われる。そういった意味においては、今回実施した体制にあるようにコーディネーターという立場の存在が丁寧にプログラムを実施する上では重要であると考えられる。今後は、プログラムの質を担保しつつ、どう運営面を効率化・仕組化させ、持続的かつある程度の規模で実施していくかが課題になると思われる。

平成29年度三重大学「三重創生インターンシップ」学生アンケート集計表

●【短期インターンシップの実施】 夏期アンケート集計（学生向け）

日付	学年	満足度 （5点満点）	理由	本日参加して、地域の中小企業に対する変化（5点満点）						その他地域の中小企業に対する印象で、特に変化したと 思うポイント
				①参加前の認知 度	参加後の認知 度	②参加前の 興味度	参加後の興味 度	③参加前の 動機	参加後の動 機	
8月8日	3	5	どの中小企業も、社員の人々のやりたいことの幅が広いところが、やりがいにつながっていると分かりました。また、疑問に思うことも、積極的に質問ができました	2	3	3	3	3	4	
8月17日	3	5	1日で3つの職種を回るという貴重な体験ができたから	2	4	3	5	3	4	社長と社員との距離感が想像以上に近かった
	1	5	3つの企業に回れて、さらにそれぞれ社長と社員から貴重でためになるお話を聞くことができた。色んな人と交流ができた。	3	4	4	5	3	4	社長と社員の距離の近さに驚いた。社員のことをきっちり考えた企業だった。
	3	5	訪問した企業はどこも面白く、とても興味が湧いた。今後もうこういった活動があれば是非参加したい。	3	5	2	5	1	5	万倍製造さんのように、前向きに挑戦する企業があるということを知った。
	3	4		3	4	4	4	2	4	
8月22日	3	4	一日で三社もまわるのができ、とても有意義でした。もっと時間があればさらに見学できたと思います。	4	5	3	5	4	4	中小企業でもそれぞれの方々がやりがいをもって働いていました。
	3	5	仕事についてなかなか真剣に考えることがなかったのも、いい機会になった。いい出会いになった。	1	4	2	4	3	3	知らないだけで、もっとほかにもいい企業があるんじゃないかと思えたこと。
	11	4		3	4	3	4	4	5	
	2	4	社長さん、社員さんと直接お話しできる。行動時間ゆとりがあると嬉しい。	2	4	1	3	1	3	「これをやりたからこの会社に入る」という気持ちは必須でなく、1つの就職先からいろいろな仕事をもらえるのだと思った。
8月23日	2	5	仕事のやりがい、その職場だからことができることがあって魅力的だった。	1	3	1	4	1	5	IT企業の中にも勉強会を盛らせてくれる所もあるので文系だからといって避けない。
	3	5	色々な業種を知りイメージも大きく変わったから。	2	5	3	4	3	5	
9月11日	3	5	3社回ることによって、それぞれの企業の雰囲気など感じることができた。	2	4	2	5	2	5	社員に寄り添ってくれる企業だと感じた。
	3	5	1日で3社も社長さんや社員さんの生の声が聴けてととても有意義な一日になりました。	3	4	3	5	3	4	
	3	4	3社とも訪問前にイメージしていた会社とは全然違い、自由に意見する機会があったり、働きやすい環境にあることにも興味を抱いた。	1	4	4	5	2	4	地域に密着した会社であると感じた。
	3	5	様々な業種で活躍するための工夫を知ることができた。	3	5	4	5	4	5	社長と社員の距離が近く感じた。
	3	5	実際に社長に直接話を聞く機会なんてめったにないし、いろいろな話が聞けたから。	2	5	3	5	2	5	中小企業ならではのオリジナリティや工夫があることを初めて知った。
	3	5	魅力的な企業があることを知ることができてよかったです。今後の就活に役立ちそうだと思います。	1	3	3	5	3	5	とても忙しい印象をもっていたが、意外と社員が満足して働いているとそうだった。
	3	5	選択肢が広がった。もっと調べてみようと思った。	1	3	4	5	1	5	専門の何かに特化していれば、やっていける
	2	5	会社で働くことがどんなことなのか、様々な企業を訪問し、つかむことができたと思う。	2	4	2	5	3	4	社員さんが生き生きしている

【短期インターンシップの実施】 冬期アンケート集計（学生向け）

2月13日	2	5	1日で3社見学でき、あまり興味のない業界でも知ることができ、ためになった。	1	4	4	5	3	5	トラック輸送の重要性がわかりました。
2月14日	3	4	三社の経営についての姿勢・信念がよく分かった。実際の仕事の現場ももっと見たかった	2	5	2	4	3	5	従業員さんたちの意識の高さに驚いた
2月15日	1	5	それぞれ違った職種が見れて楽しかったこともありますが、一番は三社共通しているのが「挑戦すること」を大切にしていることがわかったからです。	2	4	3	5	2	3	大企業のための商品を作っていると考えていましたが、中小企業自体が働いているということです。
	1	4	初回のイメージとだいぶ違った企業が多く、新たな視点が広がりました。	2	4	3	4	3	4	中小企業ならではの強みを活かした経営があることに改めて気づかれました。
	3	5	ただ単に説明を聞くだけでなく、質問することを意識しながら話を聞くことに重きをおきました。	1	5	5	5	5	5	地域に根差した活動だけでなく、世界に視野を入れた事業をされていること
2月20日	1	4	一番はプログラミングに足を踏み入れるきっかけを与えてくれたことです。	3	4	3	5	3	4	知らないだけで魅力的な会社が多い。
	4	5	3社とも全く違う経営・業種の方で、会社といっても様々なタイプがあると気づくことができて良かったです。	4	5	4	5	1	4	地域の企業の魅力が社長や社員の方から聞くことができ、知らない魅力のある企業を探したいと思いました。
	2	5	初めて会社の中を見て、直接経営者の方から話を聞くだけでなく、なんでも質問できる機会というのが初めてだったのでいい経験でした。	1	4	1	4	1	3	中小とか大企業とか、正直違いを考えることがなかったけど、会社を引っ張っていく社長との距離が近いことは、周りに仕事への意欲を伝えていくことになると思うし、面白いと思った。
2月21日	2	5	経営者の方や社員の方の話を聞くことができて、働くことはネガティブな要素ばかりじゃないことがわかった。	1	4	2	4	1	4	大企業と言われる企業だけが良い企業ではないと思った。
	2	5	様々な業界の情報や、社会に出て必要な心構えを知れた。	1	3	4	5	2	3	
	2	5	正直なところ、思っていたより充実した1日でした。今日参加しなければ、衣袋で食うことの無いからで、社長さんと深い話ができて、とても良い機会になりました。	3	4	4	5	5	5	自分が詳しく知らない業界のことを知ったことにより、自分の持っていた、何となくの認識を大幅に違うということが意外あるんだなあと思いました。
夏期および冬期平均値		4.7		2.1	4.1	3.0	4.6	2.6	4.3	

本日のイベントで印象に残っている言葉・場面	興味の5段階評価			その中で特に興味関心があがった/面白かった部分	プログラムに対する要望や、質問、提案等	今後のネクストアクションについて			
	ものづくり	食と観光	生活サポート			コーディネーターとお話したい・相談に乗ってほしい	インターンシップに挑戦したい	転職を検討に入られて、今日の企業やほかの企業の会社説明会などに参加してほしい	各種イベントやセミナーを紹介してほしい
どの企業でも、実際の社内見学をさせて頂いた場面が、特に印象に残りました。中小企業の仕事現場は、なかなか向う側金はないと思ったからです	4	2	2	企業の経営者や社員さんの思いや力をいれていることについて直にお話を聞くことで、業界のギャップについて知ることができました。					
万倍製造の社長が社員に怒らないと断言していたこと。社員を怒っても成長しないと書いていて面白かった。	3	5	5	観光はあまり興味なかったが、興味が湧いてきた					
社長と社員の話。聞きたいところをきき聞けた。人生のお話が深かった。	5	5	5	社長と社員の生の話。社長の信念など	プログラムに参加する目的が、まずは、色々な企業を知ることなのでそれは達成されたいと思います。しかし、先生方が印ったようにもっと積極的に参加することも大切なのだと思いました。				○
社員の意見はどんなことも聞くのが大事である、コミュニケーションやチームワークが働く上で重要である。	5	5	4	松崎社長の経験を読んでいく、逆ドラミッドを作っていくなどとても変わった、そして重要な経営観が面白かった。		○	○		○
今回行ったどの企業も、社員を大事にしていて、私が考えていた企業のイメージと違ったので印象的でした。	4	4	4	万倍製造の社長さんのお話で、「学べる社会」というのが良いと思いました。	事前研修をしかりしてほしい				○
経営の面だけでなく、創業の歴史的な流れも知ることができ、生の話を聞いて価値観を共有できました。	4	4	3	金産堂では社長さんが工場案内をしてくださって、気軽なお話のできたので社風を知ることが一番面白かったです。	時間にもう少し余裕を持ってほしい。		○		○
社長さんの言葉はどれも面白かったですが、「やりがいは自分で見つける！」というのにはハッとしました。	1	5	2	もくもくファームの社風が特にいいなと思った。遠くまでふれあいを身近に感じられる仕事がいいなあと感じました。			○		
消費者のニーズを満たしたもくもくファームがいいなあと思います。社長たちのメッセージも勉強になりました。	5	5	5	観光農業です	いいとおもいます。特にないです。				
どの企業も安心安全を第一に考えている。	3	4	5	鉄道会社でもSA、レストラン、不動産など、様々な取り組みを行っている1つにとらわれないのだとわかり、面白いと思った。			○		
どの企業の社員さんも自分の努力が目に見えて実ったとき、すごく嬉しいように話していた。	4	4	4	転職に対しポジティブになった。（わりと多い。）やりたいことをやっている社員さんは話していた。			○		○
	5	5	5	卒の場で協定だけでなく、貿易事業もやっていたり、地域の活性化にも、とても貢献していること。					○
社員の企業に対する満足度が高ければ企業の成長につながるという内容にとっても共感できたし、そのようなポリシーを持っている企業に入りたいと思った。	5	4	3	自分たちで新しいもの/興味のあるものを作り出すための研究をしていることに興味が上がった。	またよろしくお願いします。	○	○	○	○
大玉運輸さんと、万倍製造さんが特に社長さんと社員さんのつながりが強いという印象を受けました。社長さんが社員さんの声を直接聞くというのとはとても魅力的だと思いました。	4	4	2	今まで農業はあまり視野に入れていなかったのですが、浅井農園さんのように最新の技術を取り入れて仕事をしているところがあると知り、興味がわきました。	丸亀産業さんなど、食品メーカーも見てみたいですが。				
社長がどんな人か聞くことで、その会社の色が変わるということがとても印象に残っており、今後インターンシップをする際に社長について質問しようと思った。	5	4	3	ジョブローテーションを行い、オールマイティな人材を作る。	今後もインターンシップに参加したいです。	○	○	○	○
「たぐさんの会社を見たい」実際に話を聞かなければわからない会社の実態を知ることが重要だと感じたから。	5	5	4	特に農業の話を聞いて、人に喜ばれる農作物を作ることに興味を持った。			○		
「スーパーマンよりスーパーチームを作る」実際に個人ではなく、社員旅行等にお金を払い働きやすい環境を整えている。	5	5	4	浅井農園さんの野菜についてもっと具体的にどんな工夫をしているのかも聞いてみたいですが。		○	○	○	○
人を育てることが企業の使命という言葉を自分の心をつかんだと思います。とても素晴らしい経営をされているんだと思いました。	5	4	5	農業だけでなく特産品でないことまで知ることができた。運送業で海外と女性が多いという話も、農業で研究開発が盛んなところでした。		○	○	○（一か月以内）	○
お食事は軽くなるけど、知識経験は消えない。	5	5	1	万倍さんの社員へのおもてなし。浅井農園の海外展開	万倍製造・浅井農園さんでのインターンシップを絶えずほしい。そのほかシゴトラベルを開発してほしい（丸亀産業、ミルボン、おやつカンパニーなど）	○	○	○	○
大学でやりたいことがあれば、それに情熱を注いでおくこと。勉強しておく、遊ぶなど、時間を有効活用すること。	5	4	3	顧客ニーズに合わせたものづくり	話をしてくださっていることに対して掘り下げて質問するコツ、工夫とかがあれば知っておきたかったです。		○		

学ぶことをためらうことをやめなければならない。教育を学んでいるのもあり、まさにその通りだと考えさせられた。	3	5	4	ヴィアティン三重、もともと興味があったが実際に見て、知ることがさらに興味を持った。					
どの企業もお金を稼ぐだけでなく、人のために仕事をしている	4	4	5	どのような人と一緒に仕事をしたか					
各企業の社員に対するアドバイスが今の自分を鼓舞するのにもとても影響を受けたからです。	4	3	4	ものづくりでさらに行政がスムーズにいけるようなソフトウェアを考えてみたい。生活サポートでは落ち込みの業界を復活する方法を考えてみたいと思いました。		○（一週間）			
環境や文化や今やっている学習に関係なく様々なことに挑戦している可能性があることに気づきました。	4	3	4	生活サポート分野					○
相手に何か聞きたいことをされたら反応する（浅井農園、野村様）自分の中では積極的に質問をしたつもりだったが、質問の自分のふるまいをそれに近づけていかねばならないと感じました。	5	5	5	ものづくりの分野では文壇の環境が思っていたより小さかった	何日か事前研修の日程を設けていただけたとありがたいと思いました。				
「自分がやりたいことの先に企業がある」これまで企業に興味があるだけだったが、まず自分のやりたいことを考え、その上で必要であれば企業という手段を講ずると思った。	4	4	5	プログラミング	1社の面白い社長にとことんついてカバン持ちするインターンがしたい。		○5日間松阪電子計算センター		
1問1答でなく、繋げて質問することで、深く知ることができるとのこと。	4	5	3	万倍さんは、経営者の魅力があり、松坂さんは1分野の今後の話が面白く、ヒラマツさんは、物作りと人づくりの大切さが印象的でした。			○		
それぞれ社長さんの考え方は異なるけども、どの方も働く人の技術を引き出していく社長との距離が近いことは、周りに仕事への意欲を伝えていくことになると思うし、面白いと思った。	3	4	3	IT業界に関しては、本当に興味があったので、自分でもできる仕事だったり、実は女性が多いところがあると知って、興味が上がったという。できた。			○		
一番の失敗は、やらないこと。自分はやる前に色々理由をつけてやらないことが多いから。	4	4	4	3社とも、雰囲気良くなくて話も面白くなくて、働くことに見て興味が出てきた。					
「何もやらないことが本当の失敗」理由、自分から積極的に聞いて情報を手に入れることがとても重要だとよくわかったから。	3	3	4	林業：自分の持っていたイメージが偏見だと気づくことができ。「環境管理」にはどのようなことをやっているか興味があった。林業の実態についても深く調べて見た。				○	
事務所の社長さんの原動力があるというより日々奮闘して、成長しているから、改めて見入っているという趣旨に言葉が一番印象に残っています。自分も早速でPDAサイクルを回して、日々成長することはできると思うので、挑戦していこうと思います。	5	5	4	物流に付加価値をつけている大玉運輸さんの話が面白かったです。物流業界の新たな可能性を感じました。					○
				4.2	4.3	3.8			

三重創生ファンタジスタクラブ 木曽岬わいわい隊

[学生団体]

本取組みは、三重県北勢地域に位置する木曽岬町と三重大学が協働し、将来、地域で活躍できる人材を育成するためのプログラム作りを目的としたものである。その中、三重創生ファンタジスタクラブ(MSFC)内に、「木曽岬わいわい隊」という組織を立ち上げ、学生有志を募り、活動を開始した。具体的には、「町内の中学生 - 町外の大学生(木曽岬わいわい隊) - 町役場の若手職員」が多世代の混成チームを作り、中学生が中心となって、町内で活躍する大人たちを「取材」し、その内容を「編集」し、にぎわい市(=木曽岬わいわい市場)において町民の前で「発表」といった内容のプログラムを実施した。中学生、大学生総勢約20名が本プログラムに参加した。

背景と目的

近年、町役場が、町民・中学生に対して実施したアンケートにおいて、中学生のうち、約1割しか木曽岬町に積極的に「住み続けたい」と考えていないという結果が出た。そこで、役場では、このような結果がでた背景として、次のような背景や仮説をたてた。

【背景】

◆ 木曽岬町内には高等学校以上の教育機関がなく、小学校、中学校も一校ずつしか存在しない。中学校まで、ほぼ同じメンバーで進級し、町外の高等学校に進学するため、中学校卒業を界に「中学校卒業の壁」ともいうべき町との接点に断絶が起きてしまう。

◆ 就職、結婚といったライフイベントがおこる20・30代前半の町外転出者が多く、中学生たちにとって、若者との接点が少ない。

【仮説】

木曽岬の中学生が大人たちとの接点が少ないため、親族以外で町に住み続けるロールモデルが見つけにくく、町でのキャリア形成や自己実現をイメージできないのではないか。それであれば、その大人たちとの接点を設ければ状況が好転する兆しが得られるのではないか。

以上より、本取組みでは、町民、特に中学生を主体とし、その活動を木曽岬中学校だけではなく、町内で活躍する大人たち、町外の大学生(木曽岬わいわい隊)が支え、地域ぐるみで人を育てる模擬体験の場を作る事を

目的とした。また、プログラム全体を通じて、中学生は、地域社会との連携・協働により主体的・対話的な深い学びを得られる事につながり、大学生は支援者としてのスキルアップの場となるという副次的な効果も獲得できる事を目的とした。

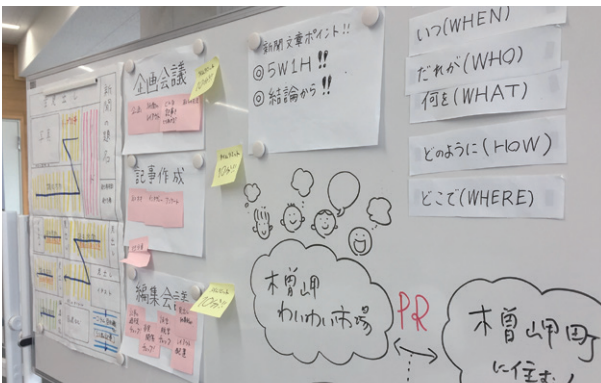
取組み内容と結果

本取組みは、木曽岬中学校の生徒であるジュニアPR大使にソーシャルビジネスを実践的に学ぶ場を提供した。具体的には、町内で働く生産者や事業者の方々を取材し、商品を仕入れ、値段をつけ、販売するという取組みと、オリジナルの名刺の制作と販売という取組みの2本の柱を実施した。

木曽岬わいわい隊のメンバーにおいては、メンタリングやコーチングのスキルを使って、ジュニアPR大使を支え続けた。結果として、それらの行為を通して、彼ら自身のスキルの向上につながっていった。

本取組みを通して、大切にしてきた事は、本プログラムを通じて、地域社会との協働により、ジュニアPR大使が主体的・対話的な深い学びを得られるよう促してきたことである。その甲斐もあってか、ジュニアPR大使は、物怖じせずに販売を実施し、動画の撮影では堂々たるコメントを残せるまでに成長した。彼らの成長や学びを主軸に置きながら地域活性化に繋げる施策は、木曽岬町が他地域に誇れるユニークな点となってきたと確信している。

▼「スキルセットセミナー」活動の様子



▼「木曽岬わいわい広場」活動の様子



学生の声(ブログより一部抜粋)

タイトル「1年の区切り、そして次の1年へ」

.....

ジュニアPR大使ブースにもお客さんが集まります。中学生は自分たちで野菜について説明したり、代金を受け取りっておつりを渡したり、しっかりお店を自分たちで運営することができました！そのおかげか、午前中で野菜・のり、どちらも全て売り切ることができました！！

また、出店と並行して、中学生は出店者の方にインタビューをすることになっており、今回出店されている約40店舗の中から、3店舗のブースへ行き、館内で生放送といった形でインタビューを行いました！

そのときにインタビューをしていたひとりの中学生の話を少しします。

その子は、1年前、初めて木曽岬わいわい市場が開催されたときから、ジュニアPR大使として関わっていた子でした。

その子はその頃、全然自分から話せなかった子だったんです。その子が今僕の目の前で、自分から話を振って、返ってきた答えにもさらにコメントを返して・・・といった流れを自然とすることができていたんですね。1年前の姿からは想像できないくらいに成長していたなと思いました。

思わず涙があふれました。1年間一緒に活動してきて、こんなに成長できたこと。それを見てると僕ら木曽岬わいわい隊も嬉しい限りです。

他の子も、1年前とは比べものにならないくらい、ものすごく成長したなと感じます。たった1年。これだけでも大きな成長ができるんだと。自分ではない、他の子の成長に関われる。言ってしまうと、その子の人生のピースを一つ埋めるお手伝いができた。これほど、誇りに思えることはないなと思います。

.....

全文はこちらから



<成果物>

・「キシサキのコノサキ」：プロジェクト冊子
・PR動画2本(「木曽岬わいわい市場に関して」「ジュニアPR大使の活動」)

三重創生ファンタジスタクラブ Retake 三重から魅^み重^えへ

[学生団体]

三重創生ファンタジスタクラブ（MSFC）が発足し、PR動画撮影チームが「Retake」という名前で結成された。チームの目的は、三重県内の魅力を再発見し、映像媒体を用いて世の中に発信していくことである。

メンバーは3人の大学1年生であり、素人ながらも地域住民と交流しながら、地域の魅力を自分たちで見つけて取材・撮影している。今年度の対象地域は、木曽岬町、御浜町の2地域である。

まち歩き

地域の映像を作成する前に、学生たちはまち歩きを実施している。自らの足でその地域の魅力を感じ、映像に活かすことができた。今年度は2地域を対象に活動していたため。それぞれの地域で地元の方と交流しつつ、町の良さ、暖かさなどに触れた。

▼木曽岬町取材の様子



▲御浜町取材の様子

撮影の様子

撮影等はまち歩きから学生たちが感じたことをテーマに設定し、監督からカメラマンまですべて自分たちで行った。初めてのことで苦戦も多かったが、最後までやり遂げることで大きな経験となった。

さらに地域の様々な活動をする大人と交流することで彼らも自分なりの学びを見つけることができた。

中にはチームの活動外で現地のボランティア等に参加したいと、地域と深くかかわりたいと希望するメンバーも出てきた。



▲インタビューの様子

主な成果

COC+シンポジウムでポスター発表（11/26）、みえまちキャンパスでポスター発表（2/12）、中部地区COC事業採択校「学生交流会」で活動報告（3/1）、木曽岬町へ動画提出、御浜町へ動画提出

学生の声

○ 今まで自分が知らなかった地域について積極的に調査したおかげで、自分の世界が格段に広がったと感じます。また、地域の人々と交流する重要性や彼らの人間的な温かさを肌で感じられました。

○ 今年度市町村のPR動画を作成していくという活動を通じて、市町村の魅力を発掘するために必要な多角的な視点、またいかにして効果的なPRをしていくかというアピール力を得ることが出来ました。また、自分の目や耳で三重県の情景や現地に住む人々の声を直接聞くことで、より直感的に三重県の魅力や現状の課題を認識することができました。

○ 地域を訪れ、そこに暮らす人と会話をすることでコミュニケーション力が身についたと思います。また、三重県の地方のことを知ることもできたと思います。魅力ある田舎が三重県にあることを知ることができました。

御浜町取材・PR動画



木曽岬町取材・PR動画



三重創生ファンタジスタクラブ 三重もちもちプロジェクト

[学生団体]

「三重もちもちプロジェクト」は、三重県の餅菓子を通じて三重県を活性化するには何が必要なのかを考える取組みを行ってきた。

メンバーは人文学部、医学部、生物資源学部に所属する1、2年生4名である。1年間の活動の取組みを紹介する。

三重大学教職員・学生への餅菓子消費アンケートの企画・実施・分析（4月～8月）

メンバーは、図書館での調べ学習等を通じて、①三重県の餅菓子は高齢者層にはよく食べられているが、若者にはあまり食べられていないのではないのではないか?、②三重県の餅は県内で比較的知れ渡っているが、県外の人にはほとんど知れ渡っていないのではないのか?という2つの仮説を立て、三重大学教職員・学生へアンケートを行った。

アンケートの結果、①について名物餅の種類によって差があり、赤福餅やへんば餅、安永餅やなが餅のように、一部の餅では食べたことのある人の割合が若者において圧倒的に高いことが判明した(図1)。②については、県内出身者よりも県外出身の方が名物餅を知らない可能性が高いことが判明した(図2)。

三重大学関係者各位

平成 29 年 7 月 吉日
三重創生ファンタジスタクラブ 餅チーム
岡本大和・樺仁美・藤田彩花・城田香織

「三重県の餅菓子」に関するアンケートのお願い

拝啓

盛夏のみぎり、皆様にはますますご健勝のこととお喜び申し上げます。
私たち「三重創生ファンタジスタクラブ」は、三重県における持続可能な地域の活性化と開発の推進を目的とする学生団体です。本年度より活動を開始し、現在は三重大学を中心に活動しています。その中でも「三重の食：餅プロジェクト」（通称：餅チーム）では、餅菓子を通じて三重県の食文化が抱える課題を引き出し、三重県の産業を活性化させることを目的として活動しています。このアンケートは、三重県に多く存在する餅菓子を県の新たな魅力としてPRするため、餅菓子を中心とした菓子類に対する皆様のご意見を伺い、三重県の餅菓子の現状を把握するためのものです。今回の調査で得られた結果をもとに考察を行い、課題並びに解決策の提示、次世代への継承に繋げたいと考えております。

尚、アンケートの回答は統計的に処理されるため、特定の個人が識別できる情報として公表されることはありません。ご安心下さい。
回答の目安時間は5分ほどです。ご多用中恐れ入りますが、7月30日までにご回答のほど、何卒宜しくお願い致します。

敬具

記

- 目的：三重県の餅菓子を中心とした菓子類についての意識調査を行い、得られた情報をもとに三重県の餅菓子が抱える課題並びに解決策を提示することによって、次世代への継承に繋げる。
- 対象：三重大学学生及び教職員の皆様
- 調査対象期日：平成29年7月1日時点 ※年齢等は左記の時点のものをお書きください。
- 回答締切：7月30日
- 個人情報取り扱い：アンケートの回答は統計的に処理されます。特定の個人が識別できる情報として公表されることはありません。
- その他：本アンケートは、紙媒体とメールで実施しています。どちらかにお答えいただいた方は2度お答えしていただく必要はありません。

以上

【調査・団体にに関する問い合わせ先】
三重創生ファンタジスタクラブ 餅チーム
岡本大和・樺仁美・藤田彩花・城田香織
(担当教員：地域人材教育開発機構 佐藤彩子)
E-mail: miemochi18@gmail.com

件名：餅菓子に関するアンケート調査ご協力のお願い

三重大学教職員・学生の皆様

はじめまして。私たちは、三重県を舞台に地域活動を行う三重創生ファンタジスタクラブにおいて、「三重県の餅と地域活性化」というテーマを掲げ、三重県の餅を調査し、その魅力を情報発信していくことを目的に活動しています。それに関連して、①三重県の餅菓子は若者にはあまり食べられていないのではないのではないか、②三重県の餅菓子は県外ではほとんど知られていないのではないのか、という2つの仮説を立て、若者や三重県外の方が三重県の餅菓子についてどう思っているのかを調査したいと考えています。皆様のご協力は、三重県のごくから浸透する餅文化の継承を担うに資するという点で深刻であり、ぜひともその実態を確かめるとともに、次世代への餅文化を継承するための方策を考えたいと思っています。そこで、お忙しい中恐縮ですが、ぜひアンケートにご協力いただければ幸いです。

↓アクセスするとアンケートが開きます
教職員の方：https://goo.gl/forms/oxo0K6Nzww1Y3P03

学生の方：https://goo.gl/forms/0FffcTR8JmHh18P2

尚、アンケート回答に要する時間は約5分です。7月30日までにご回答をお願い致します。アンケート項目に記入された事項はすべて統計的に処理を行うため、個人が特定されることはありません。ご安心下さい。また、本アンケートは紙媒体とメールで実施しています。どちらかにお答えいただいた方は2度お答えしていただく必要はありません。調査に対して、ご質問等がございましたら、下記の問い合わせ先までご連絡いただければ幸いです。ご協力のほど、何卒宜しくお願い致します。

三重創生ファンタジスタクラブ 餅チーム
岡本大和・樺仁美・藤田彩花・城田香織
(担当教員：地域人材教育開発機構 佐藤彩子)
E-mail: miemochi18@gmail.com

↓三重創生ファンタジスタクラブについて、さらに詳しく知りたい方は↓
学生ブログー http://www.cocpis.mie-u.ac.jp/chuki/blogs-by-students/
Twitterー https://twitter.com/MieSFC

▲学生によるアンケート実施文（左：紙媒体、右：web）

アンケート実施概要

◆実施期間：平成29年7月20日～31日 ◆方法：紙媒体、もしくはweb ◆対象者数：三重大学教職員81人、学生841人 ◆有効回答数（率）：三重大学教職員71人（87.7%）、学生91人（10.8%）

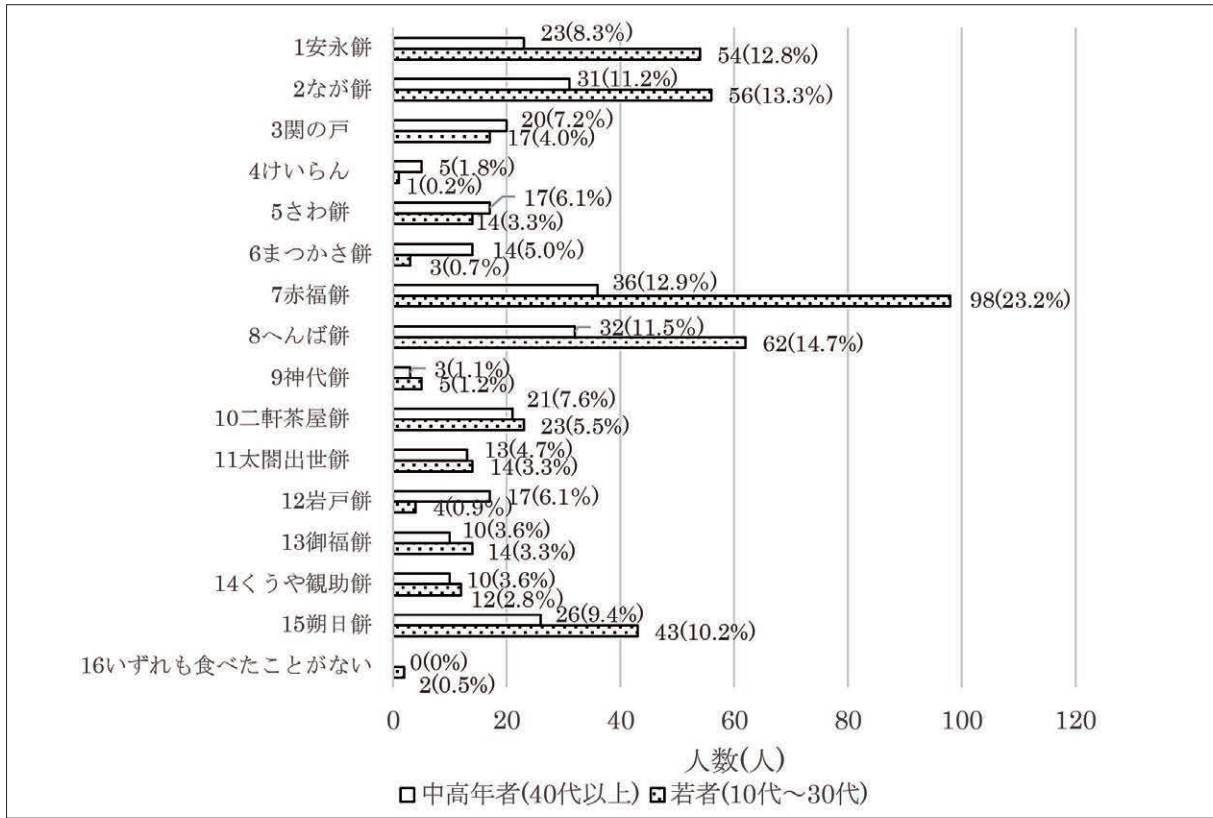


図1 食べたことのある名物餅別年齢別構成比

参考：回答延べ人数 若者（10～30代）422人（60.3%）、中高年者（40代以上）278人（39.7%）、計700人（100%）

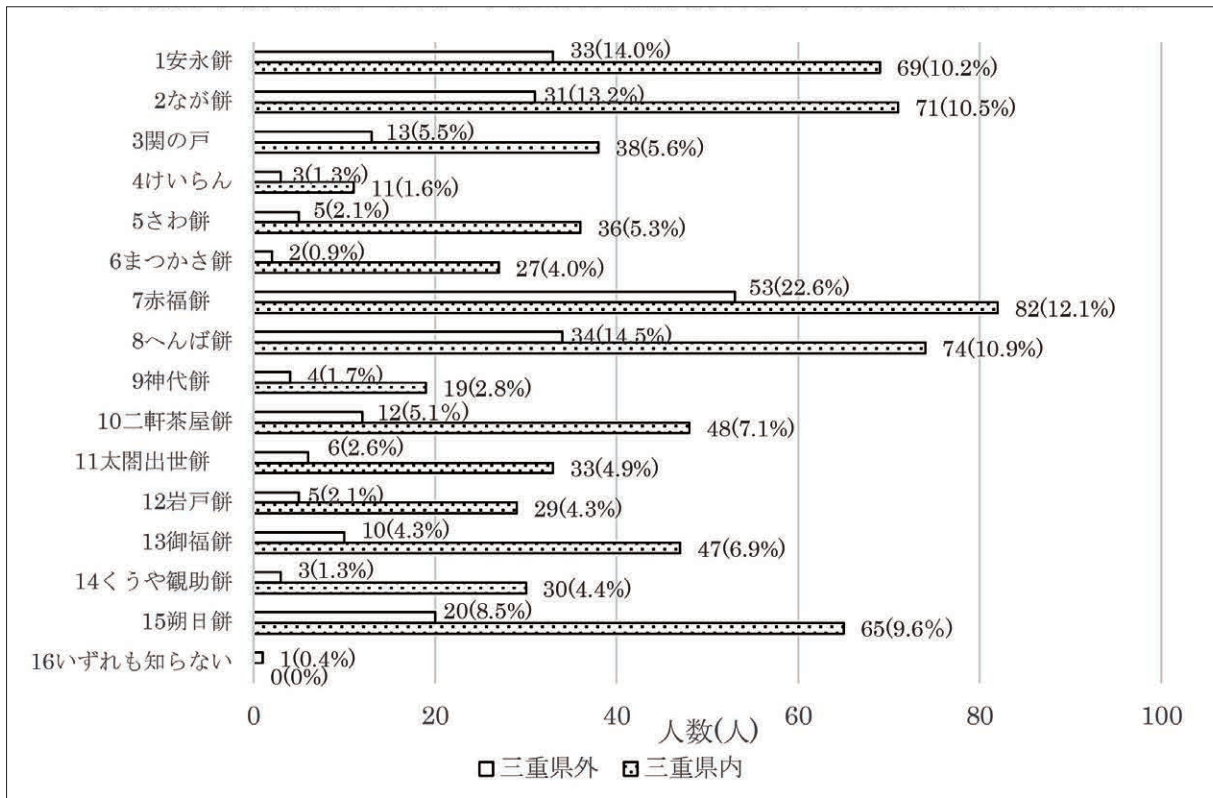


図2 知っている名物餅別出身地別構成比

参考：回答延べ人数 三重県内出身者679人（74.3%）、三重県外出身者235人（25.7%）、計914人（100%）

名物餅企業2社への訪問（10月～11月）

平成29年11月18日に名物餅企業である有限会社へんばや商店と株式会社御福餅本家（いずれも伊勢市）を訪問し、各企業の強みや課題等についてインタビューを行った。へんばや商店では、工場見学も行った。

①有限会社へんばや商店



メンバーの多くは人生で初めての企業訪問であったが、地元の人に愛される企業づくりとしてどのようなことを行ってきたのか、今後、地域の人と取り組んでいきたいこと等について積極的にインタビューを行った。

②株式会社御福餅本家



午後に訪れた御福餅本家では、新製品であるぜんざいの試食をさせていただきながら、どのような理念や方針で経営を行ってきたのか、地域にこれまで以上に愛される企業として成長していく上で何が必要か等について、インタビューを行った。

名張市錦生地区餅つき大会参加（12月）

平成29年12月17日に名張市錦生地区で開催された餅つき大会に参加し、千本杵での餅つきを体験した。また、地域の人と交流し、地域に根付く餅つきの歴史等について学んだ。



三重の伝統餅づくり教室参加（2月）

平成30年2月17日に、三重大学名誉教授の成田美代先生を講師とした伝統餅づくり教室に参加した。三重の家庭には古くから伝わる伝統餅が複数あるが、そのうち、鍋餅（ないしょ餅）、塩餅、いも餅の歴史や背景を理解するとともに、作り方を学んだ。



▲なべ餅の材料となる餅をつく様子



▲左:いも餅、中:塩餅、右:なべ餅(ないしょ餅)

餅菓子紹介冊子の作成（11月～3月）

1年間の活動の集大成として、これまで行ってきた活動を通してわかったことや感じたこと等を冊子に纏める作業を行った。どのような内容でどのような構成にするのか、どれくらいのページ数にするのか等、コンセプトやテーマ、体裁等を、学生は主体的に決定し、役割分担に沿って執筆を進めた。



▲冊子づくりの様子



▲誌面の一部

三重もちもちプロジェクト冊子



名物餅企業様からの声

有限会社へんばや商店

食全般に焦点をあてて活動する学生団体はあっても、餅に焦点をあてて活動する学生団体は少なく、興味深い取り組みだと思う。アンケート結果について年齢別・出身地別の名物餅認知度等、今後の経営にとって参考になる部分が多くありがたい。

若い従業員が少なく、若者にSNSを通じて名物餅について情報発信をしてほしい。

株式会社御福餅本家

学生さんは餅について深く勉強していて、インタビューが有意義なものとなった。

全国には当社のような「あんころ餅」製造企業が多数あるが、これらの企業が互いに切磋琢磨して、地域の特色を出しながら顧客に色々な餅を楽しんでもらいたい。

餅菓子業界に興味のある学生がいるならば、インターンシップ受入も検討したい。

学生の声

○自分達で企業へインタビューの依頼文を書いたり、質問項目を考えたりするのは初めてでした。製造工場の中まで見学させてもらって写真も撮れたし、普段ではめったに聞けないような踏み込んだお話を伺えました。三重の餅文化について、様々な方面から色んなお話を聞くことが出来たのが嬉しかったです。とても貴重な経験が出来たので、非常に満足しています。

○活動の中でアンケートを行う際にはアンケート項目の設定を行い、企業へ取材に伺う際には依頼書や取材に関するやり取りを行った。そのような経験を通して、これから大学を卒業し社会へ出ていく上で必要な常識力を身に付けることができた。ただ、多くの人と接する上では、自分達の活動に歓迎的でない態度をとられることもあり、その中で自分が必要としている情報を得ることが難しいと感じることもあった。

○三重県の餅菓子を製造販売している企業に取材へ伺った際、どの企業の方も、自分達が作る餅菓子やそれを食している地元の方々を大切に思う気持ちが強く感じられたことが特に印象的だった。そのことも含め、活動を通して、自分達が住んでいる地元地域やそこにあるものに対して、愛情を持っている人がたくさんいることを知ることができ、嬉しく思った。

三重創生ファンタジスタクラブ 広報チーム

[学生団体]

三重県の魅力や三重創生ファンタジスタ資格を学生に情報発信することを目的して結成された。MSFCにおけるその他4チームを兼任しつつ、その活動内容を学生ブログやtwitterで情報発信している。

三重大X(えっくす)記事作成

MSFC広報チームの最初の活動は、三重大学が発行している情報冊子「三重大X(えっくす)」に、三重創生ファンタジスタ資格の広報やMSFCの取組みを掲載することから始まった。掲載する内容やその体裁についても学生が一からアイデアを出し、リーダー主導のもと意見を取りまとめる力、発言力が身についた。また管理者である教職員へ報・連・相を怠らないよう指導することで、社会人基礎力も養われた。

▼広報チーム打合せの様子



▲完成した三重大X

MSFCスタッフジャンパー作成

MSFCの活動を広く学内、また県内に広報するため、MSFCスタッフジャンパーを作りたいと学生から提案があり制作を始めた。10月下旬に開催される県内企業が集まるイベント「みえリーディング産業展」に間に合うよう制作する目標のもと、他団体のスタッフジャンパーの調査やMSFCロゴの作成等様々な協議を経て、平成29年10月上旬にスタッフジャンパーが完成した。

スタッフジャンパーは「みえリーディング産業展」(前述13ページ)参照。

みえリーディング産業展での取材

みえリーディング産業展は、先端分野から地域密着型の産業まで、多様な分野の企業や団体を一堂に集めた、三重県内最大級の産業展示会であり、広報チームの学生はCOC+事業協働機関であり本産業展に出展している「株式会社マस्या」と「辻製油株式会社」に取材を行い、学生に伝えたい学生目線の記事を作ることとなった。各企業の情報を精査し、学生が本当に知りたい内容を伝えられるよう質問内容から細かく協議を行った。取材当日も学生主導で取材を行い、終了後は速やかに記事を作成する等、発足当初から見て至るところで成長が伺えた。

みえリーディング産業展記事



三重大学祭での広報活動

まだまだMSFCは人数が少ない学生団体であるため、広報チームが中心となって三重大学祭に出展し、啓発チラシを用いてMSFCの広報活動を行った。学祭出展は初めての経験である学生がほとんどであり、他団体の学生への出展方法の確認や売り物とする飲食物の利益計算等、四苦八苦しながらも普段ではなかなか経験できない作業を一から行うことで、企画力、コミュニケーション力、財務的な物の見方等様々な力をつけることができた。



▲三重大学祭出店時の様子

COC+シンポジウム運営

平成29年度最大のイベントとして、COC+シンポジウムの運営が挙げられる。学生が司会進行を担当し、受付や会場案内等、幅広く広報チームが担当した。232名の参加者となったシンポジウムでの司会は、通常のイベント司会と異なり想像以上の緊張を伴うものであったが、学生はその緊張に負けることなく、堂々と司会や運営を務め、会場からの評判も高いものを得た。



▲学生が立派に司会役を務めました。

学生の声

○広報チームでは、プレゼンテーション、イベントの司会、記事やポスターの制作など様々な機会を頂きました。失敗や苦労もありましたが人前で話す能力やポスターのデザインなど、他の場所では得られないスキルをいくつも得ることができました。これら沢山の体験は、私の大きな自信になっています。

成果物

三重大X(えっくす)
vol.38 2017年6月発行



twitter「@MieSFC」

学生ブログ



三重創生

ファンタジスタクラブロゴ



三重創生ファンタジスタクラブ 多文化共生チーム

[学生団体]

三重県で就業している外国人の方々の生活を知ること、また今後三重県内で働きたいと思っている外国人留学生のための情報を収集することを目的として結成された。実際に三重県内企業で働いている外国人の方々取材し、その方々の経歴や就職活動、また現在の生活などについて聞いている。

取材活動

三重県は、県民人口に対する外国人人口の割合が、東京、愛知に次いで日本で第3位となっている。このように外国人人口が特に多い三重県にあって、MSFC多文化共生チームは、より良い多文化共生社会を目指す活動の一環として、三重県内で働いている外国人の方々を取材し、どうして日本に来ることになったのか、どうやって今の仕事を見つけたのか、今の生活の中でどんなことに苦労しているか、今後三重県で就職する外国人に向けてどんなアドバイスがあるかなどを聞いて情報を集めている。

今年度は、8人（6社）の外国人の方を対象に取材を実施した。取材した方々は以下の通りである。

- 朴恵淑（韓国）三重大学教員
- ペニー・マタラバ（フィジー）GES英会話講師
- 岡田アムフォン（ラオス）三重大学医学部 技術補佐員
- タナ（中国 内モンゴル自治区）共栄産業
- M.M.R.P（スリランカ）某電機メーカー
- グェン・ホアン / グェン・ガー / グェン・ミン（ベトナム）株式会社アレクシード



取材対象の外国人の方は、平日の日中は仕事をしている方がほとんどだったので、取材の時間と場所は、週末または平日の日中に会社を訪れてというケースが多かった。多文化共生チームの学生の時間割との兼ね合いなどで、取材に参加できない学生もいたが、そういった学生も、取材記事の作成、校正等を通して積極的に活動に参加した。

取材を通して、外国人の方が日本語を習得するために大変な努力をしてきたこと、ビザや子育てについての苦労、またそれぞれの方の仕事の内容などを学ぶことができた。

取材記事（一部抜粋）

インタビュー（2017年6月29日）
Q. 日本に来たきっかけを教えてください。
A. 韓国で地理学、特に大気汚染に関する研究で修士号を取った後、韓国梨花女子大学校師範大学で助教をしながら、アメリカヨーロッパの大学に進学することを考えていました。当時の韓国では、アメリカヨーロッパの学歴が重視される傾向があったため、日本に来るとは夢にも思いませんでした。ただ、父親や親戚が日本で買ってくれたお土産（ワークマンなど）が楽しかったのは覚えています。
当時日本はバブル最盛で、日本政府の留学生10万人計画により（当時日本にいる外国人留学生は1万人程度でした）、文部科学省から奨学金がもらえることを知りました。また、筑波大学では英語でクラスが受講されていて、修士論文も英語で書いてもいいと聞きました。（実はクラスはほとんど日本語で行われていたと後日後に分かったのですが。）数か月間日本語を勉強したのち、日本の筑波大学大学院地球科学研究科に入学することができました。

各インタビュー記事



三重大学見学ツアー

株式会社アレクシードで働くベトナム人のホアンさん、ガーさん、ミンさんの3人を三重大学に招いて、大学を案内した。これには現在三重大学に留学中のベトナム人7名もアシスタントとして同行した。図書館、環境情報科学館を見学した後、留学生対象の日本文化の授業を体験受講し、そして三重大学ギター部の演奏を鑑賞した。多文化共生チームの学生と、ベトナム人就労者、そしてベトナム人学生が一緒になって話をし、交流を楽しむことができた。

学生の声

このチームの活動は外国の方と話す機会がとても多いです。初めは取材をするだけでしたが、少しずつ取材以外にもその国の言葉について聞くなど、自分から話しかけることができるようになりました。このように話す中で、その国の良さや日本の良さなどにも気づけるようになりました。また、多文化共生チームでは自分たちで取材記事を作成するため、文章を書く機会がとても多く、文章能力も鍛えられていると思います。

三重創生ファンタジスタ ベーシック資格

[教育プログラム]

県内9高等教育機関（四日市大学、皇學館大学、鈴鹿大学、三重短期大学、四日市看護医療大学、鈴鹿医療科学大学、三重県立看護大学、鈴鹿工業高等専門学校、鳥羽商船高等専門学校）で開始された資格。平成29年度末には、四日市大学6名、鈴鹿工業高等専門学校5名、鳥羽商船高等専門学校11名、鈴鹿医療科学大学63名が資格認定の要件を満たし、県内初の三重創生ファンタジスタが誕生した。

教学WGでの度重なる検討

平成28年4月に三重大学で先行して導入した副専攻コースは、3つの科目群に基づく12単位以上を要するもの（後述37ページ参照）であったが、同じ枠組みで考えると三重大学以外の高等教育機関では養成が難しいことが判明した。よって、教育プログラム開発委員会直下に第2分科会（教育プログラム・ファンタジスタ資格検討分科会。以下「第2分科会」という。）を設け、その下に全高等教育機関が参加する教学WGを位置づけ検討を行い、平成29年度から県内9高等教育機関においてベーシック資格を養成できることとなった。

ベーシック資格の特徴

本ベーシック資格は、各高等教育機関で位置づけている地域に関する科目をそれぞれ6単位以上用意して各校の教育プログラムを構築したが、対象科目は教学WG内でシラバスを確認し、地域に関して十分に学べるものかをチェックしたことに大きな特徴がある。これまでは自校以外の高等教育機関の授業シラバスに手をつけることは考えられなかったが、今回本ベーシック資格を検討するうえで、地域に関して充分学べないと判断される科目シラバスは差し戻す、あるいは対象科目としない判断を会議内ですることで、本プログラムの質の担保をすることができた。

拡がりつつあるベーシック資格

平成29年度より9高等教育機関が本ベーシック資格を開始したが、平成29年度中もより多くの高等教育機関でベーシック資格を構築できるよう検討を重ね、平成30年度より高田短期大学がベーシック資格を開始する。また、平成29年4月に設立されたユマニテク短期大学もCOC+事業協働機関に加えられ（平成30年度に加わる想定）、今後もベーシック資格養成機関が増えるよう検討を続ける。また、本ベーシック資格を様々なところで広報し、周知していく。

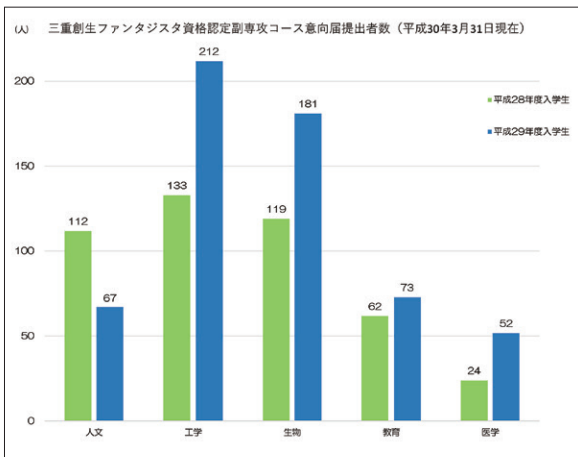
三重創生ファンタジスタ資格（食と観光、次世代産業、医療・健康・福祉）

[教育プログラム]

三重大学の副専攻コースでは、三重創生ファンタジスタを多数輩出するため、各学部と協力しながら学生への周知に努め、多くの学生が本副専攻コースに登録を行っている。また、四日市大学、皇學館大学、鈴鹿医療科学大学でも、三重大学同様12単位以上の教育プログラムを構築し（便宜上中級資格）、県内で幅広く三重創生ファンタジスタを養成している。

三重大学副専攻コースへの履修登録者数増加

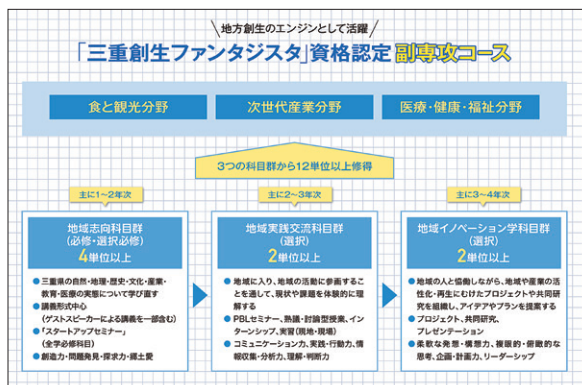
平成28年4月に三重大学で先行して導入した副専攻コースは、3つの科目群から12単位以上（地域志向科目群4単位以上、地域実践交流科目群2単位以上、地域イノベーション学科目群2単位以上）修得し、且つ「学びの振り返り・成果」のレポートを要する。三重大学では平成33年度までに三重創生ファンタジスタを年間420名養成することを目標としており、各学部と協働して学生に対し三重創生ファンタジスタ資格を広報し、本副専攻コースへの登録を促している。平成28年度末の時点では、平成28年度入学生登録者数は125名であったのに対し、平成29年度末時点では、平成28年度入学生登録者数は450名、平成29年度入学生登録者数は585名と大幅な増加が見られた。これは、三重大学全学事業として、各学部が本格的に学生へ広報を行った結果であり、今後も学部と協働して、三重創生ファンタジスタの養成に努めていく。



▲平成28,29年の本副専攻コース意向届提出者数

三重創生ファンタジスタ資格の拡がり

三重大学と同等の12単位以上の教育プログラムで三重創生ファンタジスタを養成しようと、四日市大学、皇學館大学、鈴鹿医療科学大学の3校がベーシック資格とは別に教育プログラムを構築した。この教育プログラムの特徴は、地域に愛着を持たせる科目以外に、フィールドワークを含めた演習科目を多数配置したことが挙げられる。演習授業の中には、COC+で構築したPBL型集中講義も配置されており、ルーブリック（後述54～60ページ参照）での評価も相まり、質の担保に一役買っている。なお、三重大学では食と観光、次世代産業、医療・健康・福祉の3分野で三重創生ファンタジスタを養成するが、四日市大学、皇學館大学では食と観光、鈴鹿医療科学大学では医療・健康・福祉に特化して三重創生ファンタジスタを養成する。



▲本副専攻コースイメージ

三重の歴史と文化

[教育プログラム]

三重という地域に関する概略を掴む事が本授業の主な目的となっている。初年次教育の授業でもあり、入学して間もない学部1年生を念頭にした授業内容で構成しているのが特徴。三重大学生24名が受講した。

背景と目的

大学が立地する三重について、以下の3点の学びを深める。

- ① 歴史の概要と特色
- ② 先人の努力の足跡と現代に通ずる先見性
- ③ 将来の大交流時代に内外に発信できる三重の魅力と課題（過去から未来に視点を向け、三重の魅力である歴史・文化や観光資源を積極的に情報発信できるようその要点を学習する）

大学には、県外出身の学生も多く在籍しており、三重という地域を全く知らない者も多い。そこで、本授業の履修を通して、三重を知るきっかけを創出した。その後は、地域実践交流科目であるPBL型授業やインターンシップ関連授業への履修へ繋げていく。

内 容

授業の構成は、初回に関しては三重の統計データをもとに概略を理解する講義を実施し、第2回目以降は、「歴史と文化」に関する夫々のテーマに精通したゲストスピーカーを迎え、その知見や体験を織り交ぜて進めることとした。また、インプット型（知識植込み型）の授業だけではなく、毎回の授業後半では、質疑応答の時間も設けて、アウトプットをする。そして、14回目の授業では、これまで学んで来た内容の振り返りも含めて、グループワークを実施し、内省化も行う事とした。

▼ 前葉先生（津市長）の授業風景



▼ 「三重の歴史と文化」授業スライド（一部抜粋）

日本理解特殊講義「三重の歴史と文化」

①三重県の観光関連産業

■地域別入込客数の上位地点(延数)

平成27年

地域名	順位	1 位		2 位		3 位	
		観 光 地 点	入込客数 千人	観 光 地 点	入込客数 千人	観 光 地 点	入込客数 千人
北 勢 地 域		ナガシマリゾート	15,150	鈴鹿サーキット	2,077	湯の山温泉	1,795
中 南 勢 地 域		松阪農業公園ベルファーム 松阪市	589	道の駅「奥伊勢おたけ」 大台町	471	道の駅「飯高駅」 松阪市	375
伊勢志摩地域		伊勢神宮内宮	5,490	おかげ横丁	5,240	伊勢神宮外宮	2,893
伊 賀 地 域		道の駅「いが」	437	モクモク手づくりファーム 伊賀市	339	熊しの里 名張の湯 名張市	315
東 紀 州 地 域		紀北PA「始神テラス」 紀北町	723	道の駅「紀伊長島マンボウ」 紀北町	511	熊野古道	352
ゴルフ場 利用者数		1 位		2 位		3 位	
		北 勢 地 域	中 南 勢 地 域	伊 賀 地 域	伊勢志摩地域		
		1,239	1,064	707	238		

(注1) 鈴鹿市・全国競輪競技場ふたば特別 (注2) 紀伊熊野海岸にゴルフ場はない。(資料) 三重県観光歴史文化調査委員会観光力アップ・入込客数調査資料(上)観光庁作成

出展：百五総合研究所「三重県経済のあられまで17年(2017年)版」p.65

出展：百五総合研究所「三重県経済のあらし2017年版」p.55

三重の産業

[教育プログラム]

三重の産業では、科学技術の発展や国際化、健康志向、高齢化等の時代の趨勢を踏まえ、三重の経済を支える各産業に着目し、その歴史的発展や現状、課題を客観的なデータを用いながら学術と実務の両面から学修した。本授業では、人文学部、生物資源学部、工学部、医学部の1、2年生を中心に三重大学生18名が履修し、毎回、各テーマに精通したゲストスピーカーの方の講義を受講するとともに、参加者相互のディスカッションを通じ、多面的な角度から学修を行った。講義終了後には質疑応答の時間を設けるとともに、学生はゲストスピーカーの方への講義の感想や質問を小レポートとして提出することで講義内容を振り返ることができ、各テーマに関する深い考察を行うことができた。

【第5回目】(11/1(水) ゲストスピーカー 財務省東海財務局津財務事務所長 黒田浩二氏)

日本の財政状況や少子高齢化に伴う社会保障費増加という現状等について学び、壮大なテーマではありながらも、自分たちにできることはないかを考える授業となった。



学生による質問内容（原文ママ）

- 税収以外から収入を得る方法は何がありますか。また、その方法を発展させることで、少しでも収入増加が望めるものはありますか。
- 軽度であるにもかかわらず、救急車を呼ぶという話があったが、それを防ぐ対策は行われているのですか？

日本が何十年の間、国債を増やし続けて いるという現実を知ったため、とても驚いた。 特に7ページのグラフで説明したように、 債務で、日本の将来が不安になった。 一言で、22ページのグラフにおいて、日本は世界に見て国民 負担率に並べて政府の社会保障支出が伸び、 日本の保障がいらしていることを知った。 日本は収入に並べて無理な保障を行っている から、日本ももう少し保障の量を下げた方がいい のではないかと。もちろん、政府が国民は増えるが、 国民も国の財政状況を知り、将来負担を減らす ように思えた。 軽度であるにもかかわらず、救急車を呼ぶという話があるが、 それを防ぐ対策は行われているのですか？

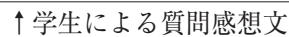
↑ 学生による質問感想文

【第7回目】(11/15(水) ゲストスピーカー 株式会社医用工学研究所 代表取締役社長 北岡義国氏)

少子高齢化や人口減少の実態と医療費や介護費の動向について学び、それに対して、情報通信技術がどのような役割を果たせるのかを考えた。



- 人工知能社会とは、人工知能はこれから、どのくらい人間の生活に入ってくるのですか？前、人工知能が人間の能力を越えると聞いたことがあるのですが、それはどういうことですか？
- やはり未来のことを考えるとVRやARのことが思いつくのですがVRやARは医学的に実現が可能でありえるのでしょうか・・・？また、それらが医学的に活躍するとしてもどのように活躍するのでしょうか・・・？



経営理念や人材育成の取組み等について知り、地域に根付き地域の人に愛される企業の条件について学んだ。



お礼が 往々にて重んじられてゐて、やはり今日の 盛衰を
いふ 新商品の うち新しい 思想を 裏面に 必ず 込める 守る
必要が あると 思ひました。 海外に出ている というのを
初めて 知。たので すぐ 友の 國に 合はねたものを ついで して
いふのは 大 変 人々 にと 思ひました。 また、王蒙や
健康 といふ こと にも 目を けて 出たら、 すごい 人が
お婆さん の 信頼 に つな かり、 麗人 の 方 とも つな かり
になつて いた と 思ひました。

皆 同 年 人 だ け。 藝術 性 を 育む には どの よう な こと が
大切で、 どの よう な こと を 意識 すべき であらう。 良い
思想 法 則 だ け が あり たら 教 えて くれ さい。

学生による
質問感想文→

- 企業グループとして会社がたくさんあると、管理することが大変だと思いますが、何か工夫はありますか？
- 企業はどのような人に入ってきてほしいと考えているのですか？ 周りに必要とされたり貢献できる人になるためにはどのような事が大切ですか？
- 独創性を育むにはどのようなことが大切で、どのようなことを意識すべきでしょうか。

三重県内には優れた技術や知識を保有した企業が多数存在するが、知名度が低く、学生には知られていないのが現状である。したがって、これらの企業を知り県内企業の魅力を発見することを目的に、企業情報データベースを用いた下記の課題を設定した。下記はS君の回答例である。

A. 私は情報工学科に所属しており、IT系の企業についてとても関心がある。三重県内の

「中部システム・エンジニアリング
株式会社」ホームページ
(閲覧日：2018. 1.30)



A. 仕事は生きていくためにすることだと思っているので、やはり給料がある程度あり、かつ安定した企業に就職したい。そのうえで、やりがいや作業環境やその企業の周辺の地域について考える。いまは少子化社会なので子供

「三重の歴史と文化」、「三重の産業」における授業アンケート結果

[教育プログラム]

COC+オリジナル授業である「三重の歴史と文化」、「三重の産業」における授業アンケート結果をまとめた。各授業の満足度は他授業と比較しても満足度が高く、平成29年度後期から設問に加わった項目「この授業の受講によって、三重県や地域への興味・関心が高まった」については、4.77（最大値5）となり、地域に精通したゲストスピーカーによる講義によって学生の地域理解、地域志向の高まりがうかがえた。

● 三重の歴史と文化（前期開設授業）

		回答者16名
設問1	総合的に判断して、この授業に満足できた	4.50
設問2	授業内外の学習に取り組むために、シラバスを活用した	2.44
設問3	この授業の内容について理解できた	4.38
設問4	新しい知識・考え方・技術などが獲得できた	4.44
設問5	この授業の受講によって、学業への興味・関心（意欲）が高まった	4.13
設問6	この授業で学んだことや考え方について、意識するようになり実際に試してみたりした	3.25
設問7	学びを深めるために、調べたり尋ねたりした	3.56
設問10	この授業を通して、「感じる力」が成長したと思う	2.44
設問11	この授業を通して、「考える力」が成長したと思う	2.75
設問12	この授業を通して、「コミュニケーション力」が成長したと思う	2.44
設問13	この授業を通して、「生きる力」が成長したと思う	2.31

● 三重の産業（後期開設授業）

		回答者13名
設問1	総合的に判断して、この授業に満足できた	4.46
設問2	授業内外の学習に取り組むために、シラバスを活用した	2.85
設問3	この授業の内容について理解できた	4.46
設問4	新しい知識・考え方・技術などが獲得できた	4.54
設問5	この授業の受講によって、学業への興味・関心（意欲）が高まった	4.38
設問6	この授業で学んだことや考え方について、意識するようになり実際に試してみたりした	4.40
設問7	学びを深めるために、調べたり尋ねたりした	4.40
設問10	この授業の受講によって、三重県や地域への興味・関心が高まった	4.77
設問11	この授業を通して、「感じる力」が成長したと思う	2.62
設問12	この授業を通して、「考える力」が成長したと思う	2.46
設問13	この授業を通して、「コミュニケーション力」が成長したと思う	1.31
設問14	この授業を通して、「生きる力」が成長したと思う	2.46

PBL型集中講義（食と観光実践）

[教育プログラム]

県内高等教育機関教員が協働して構築した授業科目「食と観光実践」は伊勢・鳥羽・志摩の食文化・観光文化の現状を知り、課題の抽出や提案を目的とする2泊3日のPBL型集中講義である。四日市大学4名、皇學館大学1名、鈴鹿大学1名、三重大学10名の学生16名が合同で受講した。

事前学習1：大川学園

事前学習1では大川学園を訪問し、三重の食文化を中心に学んだ。1部では伊勢の歴史的な食事について講義があった。江戸時代の食文化や、伊勢の神様に奉納する食事、お伊勢参りの文化についてグループワークを交えながら学んだ。



2部では1部と打って変わって、現代の食文化であるご当地グルメについて講義があった。三重県四日市市のご当地グルメである「四日市とんてき」を活用した四日市市の“まちおこし”について学んだ。



授業は終始、学生と教員のやり取りがあり、活発なものであった。

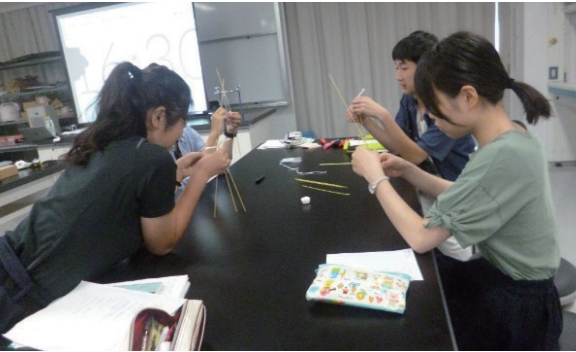
事前学習2：MieMu

事前学習2ではMieMu（三重県立総合博物館）を訪問し、伊勢参りの観光文化について学んだ。1部では学芸員の方から伊勢参りの文

化について講義があった。江戸時代のもっとも有名な観光地であるおはらい町のおもてなし文化について学んだ。



2部では館内見学を行った。伊勢には豊富な食文化があり、それが数多く展示してあり、日本全国でも珍しい博物館とのこと。3部ではグループワークの予行演習に、各チームでマシュマロチャレンジ（パスタとマシュマロを使い、どれだけ高く届くか）を行った。初めて交流する学生が戸惑いながらも目標に向かう良い練習になった。



合宿1日目

1日目は伊勢志摩地域の観光文化について学んだ。まず、伊勢神宮の外宮を参拝した。伊勢市駅から外宮までは参道が整備され、比較的新しい観光地となっている。



次に鳥羽市にある、女性の願いをかなえてくれる石神神社を訪問し、見学を行った。



次にはちまなかまどを訪問し、海女さんの話を聞きながら、海女料理を堪能した。現役の海女さんから貴重な体験談を聞くことができた。



次に海の博物館を訪問して、海女文化について講義を受けた。海女さんが取ってくる海産物の種類など、詳しく教えていただいた。館内見学も行い、鳥羽市の歴史や文化について学んだ。



この日はこれで宿泊施設に戻り、グループワークを行って翌日の調査に備えて終了した。



合宿2日目

朝食前に伊勢神宮を早朝参拝した。



次におかげ横丁を管理する伊勢福の社長、橋川氏からおかげ横丁の取り組みについて講義をいただいた。また、おはらい町のまちづくりに関して、建築家、高橋氏から講義をいただいた。伊勢神宮の参拝客に向けた観光のあり方について学ぶことができた。



▼ 実地見学の様子



午後にはグループに分かれて、自分たちで調査対象を決めてヒアリング調査を行った。自分たちで聞きたいことを決め、突撃取材という経験ができた。



二軒茶屋餅角屋麦酒の鈴木社長へのインタビュー調査



伊勢福へのインタビュー調査

午後いっぱい調査に費やして、最後はグループワークで調査内容をまとめた。グループワークを繰り返したことにより、スムーズに議論できていた。

合宿3日目

宿泊施設を後にし、発表会の会場である皇學館大学へ移動した。



一日を通してグループワークを行い、全4チームによる発表会を行った。全チーム、自分なりの伊勢志摩の食と観光についてまとめ、課題の発表を行った。



次に、神宮記念館を訪問し、館内を見学して伊勢神宮の文化について学んだ。



最後にグループごとで話し合い、学びの振り返りを行った。最後まで活発な会話があり、学生たちの主体性や協調性の成長が見て取れた！



学生の声

○ 400年以上の歴史をもつ餅菓子店である伊勢市の企業「二軒茶屋餅角屋本店」が「伊勢角屋麦酒」という新たな部門を立ち上げ、クラフトビールの世界大会でいくつもの賞を獲得していることを知り、何故餅菓子店がビールを作り始めたのかという疑問を抱きました。

○ メンバーの意見から浮上したもう1つの成功の要因は、＜地元の人や観光客向け＞と＜クラフトビールのファン向け＞の2つにターゲットを分けてビールを製造していることです。私達は、ターゲットを分断・明確化することによって、より客のニーズに合った商品を提供出来たのではないかと考えたのです。議論を通じてさらに理解したことは、消費者・利用者のターゲット層に適切なサービスがいかに重要か、ということでした。

PBL型集中講義(次世代産業実践)

[教育プログラム]

県内高等教育機関教員が協働して構築した授業科目「次世代産業実践」は、次世代産業である航空宇宙産業の現状を知り、三重県における課題の抽出や提案を目的とする2泊3日のPBL型集中講義である。鈴鹿工業高等専門学校4名、鳥羽商船高等専門学校1名、三重大学14名の学生19名が合同で受講した。

合宿1日目

1日目は研修施設である、鈴鹿青少年センターを訪れ、集中講義が始まった。午前これまでの航空産業の歴史について、みえ・航空宇宙産業推進協会会長であり、COC+事業の地域活性化推進コーディネーターである雲井氏に登壇いただいた。講義には三重テレビの取材が入るなど、活発なものであった。



午後からは、三菱重工業株式会社において日本の液体ロケットN-1、N-2、H-1、H-2、H-2A、及び HOPE の開発を担当され、現在は名古屋大学特任教授である小林氏から宇宙産業について講義をしていただいた。

ロケットの話題や、種子島宇宙センターの話題など、とても興味深い内容であった。



講義終了後は学生と講師による交流会を実施し、自分たちの学びと航空宇宙産業のつながりについて意見交換があった。学生からも多くの質問があり、活発な議論が行われた。



合宿2日目

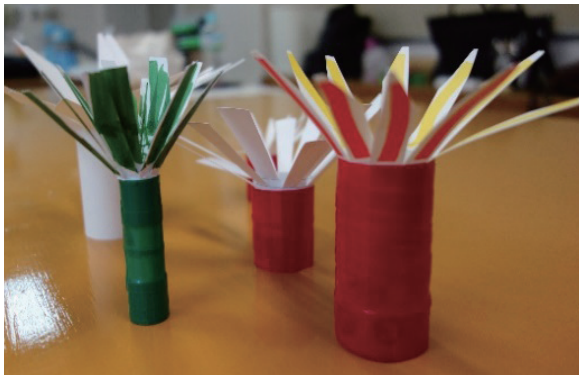
2日目には航空力学の基礎知識の講義があり、飛行機がなぜ飛ぶのかを学んだ。これを元に、自分たちでペーパープレーンを工作し、実際の飛び方を見ながら航空力学の重要性を確認した。



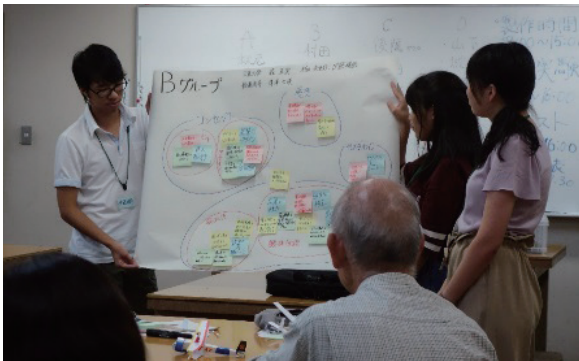
作成したペーパープレーンは体育館を使って飛行テストを行った。学生同士で機体の修正を議論し合い、最後には飛距離の計測を行った。中には20m以上飛ばす学生もいた。

午後からはグループに分かれ、オリジナルプレーンの作成に取り掛かった。グループによっては基本に忠実なものや、羽のない独創的な機体が生まれた。

午前と同じく、オリジナルプレーンの飛行テストも行い、最終的には飛距離の計測も行った。オリジナルだけあって、基本形よりも飛距離は短かったが、学生は活発であった。



夜にはそれぞれのグループで、三重の航空産業に対して自分たちに何ができるかを議論した。オリジナルプレーンの作成でチームが形成されたため、活発な議論が行われていた。最後にはチームの発表と、飛距離の計測の表彰をした。



合宿3日目

午前には三重県の航空宇宙産業の関連企業である、大起産業 木曽岬工場を見学させていただいた。



午後からはロケットを製造している三菱重工 飛鳥工場を見学させていただいた。学んだことの現場を実際に見学することで学生たちの間で航空宇宙産業について関心が高まっていた。



学生の声

○ 多くの専門家による講義では、ジェット機やヘリコプターをはじめとした航空機に関する内容やロケットに用いられている最新技術について学ぶことができます。また、最も魅力的だと感じたのは、実際に発射が予定されていたロケットの機体の一部を、実際の工場に赴いて見学できる点です。また、自分の手で制作した模型飛行機を飛ばして、航空力学を体感できたのも良かったと思います。

PBL型集中講義(医療・健康・福祉実践)

[教育プログラム]

県内高等教育機関教員が協働して構築した授業科目「医療・健康・福祉実践」は、三重県の過疎地域における医療・健康・福祉の現状を知り、課題の抽出や提案を目的とする2泊3日のPBL型集中講義である。鈴鹿医療科学大学2名、三重大学6名の学生8名が合同で受講した。

事前学習

顔合わせとワークショップを行った。「地域医療に関して」というテーマで2班でのグループワークを実施した。

合宿1日目

1日目は三重県の医療・健康・福祉全般の総論と、津市的美杉町の医療・健康・福祉について学んだ。

まず、三重大学にて講義形式で三重県の現状について学んだ。講師は株式会社医用工学研究所 代表取締役社長の北岡氏が登壇した。



次に、津市美杉町へ移動して、複合型の医療・福祉の現場である、美杉クリニック及び第二美杉地域密着型ケアセンターの見学を行った。美杉クリニック院長、田島氏からは地域医療についての講義もいただいた。



ケアセンターではデイサービスと老人ホームを複合させた、珍しいタイプのものであった。説明を受けて、学生は興味津々に質問を行っていた。



この後、宿泊施設へ向かい、グループワークを行った。講義と見学で受けた印象をまとめ、地域医療の課題の抽出に取り組んだ。



合宿2日目

宿泊施設を出発し、見学先である志摩市にある志摩市民病院へ向かった。志摩市民病院では院内、特に手術室の見学ができ、学生の関心が高まった。





志摩市民病院での学修は、救急で運ばれてきた患者の対応を特別に見学させてもらえたり、地域医療の現場を把握するため既に退院された患者様のご自宅へ伺い様々なお話を聞かせていただく等、学生にとって刺激のある内容ばかりである。

最後は院長の江角氏に振り返りをしていただき、地域に寄り添う病院の在り方を考えさせられる充実した時間となった。



宿泊施設に戻った後も授業は続く。院長の江角氏に加え、度々新聞等でも紹介されている、世界にたこ焼きを届け、笑顔を提供している森田氏（三重大大学卒業生）にもお越しいただき、行動する重要性、一つの価値観に縛られない柔軟さ等、大学ではなかなか学ぶことができない視点の講演をいただき、学生達は感銘を受けていた。



合宿3日目

最終日はこれまでの学びを振り返り、成果をアウトプットするためのグループ学習である。地域における医療・健康・福祉を様々な視点で学習してきた内容をまとめ、グループ毎に提言を行う。



課題を抽出し、その課題を解決するために具体的な方策を提言する機会を設けたことで、自分達は何ができるかを考えるきっかけになった。またその方策は実現できるのかを考えさせたため、理想だけではない学生だからこそ出来ることになっていった。

事後学習

合宿中に江角先生が医師を目指すきっかけとして話題に挙げた映画「パッチアダムス」の上映会を実施した。その後、「この授業をより良くするには？」というテーマでグループワークを実施した。



学生の声

○ 看護学を学んでいる中で、もっと三重県の医療の事を知りたいと思ったのが今回参加しようと思ったきっかけでした。

○ 私は、若者にこの地域について深く理解してもらうため、一か月程の体験に来てもらうという意見を提示しました。すると、他のチームメンバーから「その間、体験者はどこで生活するのか」という意見が出ました。そこで私が考え出したのは、そこの地域の家ホームステイさせてもらうという案です。衣食住の保証があり、地域の伝統的な文化や食事も知れて一石二鳥なのではないかという結論となりました。

三重の地場産業

[教育プログラム]

平成30年度新規開講授業として「三重の地場産業」を開発した。本授業では、三重県の地場産業の実態に詳しいゲストスピーカーに講義を行ってもらうことを通して、地場産業への理解を深め、各産業が抱える課題の発見と、それへの実現可能な解決策を提案する能力を修得することを主な目的とする。工場見学等も加えた実践的な科目であり、本授業を通して、三重県経済が抱える課題に対して果敢にチャレンジする積極性と行動力を持った人材を養成する。

授業の概要（平成30年度）

◆ 開講日

平成31年2月（後期集中）

◆ 開講場所

三重北勢地域地場産業振興センター、研修先等

◆ 講義内容

三重県内には特定産業の中小企業が集積することで産地を形成し、地域独自の製品を広く国内、海外に生産・販売している地場産業がある。地場産業は地域の歴史、文化を反映させながら、地域を代表する製品を創造し、地域内に一つの経済循環をもたらすことで、地域経済の発展に寄与してきた。しかしながら、近年は少子高齢化を背景に人口減少が進んでいることで職人不足等の課題が生じ、産業衰退が顕著である。本授業では、三重県の地場産業に焦点をあて、個々の地場産業の実態に詳しいゲストスピーカーに講義を行ってもらうことを通して、地場産業への理解を深め、各産業が抱える課題の発見と、それへの実現可能な解決策を提案する能力を修得する。

◆ 講義スケジュール

① 1日目：三重県の地場産業や萬古焼に関する講義、萬古焼窯元訪問

於：三重北勢地域地場産業振興センター他

② 2日目：グループワーク、伊勢木綿、酒造会社訪問

於：三重大学、津市内、多気町内

③ 3日目：振り返り、グループワーク

於：三重大学

④ 4日目：発表準備、成果報告会

於：三重大学または三重北勢地域地場産業振興センター

地域発見型インターン

[教育プログラム]

平成30年度新規開講授業として「地域発見型インターン」を開発した。国を上げた施策により、全国的に学生のインターンシップへの参加は増加の一途をたどっている。一方で、県内高等教育機関の学生に目を向けると、県内企業へのインターンシップ数は決して多くない。加えて、学生が県内企業について知る機会も少ない。その理由としては県内企業の多くが中小零細のため、高等教育機関への働きかけが弱いことなど考えられる。そこで、解決策の一つとして、学生自身が県内企業（中小零細）の事を深く知るという体験型授業を来年度開講科目として開発した。本授業を通して学生は、ワークライフバランスや地域で働く意義を「自分ごと」として実感し地域社会と向き合う際に必要となる基本的な力（コミュニケーション力、考える力、感じる力）を修得していく。

授業の目的

本授業では、県内企業（第一次～第三次産業）を深く理解し、職業観を醸成するとともに仕事への理解を深めていく「体験型」インターンシップを通じて、多くの県内企業（中小零細）の実態を理解し、深い分析・考察を加え、自らの考えを社会に還元する素養を修得することを目的としている。

授業の特徴

本授業では、事前学習にJobキャラバンを取り入れている。Jobキャラバンとは、学生が県内企業の社員や、三重県職員等と仕事についてざくばらんに話すことができる場であり、将来の視野を広げるための良い機会となる（前述10～11ページ参照）。事前学習ではその他にインターンシップ事業に携わる講師を招き、効果的なインターンシップについての講義を開き、夏季休業中に「見学型」の1dayインターンシップを実施する。

授業の概要（平成30年度）

開講時期：4月28日（Jobキャラバン）

6月30日（事前学習）

8月後半（インターンシップ）

9月9日（事後学習）

開講場所：三重大学、県内の中小企業



▲平成29年度のJobキャラバンの様子



▲1 day インターンシップのイメージ

三重創生ファンタジスタルーブリック

[教育プログラム]

三重創生ファンタジスタオリジナル科目を履修する学生の学びを体系的かつ可視的に捉えるため、学修効果を測定する評価指標（三重創生ファンタジスタルーブリック）を構築した。本ルーブリックは、高等教育機関において、今後大きなテーマとなってくる「教育の質保証」に対応するものであり、授業の学修効果を保証するとともに、本ルーブリックのような客観的な指標を活用して、誰にでも簡易に説明できるエビデンスを蓄積していく事が重要である。

ループリック導入の背景

三重創生ファンタジスタは「地域のイノベーションを推進できる人材」であり、県内の高等教育機関では、その人材を育成するために様々な教育プログラムが構築されている。本教育プログラムにおいては、学生の主体的な学びを促進するPBL型授業等を取り入れているものの、学修効果に対する客観的な評価指標がなかったため、「教育の質保証」という点において課題が残っていた。そこで、「三重創生ファンタジスタルーブリック」という評価指標を構築し、本年度は三重創生ファンタジスタ専任教員の担当科目（PBL形式、体験型学修）の3科目で試行的に運用した。

課題

(1) 体験型学修の効果

近年の教育現場では、地域を対象とした課題解決型授業など、オフキャンパスでの体験型学修の機会が多くなってきている。その際に常に課題となるのが、図1に示したように、言葉によって表出化されない学生の学修効果とされている。比較的長い文章を書くという作業が日ごろ少ないせいか、体験した内容を言葉に表現するスキルが極めて弱い学生も多い。そのため、現場の教員としては、プログラム自体に問題があったのか、学生のアウトプット能力に問題があったのか否か、判断がつかない場面も多々ある。

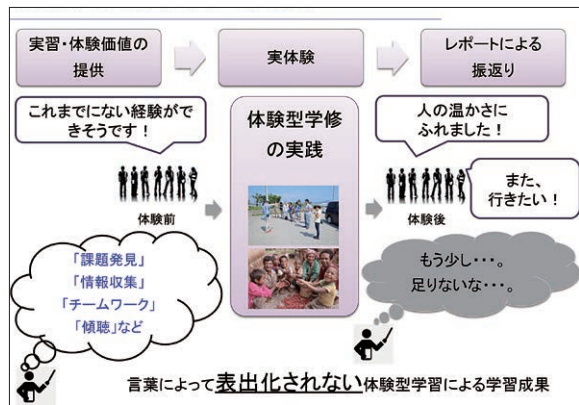


図1. 現場教員が抱える体験型学修に対する課題

(2) アクティブ・ラーニング

近年のアクティブ・ラーニングの流れを図2にまとめた。フォーマル・ラーニング（知識享受型学修、等）からインフォーマル・ラーニング（インターンシップ、等）、ノンフォーマル・ラーニング（アルバイト、等）と推移し、いかにインフォーマル・ラーニングでの学修効果を数値化するかという課題も抱えている。

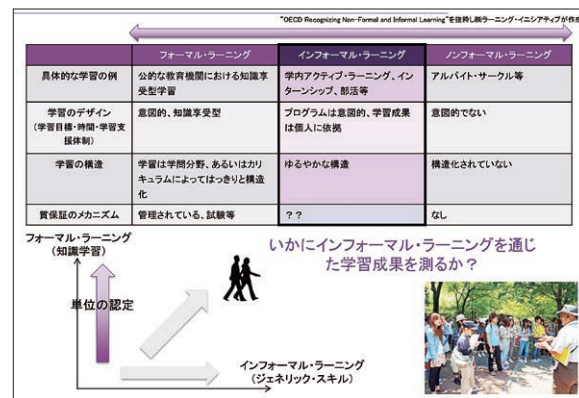


図2. アクティブ・ラーニング進展の課題

(3) 学修のデザイン

図3に示すように、個々の教育プログラムにおいて、学修成果を認証する場面では、教員と学生の物理的／精神的な距離の疎密が大きく関わっている。ゼミ・研究室では、教員のガバナンスが効き、学生との距離も近い一方で、学外学修においては、教員の範疇を超える場面（グループでのフィールドワーク、等）が多くなり、学生との距離も遠くなってしまう。



図3. 学修デザインと学修効果

解決の方策

そこで、これらの課題を解決するため、体験型学修でも運用可能な指標・尺度開発を検討した。そのプロセスを図4に示した。

まずは、養成したい人材目標を明確化（言語化）し、そこに紐づく能力を確定する。次に、エビデンスを抽出し、言語化する。また、学生の成長に合わせた指標の段階化を進める。そして、最後に学生の省察を促す段階ごとの省察質問の開発を実施した。

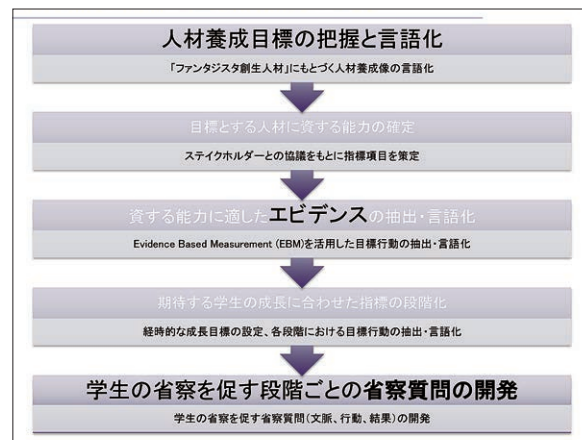


図4. 運用可能な指標・尺度の開発プロセス

続いて、図5に示すように、「三重創生ファンタジスタの人材」の定義より、能力を細分化していった。三重創生ファンタジスタの人材は、基本的に一般的な社会人基礎力を基盤としており、能力の細分化においては、汎用性の高い内容となった。



図5. 三重創生ファンタジスタ人材の能力

これらを踏まえ、目標達成と管理の方法(OGSM)を示したのが図6となる。

まず、人材養成目標 (Objective) は、「三重県における雇用の創出と若年層の県内就職率の向上につながる持続可能な地域の活性化と開発の方向を「食と観光分野」、「次世代産業分野」、「医療・健康・福祉分野」の3つで捉え、各々の分野をリードできる「三重創生ファンタジスタ (状況や自体を把握し、柔軟で豊かな創造力に富んだ発想と行動のできる人材)」を養成する。」とした。

次に、具体的達成目標（Goal）を「・三重県に新たな雇用を生み出し、三重県を創生／

創発するため、地域の課題に関してさまざまな主体と多面的な視点から対話しながら地域のイノベーションを推進できる。

・状況や事態を的確に把握し、複眼的な視点から柔軟で想像力と創造力に富んだ発想や思考ができ、行動力とリーダーシップを発揮しながら、周りの人と協働できる人材。」と定めている。

そして、目標達成手法（Strategy）として、「具体的には、「地域志向科目群」、「地域実践交流科目群」、「地域イノベーション学科目群」の3つのステージで構成する「三重創生ファンタジスタ」資格認定副専攻コースを全学的に展開する。

最後に、達成度評価手法・指標（Measurement）として、形成的評価指標を設定した。

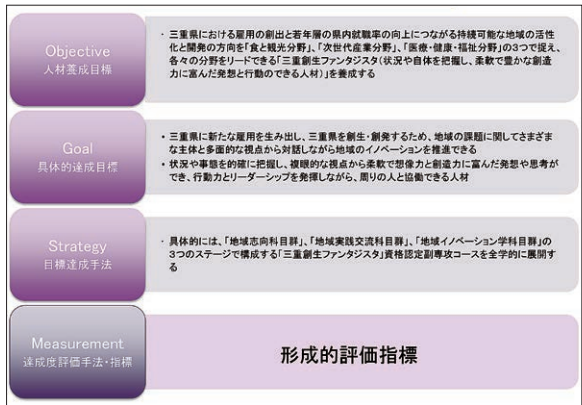


図6. 目標達成と管理の方法(OGSM)

さらに、具体的達成目標（Goal）を細分化すると図7のようになる。目標とする人材養成像より、大項目を5つ（状況や事態の把握、複眼的な視点、柔軟な発想や思考、行動力とリーダーシップ、周囲との協働）に分類し、その下に小項目を11個（状況の把握（意味づけ）、課題の探究（課題発見）、情報収集ネットワークの活用（情報収集）、情報の選別と分析、論理的思考（なぜと疑問を持つ）、集合知を活用する力（他者の知を自らの知に変える力）、持続的な行動の実践、リーダーシップ、社会に対する貢献と学修意欲（社会的意義と社会貢献、自己学修）、協働活動の実践（巻き込み、協働）に分類した。

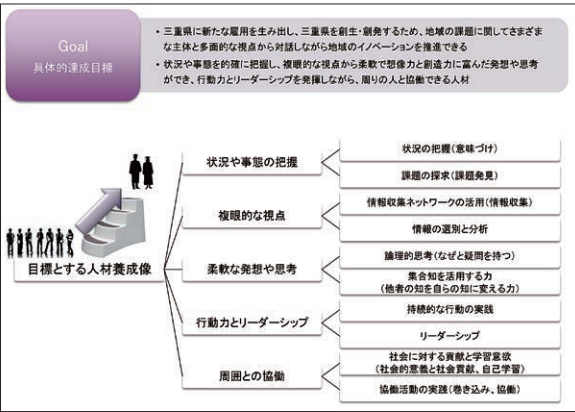


図7. 具体的達成目標の細目

具体的な取り組み内容

これらの課題と解決の方策をもとに、実際のPBL形式の体験型学修にて、運用を試みた。

（1） 3つの授業の概要

PBL形式の体験型学修は以下に示す3つの授業を対象とした。授業の概要は図8、9、10となっている。いずれの授業も、グループワークを基礎としたフィールドワークを実践している。

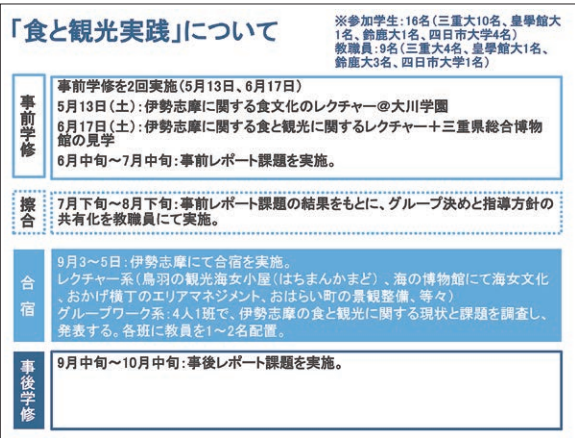


図8. 「食と観光実践」の概要

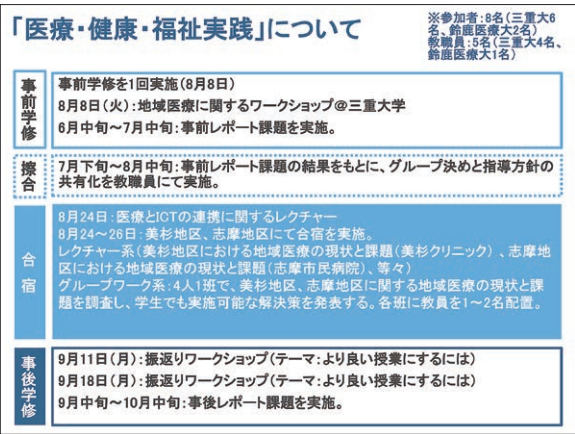


図9. 「医療・健康・福祉実践」の概要

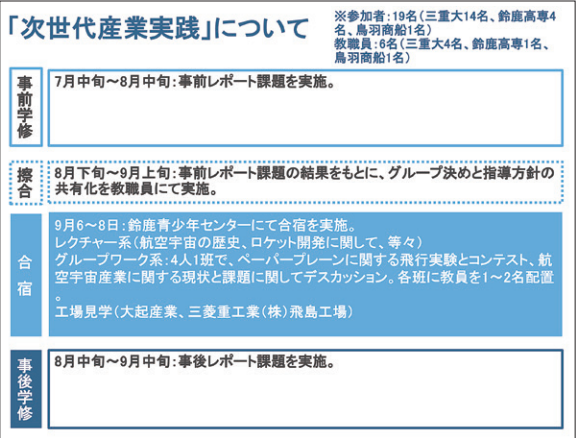


図10. 「次世代産業実践」の概要

（2） 3つの授業の具体的達成目標

次に、3つの授業に関して、担当教員と相談の上、シラバスとも照合し、具体的な達成目標を設定し、図11に示すような細目を指標とする事とした。



図11. 学生の能力形成のメタ認知：
各実践型科目への適用

(3) 形成的評価指標の表出方法

「三重創生ファンタジスタルーブリック」の特徴は、プレレポート（実習前レポート）とポストレポート（実習後レポート）の2種類のレポートにある。図12に事例を示す。

実習前レポート ①これまでの人生における代表的な事例でお答えください。学内外の演習活動、フィールドワーク、アルバイトや部活動などにおいて、活動中に発見した疑問点や不明点に対して、自ら情報収集を行い、収集した情報をもとに他者と議論を行った経験について、その時の状況や様子、自ら調べた情報など、あなたのことを知らない他者にも分かるように説明してください。 ② ①で収集した情報から、あなたはどのようなことを理解し、その理解に基づいて、どのような人とどのような議論を行ったか、あなたのことを知らない他者にも分かるように説明してください。
実習後レポート ①この度履修した科目において、活動中に発見した疑問点や不明点に対して、自ら情報収集を行い、収集した情報をもとに他者と議論を行った経験について、活動の背景・目的や活動において直面した疑問点や不明点、疑問を解消するために収集した情報などを含め、あなたのことを知らない他者にも分かるように説明してください。 ② 1)で収集した情報から、あなたはどのようなことを理解し、その理解に基づいて、どのような人とどのような議論を行ったか、あなたのことを知らない他者にも分かるように説明してください。

図12. (例)課題の探究 プレレポート(実習前レポート)、実習後(ポストレポート)の質問項目

まず、学生にはPBL形式の体験型学修に臨む前に、プレレポートを記入してもらった。このレポートは、日本語の文章説明能力を測る側面も持ち合わせている。近年の学生は活字離れの影響からか、構文の組み立てを非常に不得手としていることがわかった。そこで、文章の構文チェックを実施し、他者が読める文章にするというフィードバック作業を挟んだ。

つぎに、PBL形式の授業に臨んでもらい、その後にポストレポートを記入してもらった。この際にも、プレレポートと同じく文章の構文チェックを実施し、他者が読める文章にすると

いうフィードバック作業を挟んだ。

このプレレポートとポストレポートを提出することで、それぞれの評価指標に対する能力が数値化され、こういった指標が伸びたのかを客観的に把握することが可能となっている。

(4) レポートの提出回数

一例として、ポストレポート（実習後レポート）の学生の提出回数を図13に示した。各授業においてバラツキが出ており、その理由は複数考えられるが、レポートのフィードバックという経験は、おそらく学生にとっては初めてに近い体験であったと思われる。そのフィードバックが障害となり、途中で投げ出す学生もいた。

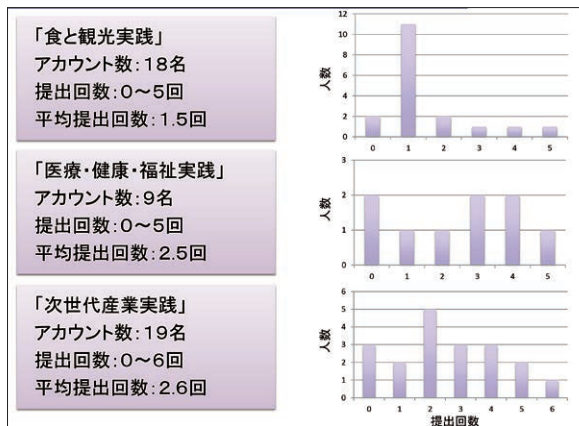


図13. ポストレポート提出結果
(提出・修正回数と人数の分布)

(5) 3つの授業の特徴と能力形成（平均値）

①「食と観光実践」：課題の探究、集合知の活用、社会に対する貢献と学修意欲 (図14)

本授業の特徴として、「課題の探究」と「社会に対する貢献と学修意欲」の2指標に関しては、横ばいの数値となった。特に、「社会に対する貢献と学習意欲」は、地域の食や観光に興味を持っている学生が多数参加していた事も大きく、元々、学修意欲が高かった事も影響していると思われる。一方で、「集合知の活用」という指標に関しては、グループワークを実施した事で、他者のアイデアを尊重する姿勢や自分とは違う他者の意見を受入れる姿勢も形成されていったことが分かった。

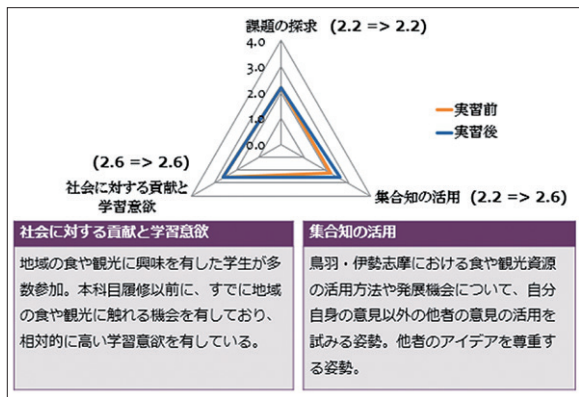


図14. 「食と観光実践」科目の特徴と
能力形成（平均値）

②「医療・健康・福祉実践」：リーダーシップ、協働活動の実践、論理的思考力 (図15)

本授業の特徴は、総じて数値が伸びた事にある。少人数（8名）での授業実施となったため、教員と学生の距離が近かった事も影響していると思われる。加えて、ゲストスピーカーである現役の医師たちが学生の質問に即時に回答してくれるという通常では経験できない事を実際に体験できた事で、学生が授業へ臨む姿勢も極めて高いものとなった。また、社会課題が明確（地域医療、高齢者の健康に関する複雑な課題）であり、学生自身、グループ内での議論とコンフリクトに対して、積極的に取り組む姿勢がうまれた。

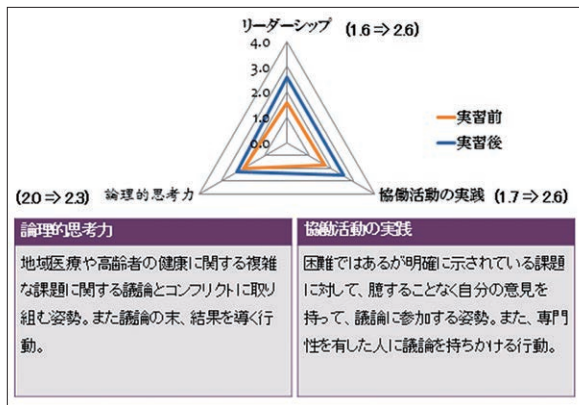


図15. 「医療・健康・福祉実践」科目の特徴と
能力形成（平均値）

③「次世代産業実践」：課題の探究、持続的な行動の実践、協働活動の実践 (図16)

本授業の特徴としては、「課題の探究」と「持続的な行動の実践」の指標が伸びはなかったことである。その一方で、「協働活動の実践」に関しては、一定の伸びがみられた。その理由としては、チームごとに作成するペーパーレーンの飛距離を競い合うという協働作業の場に、専門性を有した教員が存在したことで、学生が直面する技術的な課題をその場で解決できるという即時性も影響していたものと考えられる。

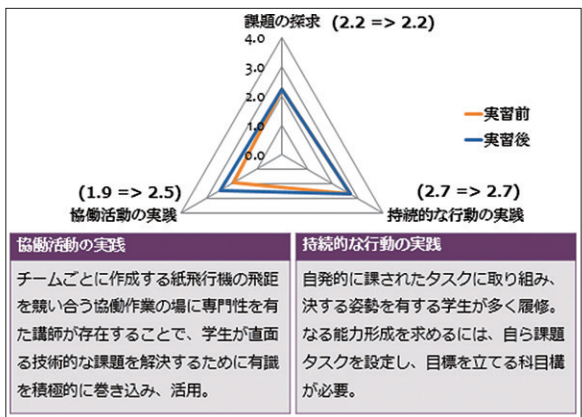


図16. 「次世代産業実践」科目の特徴と
能力形成（平均値）

（6） 3つの授業の学生の感想

以上の3つの授業は、学生にとってはPBL形式の体験型学修というタフな授業ではあったが、プログラムが充実しており、大変有意義であったとの感想を得る事ができた。

「食と観光実践」Tさん
400年以上の歴史をもつ餅菓子店である伊勢市の企業『二軒茶屋餅角屋本店』が『伊勢角屋麦酒』という新たな部門を立ち上げ、クラフトビールの世界大会でいくつもの賞を獲得していることを知り、<u>何故餅菓子店がビールを作り始めたのかという疑問</u>を抱きました。 - メンバーの意見から浮上したもう1つの成功の要因は、〈地元の人や観光客向け〉と〈クラフトビールのファン向け〉の2つにターゲットを分けてビールを製造していることです。私達は、ターゲットを分断・明確化することによって、より客のニーズに合った商品を提供出来たのではないかと考えたのです。議論を通じてさらに理解したことは、<u>消費者・利用者のターゲット層に適切なサービスがいかに重要か</u>、ということでした。

「医療・健康・福祉実践」Yさん
- 夏休みに、私は自分の故郷である三重県の社会的事象について学ぶ「日本理解特殊講義」という集中講義を受講しました。テーマは医療・健康・福祉実践で、合計七名の学生が参加し二泊三日の合宿型で行われました。 <u>看護学を学んでいる中で、もっと三重県の医療の事を知りたいと思ったのが今回参加しようと思ったきっかけ</u>でした。 - 私は、若者にこの地域について深く理解してもらうため、一か月程の体験に来てもらうという意見を提示しました。すると、他のチームメンバーから「その間、体験者はどこで生活するのか」という意見が出ました。<u>そこで私が考え出したのは、その地域の家にホームステイさせてもらうという案です</u>。衣食住の保証があり、地域の伝統的な文化や食事も知れて一石二鳥なのではないかという結論となりました。

「次世代産業実践」Aさん
- この講義をきっかけに世界の航空機の需要についてインターネットで調べ、日本航空機開発協会の第…よりMRJ規模の中型ジェット旅客機の需要が増えていることが分かりました。…このことから、<u>国内の航空機産業に参入する企業はどれくらいの利益を見込んでいるか、商業的に成功するための対策などを雲井先生と議論</u>しました。 <u>「グループ内で積極的に自らの意見を発信して、グループをまとめる事」を自らの目標として掲げていました</u>。雲井先生や小林先生の講義では、<u>講義中に疑問に思った事や、さらに詳しく知りたいところをメモして、講義後に質問しました</u>。

トランス・ラーニング

[教育プログラム]

三重大学COC+は県内全高等教育機関が事業協働機関となっており、4年生大学の他、医療系大学、短期大学、高等専門学校を含んでいる。高等教育機関によっては、地域について深く学ぶ授業や時間を十分にとることができないことや新しく授業を開発するための時間を確保することが難しい現状がある。よって、「三重を知る」共同授業の開発で作り上げた2つの地域志向授業「三重の歴史と文化」（前述38ページ）、「三重の産業」（前述39～41ページ）の授業資料を参考に県内全高等教育機関が利用できる地域について学ぶ教材を開発し、県内全体で学生に地域について深く学ぶ機会を得られるようにした。また、その一つの教授法としてトランス・ラーニングを開発した。

背景

現在、大学生を対象としたアクティブ・ラーニングは様々な手法が実施されている。従来型のパッシブ型学修ではない、学修者の能動的学修は、今後益々重要となってくる。グローバル社会の一員でもある日本において、自己の主義主張が発信出来ない、他者と議論ができない事は致命的であると言ってよい。その意味でも、学生の時分より、しっかりと自己分析力と発信力を身につけてもらいたい。そこで、アクティブ・ラーニングの1つとしての新しい教授法であるトランス・ラーニングの開発を進める事とした。このトランス・ラーニングは、何処でも誰でも学修する事が出来る比較的に敷居の低い仕様としている。また、教員においては、高度な専門的スキルを必要としない。そのため、一定程度のティーチングスキル（アカデミックスキル）が備わっている教員であれば、比較的に容易に取り組む事ができるところに特徴がある。なおかつ、教員自身は、毎授業の学修テーマ設定と学びの場づくりのみ注力をする事となり、実際の授業内では、学生たちが学び合いを自発的に行ってくれる。そのため、実は「楽」ができるのである。多くの教員たちにこのトランス・ラーニングに取り組んでもらいたいと思っている。

内容

（1） トランス・ラーニングの概念

図1にトランス・ラーニングの概要を示した。従来型の反転授業を発展させ、独自に開発したメソッドである。教員が教育テーマとコンテンツを事前に学生に提供し、学生が自らテーマとコンテンツをもとに情報収集と教育コンテンツの作成を行う。自己学修を通じて作成した教

育コンテンツを活用してクラスメイトに対して学生自身が授業型プレゼンテーションを実施し、その内容に応じて質疑応答・議論を行うことで、学生個々人の能動的な学びを実現し、また学生同士の相互理解を促している。教員・TAは質問やファシリテーションに注力し、学生の能動性を引き出すことに注力する事となる。



図1．トランス・ラーニングの概念

（2） トランス・ラーニング「ASET」

図2として、実際にトランス・ラーニングを進める際の「ASET」をまとめた。「ASET」とは、Aは課題の設定（Agenda）、Sは検索・調査（Search）、Eは資料作成（Execute）、Tは他者への説明（Teach）の頭文字となっている。また、これらの一連の流れを支える3つのEも重要だ。設備（Equipment）、環境（Environment）、演出（Entertainment）である。設備（Equipment）とは、グループワークを実施するのに適した教室やプレゼン設備（音源、等）である。環境（Environment）とは、議論可能なフラットな空間、教員とのフラットな人間関係、発言しやすい安心・安全な環境である。実は、もっとも重要なEとして演出（Entertainment）がある。学生自身が楽しみ

ながら学ぶ工夫や自発性を引き起こすアジェンダの設定、ポジティブなやり取り、などがこれにあたる。

これらが全てそろえる事は理想的ではあるが、多少の不備があっても実施することは可能である。

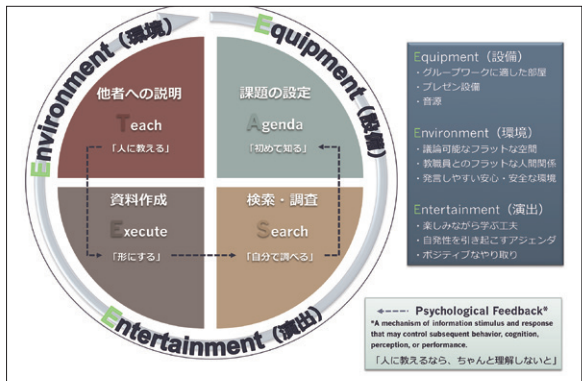


図2. トランス・ラーニング「ASET」の概念図

(3) ARCSモデルに基づくトランス・ラーニング

アメリカの教育工学者であるジョン・ケラー (JOHN M. KELLER) は、1983年にARCSモデルを提唱した。このARCSモデルは、インストラクショナルデザイナー (教育設計者) が学修意欲の問題に取り組むことを援助するシステムモデルである。

学修意欲の問題と対策を、興味・関心 (ATTENTION)、関連性 (RELEVANCE)、自信 (CONFIDENCE)、満足感 (SATISFACTION) の4要因に整理した枠組みと、各要因に対応した動機づけ方略、ならびに動機づけ設計の手順を提案したものである。

トランス・ラーニング「ASET」とARCSモデルは、図3のような関係性を持っているといえる。

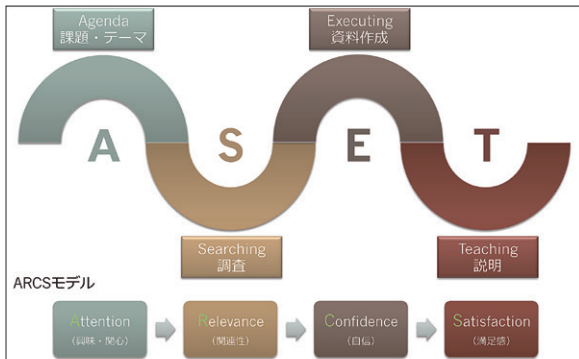


図3. ARCSモデルに基づくトランス・ラーニング

(4) ARCSモデルに基づくトランス・ラーニングの4つの戦略

戦略1: Agenda for Attention (図4)

教員の姿勢としては、学生の興味・関心を喚起するテーマ設定を行う事が重要となる。また、チームビルディングに際しては、自由でオープンな発言の環境をつくり、前提知識のない学生でも発言できるような問い掛けも必要となる。加えて、動画、音声や実物など、学生の五感を刺激するメディアを使用するのも効果的である。そして、学生が身近に感じられる導入 (格好いい映像、楽しいクイズ、等) を用意するのも重要だ。

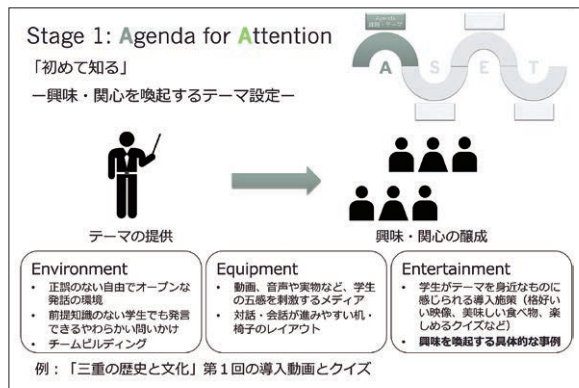


図4. Agenda for Attention

戦略2: Search of Relevance (図5)

学生自身が学修活動を通じて関わりを感じられるように教員は導く必要がある。学生自身が気になったことを自分で調べたくなるような問い掛けや、検索したことを書き残せる模造紙、パワポ、付箋紙の準備も必要だろう。現在の学生は、スマホをほぼ100%近く所有して

おり、直ぐに検索をする行為に関しては、比較的にバリアが低い。

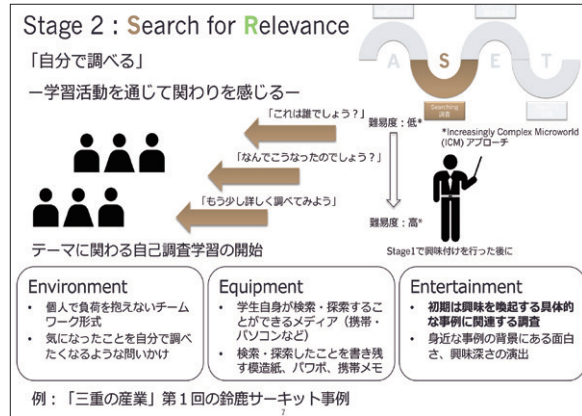


図5. Search of Relevance

戦略3: Execute for Confidence (図6)

学生自身が調査した事を自分なりにまとめ、自信をつける。教員の姿勢としては、消極的な学生を否定せず、能動的な学生を賞賛する。また、発表形式の資料作成ソフトの提供もあるとよい。そして、「よく調べたね」等の学生が調べた事を他の学生に教えたいようになるように気持ちを後押ししてあげる。初期の段階では、授業時間内でのワークとして、状況をみてホームワーク化へ移行する。多学部混合の科目の場合は、学生が自主的に集まらない事を考慮する。少人数科目の場合は、状況をみてホームワーク化を進める。

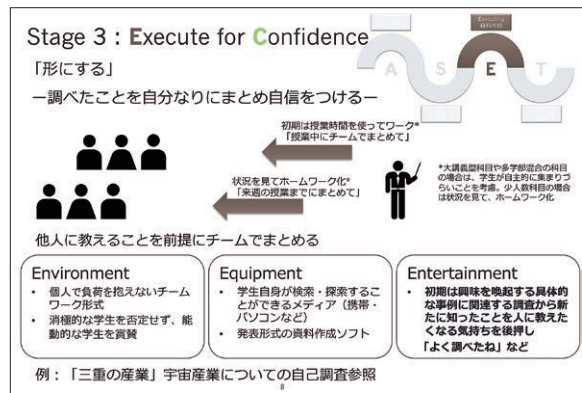


図6. Execute for Confidence

戦略4: Teach for Satisfaction (図7)

学生自身が、他の学生に教える事で、うまくいった時の満足感を得るような環境づくりを行う。教員の姿勢としては、学生自身に、発

表ではなく、「教える。教わる。」という場である事を認識させる。チーム内で1名はPCを利用してTeachingの際に利用するように促す。ポジティブなコメントやアドバイスを積極的に提示して、学生自身の気持ちを盛り上げる。調査の深さが足りずイマイチな場合は、否定せずに、学生が気づかなかった見方等を提示し、フォローアップを行う。

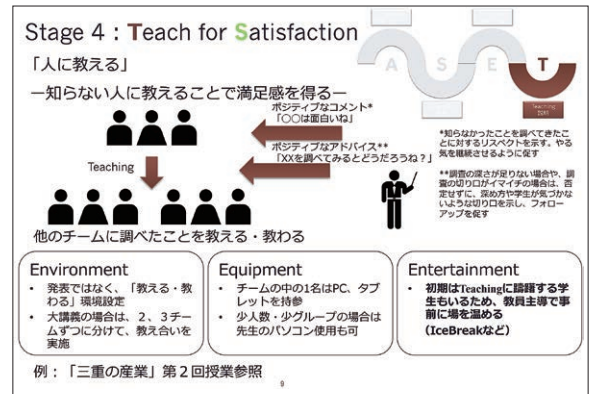


図7. Teach for Satisfaction

(5) トランス・ラーニングに基づいた科目設定案

図8として、科目の設定案を3パターン示した。基本的な構成としては、1テーマを2回で実施する事としている。

学生の負担を軽減する事を考慮すると、上段の「ホームワークがなく、テーマが1回で終了した場合」となる。この場合は、テーマの設定が重要で、比較的軽い内容にせざるを得ない。授業の初回 (オリエンテーション、等) での実施に向いているだろう。

中段の「ホームワークがあり、テーマが1回で終了しない場合」に関しては、テーマの設定の自由度も上がり、アウトプットの精度が上がる可能性を持っている。一方で、学生の負担が多くなる。意識が比較的に高い学生たちには最適かもしれない。授業の終盤での実施に向いているといえるだろう。または、高学年次の専門科目 (ゼミ、卒論、等) での実施には向いているといえる。

下段の「ホームワークがあり、テーマが1回で終了した場合」に関しては、中段と同様に、学生の負担はある程度かかる。一方で、更な

るテーマの掘り下げを実施しない事で、比較的に取り組みやすい構成となっている。授業の中盤での実施に向いているといえるだろう。

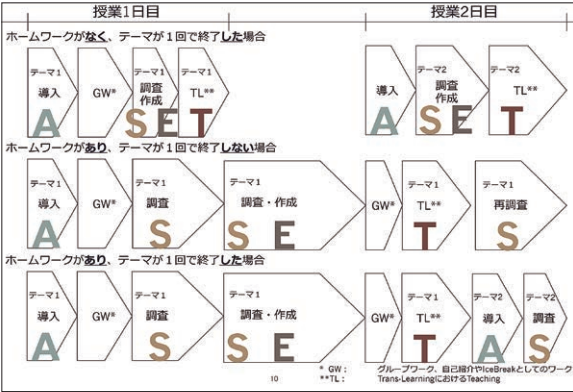


図8. トランス・ラーニングに基づいた科目設定案

これらはあくまでも設定案であり、実際の授業では、必修科目か選択科目か、教養教育か専門教育か、学生の理解度は、等々、状況によって変わっていくだろう。また、授業運営の中でも状況は変化していくため、常に見極めながら最適なパターンを提示していく事も重要である。

（6） トランス・ラーニングに基づくクラス運営
図9として、トランス・ラーニングに基づくクラス運営の概念を示した。

- ① 1チームは2～6名で実施する。あまり多くすると離脱者が発生し、少ない場合は、個人の能力に依拠してしまうため、注意が必要である。
- ② SAを活用したクラス運営。2～3チームにSAを配置して、実施する。
- ③ コンタクトパーソンを1チームに1名設定し、実施する。コンタクトパーソンはSAでも可能とする。
- ④ 少人数クラス（20名程度）での実践型科目においては、1チームのTeachingを残りの3チームが聞く。
- ⑤ 中人数クラス（50名程度）での座学型科目では、クラスを分割し、SAのサポートも使って④と同様に実施する。
- ⑥ 大人数クラス（100名超）での座学型科目では、隣チームとペアになり、実施する。中人数の場合でも可能である。

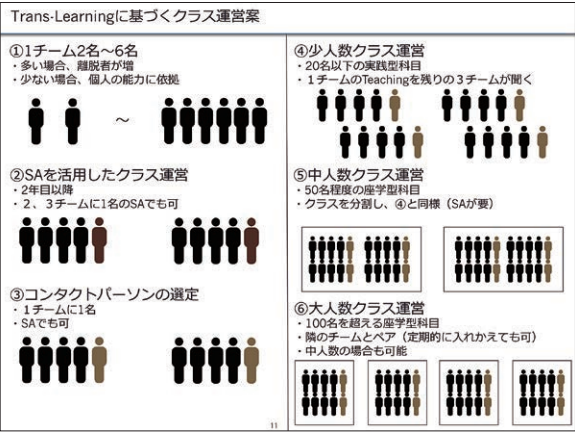


図9. トランス・ラーニングに基づくクラス運営の概念図

県内全高等教育機関で利用できる授業教材

トランス・ラーニングを開発する際に整備した地域に関する授業教材は、県内全高等教育機関で利用できるよう、著作権などに注意をはらい、インターネット上で共有をすることとなった。

三重創生ファンタジスタ資格証書

[教育プログラム]

平成29年度より順次、県内高等教育機関より三重創生ファンタジスタが養成される。その際、ベーシック資格を認定する機関は各高等教育機関とせず、県内全高等教育機関で構成するCOC+後継組織でもある「高等教育コンソーシアムみえ（後述74～77ページ）」で認定することとし、本コンソーシアム会長名で発行することとした。

資格の発行者

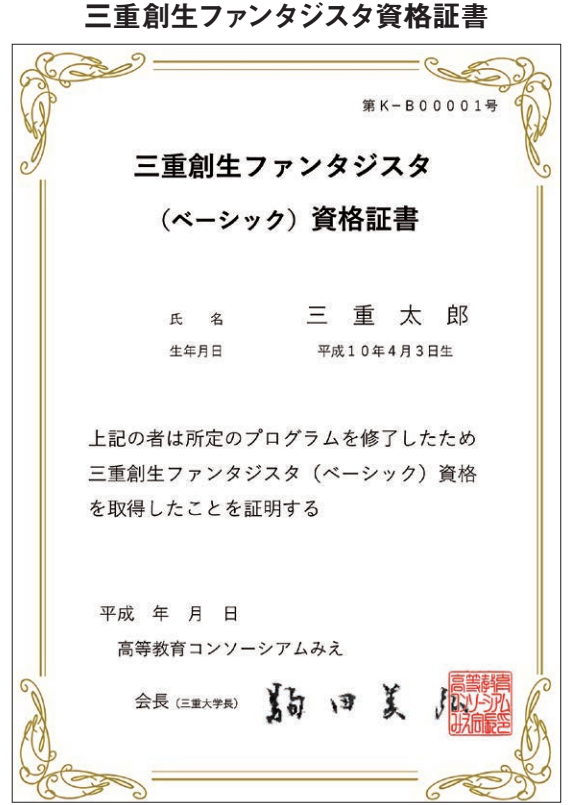
当初、各高等教育機関の長で発行する案もあったが、三重創生ファンタジスタ資格は県内全体で作り上げた資格でもあり、それを考えると各高等教育機関が認定するのではなく、全高等教育機関で構成する高等教育コンソーシアムみえで発行する方が適切であるとの判断があったためである。これは、COC+が参加校を含めた全体の取り組みであることが認識されたことによる大きな一つの成果と言える。

三重創生ファンタジスタが誕生

平成29年度末には、各高等教育機関所定のプログラムを修了し、学生からの申し出をもって四日市大学（6名）、鈴鹿工業高等専門学校（5名）、鳥羽商船高等専門学校（11名）、鈴鹿医療科学大学（63名）から三重創生ファンタジスタが誕生した。

三重大学定例記者懇談会で報告

平成30年1月29日にはCOC+事業推進責任者である三重大学山本俊彦理事（教育担当）・副学長より、県内各所から三重創生ファンタジスタが誕生する旨広報を行い、三重県全体で三重創生ファンタジスタの養成、地域活性化を行っていることをアピールした。



三重大学長による県内企業訪問、エースセミナー

[COC+に係る三重大学内の活動]

三重大学長自らが三重創生ファンタジスタ資格、インターンシップ卒業要件化、共同研究等について対話をするため、県内企業・団体に訪問を行っている。また、企業の社長や若手社員の声を学生に届けるため、平成28年度には「社長セミナー」、平成29年度には「エースセミナー」のイベントを開催し、県内企業の魅力発信を行っている。

学長による県内企業訪問実績

平成27年度から始めた県内企業訪問実績は、平成28年度末には107企業、平成29年度末には205企業となった。COC+校の三重大学長が自ら地域の企業に足を運び、直接三重創生ファンタジスタ資格の啓発を実施することは、トップ自らがCOC+事業を成功させようとする意思の現われであり、外部からも高い評価を得ている。

県内企業エース社員と対話する「エースセミナー」

三重県が誇る優れた企業のエース社員（県内の企業において、地域と自社が好きで、将来会社を背負って立つような社員や幹部社員または三重大学卒業生の社員等）と直接懇談ができる「エースセミナー」では、県内企業20社の協力を得て、計10回にわたり県内企業のエース社員に、自社の魅力ややりがいを語っていただき、参加学生との質疑応答を行った。



▲事業協働機関である株式会社百五銀行や万協製菓株式会社、株式会社マスヤにも講演していただいた。

計10回で延べ320人の学生が参加し、アンケートの結果、学生の満足度が高く、地元企業で働くやりがい・魅力について理解が深まったことが確認できた。

三重大学
MIE UNIVERSITY

2017年度

三重県内のエース社員と語ろう

エースセミナー

県内優良企業からエース社員にお越しいただき、働くことの魅力ややりがいをお話しいただきます。みなさんの質問や相談にも時間の許す限り答えていただきますので、この貴重な機会にぜひご参加ください！

日程 2017年6～12月 隔週水曜日

時間 12:05～12:50（昼休み）

会場 環境・情報科学館 1F ホール（3F PBL演習室5・6）

対象 三重大学 学生

内容 1回につき、2社のエース社員にお話しいただきます。

参加予定企業

（五十音順）

（株）伊賀の黒モクモク手づくりファーム、（株）おやつカンパニー、北伊勢上野信用金庫、九鬼産業（株）、（株）安洋、ジャパンマテリアル（株）、日本トランスシティ（株）、万協製菓（株）、（株）ビーイング、（株）百五銀行、（株）マスヤ、（株）三重銀行、三重交通（株）、（株）三重電子計算センター、御本本製菓（株）、（株）メディカルー光、（株）安永、ヤマモリ（株）、長島観光開発（株）、井村屋（株）

第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	第8回	第9回	第10回
6/7	6/21	7/5	7/19	10/4	10/18	11/1	11/15	11/29	12/13
3F	1F	3F	1F	3F	1F	3F	1F	1F	1F

問合せ先：三重大学地域人材教育開発機構

MAIL: chikijinza@ab.mie-u.ac.jp

TEL: 059-231-9982

申込不要

▲エースセミナーポスター

スタートアップセミナー

[COC+に係る三重大学内の活動]

三重大学における初年次前期開講の必修授業である。COC+で作成した地域に関するビデオ教材を視聴し、三重県や各市町が抱える課題についてグループで探求課題を設定する。その際、学生からの質問に対し専門家の回答を要する場合は、COC+専任教員、コーディネーターが仲介役となり、学生が専門家に対し質問できる機会を整えている。

スタートアップセミナー詳細

スタートアップセミナーは、授業を通して三重大学の教育目標である「4つの力」について知り、大学生としての学びの基盤づくりをすることを大きな目的としている。4、5名で1グループとなり、グループで一つのプロジェクトを完成させ発表するという活動が授業の中心になる。毎回の授業では個人課題の準備・取組みを重視し、それをもとにグループ活動を行い、それらを支える形で教員による講義を行う。

（教養教育院HP）



地域を知るビデオ教材の追加

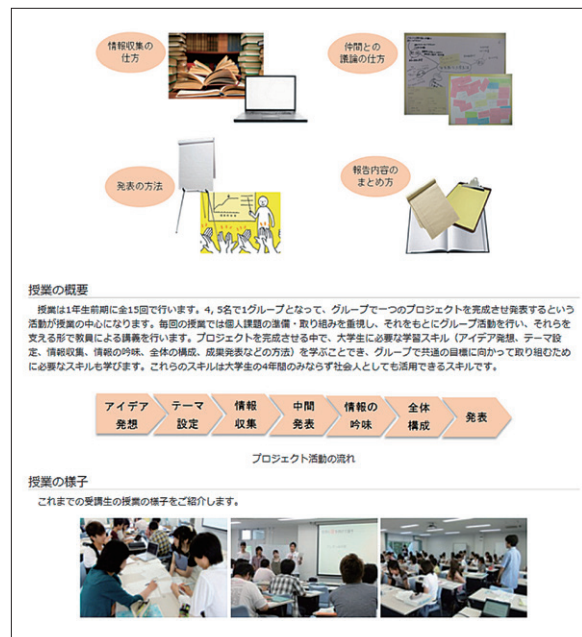
平成28年度は三重県知事との対談を含めた5本のビデオ教材を手がかりに、スタートアップセミナーを開始したが、平成28年度の第一次産業体感ツアーを通じて作成したビデオ教材をCOC+HP上にアップし、学生が自由に視聴できるようにした。

（8本のビデオ教材）



学生の学びを深める

グループが課題探求を深めると、調べ学修に限界があるため、専門家への取材を要する場合がある。その際、COC+専任教員及びコーディネーターが各専門家との仲介窓口となり、COC+及びスタートアップセミナーの趣旨を説明した。平成29年度は10数企業・団体、専門家へ繋いだ。



▲スタートアップセミナー授業イメージ

スタートアップセミナーにおける 学生が取り上げた地域課題テーマ一覧（一例）

南海トラフと関連災害による津市の死亡者数を減らすにはどうしたらよいか ～自然科学と工学の融合によるアプローチ～
三重県の子供の学力向上のため親ができることは何か？ ～カラスの子育て法から～
名張市にどう若者を呼び込むか？ ～動物媒花とポリネーターの関係に学ぶ～
南海トラフ地震における三重県の被害を軽減する方法は？ ～バイオミクリーから学ぶ～
伊勢・志摩の地震や津波への対策は？ ～バイオミメティクスを利用した方法の提案～

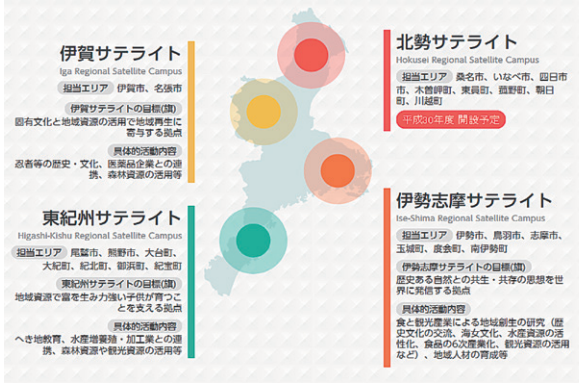
三重大学地域拠点サテライト

[COC+に係る三重大学内の活動]

平成28年度から順次設置している「地域拠点サテライト」では、県内全域を三重大学の教育研究フィールドと位置付け、多様な地域特性を有する4つの地域サテライト（伊賀サテライト、東紀州サテライト、伊勢志摩サテライト、北勢サテライト<平成30年度設置予定>）を展開している。各地域サテライトにおいては、自治体・教育機関等との連携および協力をもとに、特色豊かな活動拠点が置かれ、教員や学生がフィールドワーク等の実践的な教育研究活動を行っている。

また、これら4つの地域サテライトが地元企業や自治体と大学を繋ぐハブ機能としての役割を担うことで、地域課題の発見・共有、共同研究・共同プロジェクト等を通じた課題解決等に全学的に取り組みながら、三重大学の教育研究力の向上に加え、地域創生や地域の人材育成に貢献している。

4つの地域拠点サテライト



地域人材の養成

三重大学内で役割分担を行い、COC+事務局では県内高等教育機関連携による大学生への教育プログラム強化に力を注いでいる。地域拠点サテライトでは本学学生との教育活動のほか、小・中・高の生徒を対象とした地域人材育成も取り組んだ。

○ 伊賀サテライト実績

小・中・高への出前授業や連携授業を通して、生徒と教科担当者への教育向上へ繋げ、三重大学への進学や地元企業への就職に繋がるよう人材育成を行った。

（教育）

・ 中高大連携出前授業実施 5回

⇒1月26日産学官連携セミナーで、中高大連携出前授業に参加した学生による成果報告を行った。

・ 小学校への出前授業実施 15回

（就職）

・ 11月11日に「伊賀地区保護者様向け就職活動についての説明会」を開催し、36名の学生・保護者が参加した。

○ 東紀州サテライト実績

東紀州地域高校生に対し、東紀州地域の事業者を招き高校で講演してもらうことや、大学生から勉学や研究活動、大学生活などの講演を行うことで、地元地域でイキイキと暮らし、大学進学を促す等、各種事業を実施している。

（教育）

・ 木本高校、尾鷲高校に対する講演

大学による講演 3回

事業者による講演 3回

・ 高大連携東紀州講座を5回実施し、木本高校、尾鷲高校の高校生計約400名が参加した。
・ 尾鷲高校において地域創生に関わる地場食材を活かした商品開発に向けた授業を1月17日に実施した。また、1月18日に、先の授業を受けて、具体的な地場食材の活用方策をワークショップ形式で実施した。

・ 2月7日に木本高校総合学習（高校1・2年生対象）を開催し、大台町地域おこし協力隊を招き、東紀州地域の知見を深めた。

・ 尾鷲の自然を地域教材として郷土の視線に触れてもらう、尾鷲市内小学生対象の「尾鷲っ子自然サイエンス教室」を開催し、15名の児童・保護者が参加した。

・ 2020年の英語教育及びICT教育の必修化に関する東紀州地区の教育現場が抱える課題へ

の対応として、東紀州地域の教育委員会からの要望等を受け、以下のように地域と連携して課題解決に取り組んだ。

英語教育に関しては、ICTを活用した英語教材の開発に取り組み、その実践を行うため、東紀州地区の小学校を対象とした出前授業（計43時間）を行ったほか、同地区小学校の教員に対する講習会や研修会を行った。このほか、平成30年3月には、英語発音に関するアプリを開発し、平成30年5月より東紀州地区の小学校で活用予定となった。

ICT教育に関しては、マサチューセッツ工科大学の開発したプログラミング教材「scratch」を活用し、東紀州地区の小学校を対象に、出前授業（計10時間）を行った。

このほか、児童用スライドショーアプリをはじめとしたeラーニングの学習アプリを開発し、平成30年5月より東紀州地区の小学校を対象に実践することとなった。

○ 伊勢志摩サテライト実績

（教育）

・ 9月13日に南伊勢高校南勢校舎で「地域経営プラン演習」を実施し、南伊勢高校の2年生を対象に、地域を知り、地域に定着する人材となるためのキャリア教育として実施した。

・ 9月13日に南伊勢町の主に一次産業に従事する若手人材並びに南伊勢高校の生徒・教員を対象として「南伊勢町まちづくりリーダー研修」を行い、10月に設置予定の「みなみいせ商会」に如何に取り組んでいくかについて意見交換を行った。

・ 水産高校との高大連携事業「志摩域における水産増養殖の振興に関わる研究および教育での連携」を年間に渡って実施し、地域を深く学ぶ機会を提供した。

三重大学共同研究スタートアップ促進事業
及び地域貢献活動

[COC+に係る三重大学内の活動]

三重大学では中小企業との共同研究の促進を図ることや地域貢献活動の創造及び推進を目的に助成支援を行っており、38の共同研究及び27の地域活動に対して支援を行った。

平成29年度 中小企業との共同研究スタートアップ促進事業採択一覧

申請者		研究題目
No	所属	
1	生物資源学研究科	ブリ醤油の抗肥満効果をはじめとした生体調節作用に関する研究
2	生物資源学研究科	エコジオ工法による盛土地盤の排水効果に関する調査研究
3	生物資源学研究科	太陽光利用型植物工場における麻竹周年栽培のための環境制御最適化技術の開発
4	工学研究科	自動車用エアロパーツの開発
5	伊賀サテライト	地域の菓子をブラッシュアップした忍者関連商品の開発
6	生物資源学研究科	モザンビークにおけるティアラピア養殖推進スタートアップ促進事業
7	生物資源学研究科	魚類・頭足類における視覚機能特性の多様性理解による沿岸漁業再振興
8	工学研究科	PTFE 平膜を用いる膜分離活性汚泥法における散気システムの改良
9	教養教育機構	DCブラシレスモーターの低速回転域で発生する騒音の評価と対策
10	生物資源学研究科	特異な食品加工工場残渣（高糖度・酸性廃シロップ処理液）のバイオガス化による工場循環型エネルギーシステムの構築
11	工学研究科	アルミ電解コンデンサ用高機能二塩基酸の耐熱安定性の向上
12	医学系研究科	新規ヒト精子凍結保存液の開発
13	生物資源学研究科	直交集成板（C L T）を用いた建築物の温熱環境評価
14	生物資源学研究科	羽毛原料中に棲息する微生物叢解析および検査技術の開発
15	教育学部	食品用乳酸菌製剤の製造技術の確立
16	地域イノベーション学研究科	分散系スキנקエア製剤の品質データベース構築のための定量評価技術の確立
17	工学研究科	宿泊施設の厨房の業務効率化と災害時安全性確保に関する実践的研究
18	生物資源学研究科	ショウガ・ゆず等地域資源作物抽出物の機能性評価
19	人文学部	三重県内の中小企業の異業種交流を通じた経営者の経営能力の向上とその支援方法についての研究
20	地域イノベーション学研究科	三重県特産品からの化粧品開発
21	地域イノベーション推進機構	時空間データベースとAR空間を連携させた防災・減災ツールの開発研究
22	生物資源学研究科	高周波併用フリーズドライ法における農産物の乾燥・殺菌同時処理に関する基礎研究
23	生物資源学研究科	山間地域を活性化させるためのニュータイプキノコの開発
24	医学系研究科	羽毛原料の安全性品質評価技術の開発
25	伊賀サテライト	酸化チタンの熱触媒反応を利用した環境微量物質の分解処理
26	教養教育機構	多言語作業マニュアルの作成と活用；接触場面における情報共有とリスク回避のためのコミュニケーション行動調査
27	教育学部	簡易人型ロボットと3Dプリンタのプログラミング教育への応用
28	地域イノベーション学研究科	生産現場および市場が求めるアブラナ科野菜品種に有用な分子育種手法の開発
29	生物資源学研究科	高採算性生薬原料栽培事業の構築を目指した生薬原料の用途拡充の検討
30	地域イノベーション推進機構	晩抽性高品質ダイコンの開発に向けた共同基盤研究
31	地域イノベーション学研究科	高速液体クロマトグラフ質量分析装置を用いた柑橘類果汁及び天然抽出物の成分分析
32	工学研究科	高耐久性コパレトフリー型湿度インジケータの開発
33	地域イノベーション学研究科	老朽化が進む公共施設の保守従事者の作業環境改善と安心感を提供する太陽光利用照明システム
34	生物資源学研究科	リボソーム製造装置を用いたキンギョ抗体作製
35	生物資源学研究科	国産ハーブを用いた緑化用シートの開発とシカ食害忌避能力の検証
36	生物資源学研究科	木質系/バイオマス組成分析のための標準木粉の開発
37	伊賀サテライト	IchigoJamを使った小・中学校を対象にしたプログラミング学習導入支援教材開発
38	工学研究科	有害物質その場計測用高性能表面プラズモンセンサーの開発

・人文1件、教育2件、医・病2件、工6件、生15件、地5件、教養2件、地推2件、サテライト3件

平成29年度 地域貢献活動支援事業採択一覧

申請者		活動テーマ
番号	所属	
1	人文学部	三重県におけるアートマネージメント養成プログラムの開発
2	教育学部	外国人児童生徒の学びの継続を目指す支援活動 ーキャリア形成につながる大学見学ツアーの実施ー
3	教育学部	ヒノキ等森林資源からのアロマオイル抽出とその製品化
4	医学系研究科	「地域でのアクションリサーチで、健康増進を改善する」
5	医学系研究科	人生経験のもつ強みを「聞き書き」を通して発見しよう
6	工学研究科	光技術による産学官の連携と地域産業の振興
7	生物資源学研究科	東紀州におけるICTを援用した科学的柑橘栽培支援
8	生物資源学研究科	尾鷲天満荘（東紀州産業振興学舎）を利用した地域食文化実習
9	生物資源学研究科	志摩の里海と海女文化を支える磯根資源の増殖のための取り組み
10	生物資源学研究科	地域の農業水利施設管理の高度化と標準化言語を利用した汎用化
11	生物資源学研究科	津のお米の味と品質を裏付ける生育診断・環境評価手法の開発と実践
12	生物資源学研究科	三重大学オリジナル酒米品種「弓形穂」を活用した多気町地酒ブランド作りへの貢献
13	生物資源学研究科	大内山川に生息する放流アユ比率の季節変動
14	生物資源学研究科	東紀州サテライトを拠点とした地域プロジェクト型インターンシッププログラムの開発
15	生物資源学研究科	宮川用水のバイブライン内のタイフンシジミ詰まり問題解決に向けて
16	生物資源学研究科	ウニ除去を通じた三重県南部の藻場再生活動の推進
17	生物資源学研究科	LED利用型植物工場における光環境特性の構築および商用普及
18	地域人材教育開発機構	三重県の餅文化を活かした地域活性化～三重創生ファンタジスタクラブ「三重餅プロジェクト」～
19	地域拠点サテライト	東紀州サテライトを拠点とした熊野地域の小中高の児童・生徒に対する「木育」プログラムの開発と実施
20	人文学部	落語を活かした地域活性化の取り組み
21	教育学部	津市における「子どもの体力・運動能力向上のための推進活動」と「教員の学びの支援ネットワークの構築」
22	工学研究科	「伊勢河崎商人館」における展示計画を通じた景観まちづくり活動の推進
23	生物資源学研究科	地元テレビ局や気象予報士との協働による三重の『気象力』向上プロジェクト
24	生物資源学研究科	三重県のセルロースナノファイバー（CNF）事業の活性化支援
25	教養教育機構	鈴鹿市における大学・教育委員会・学校が連携した不登校対策の推進
26	教育学部	三重県において『未来の科学技術イノベーター』を育成する産学官連携プログラムの開発
27	教育学部	生涯スポーツを基軸にしたスポーツ交流活動

高等教育コンソーシアムみえ

[COC+後継組織]

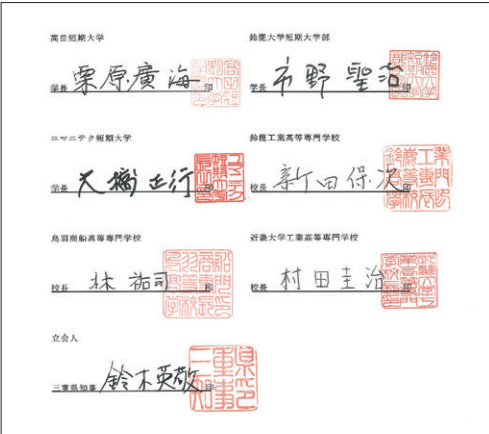
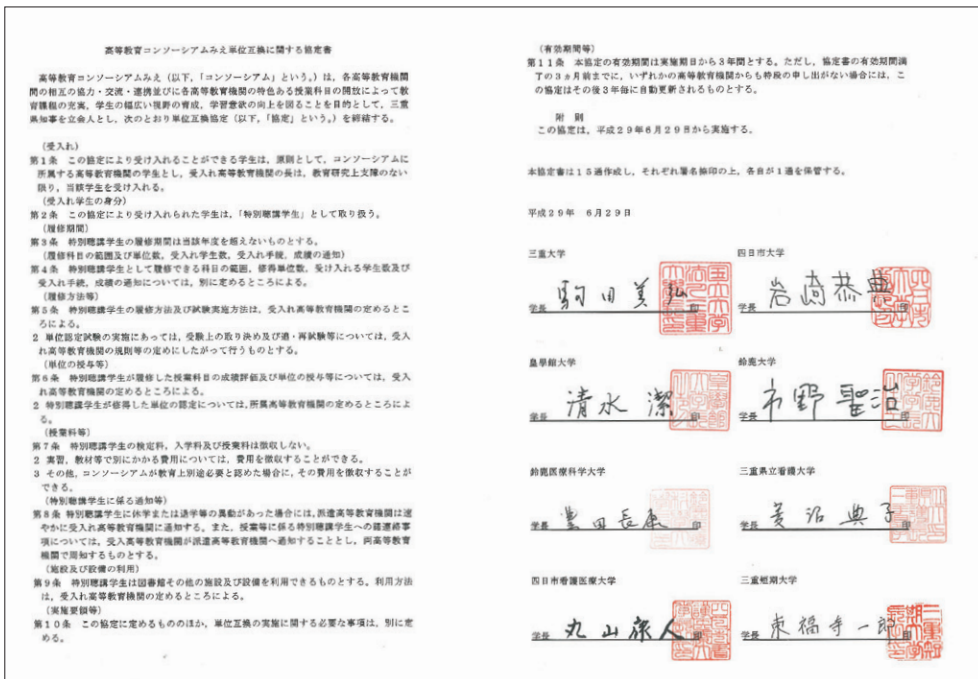
高等教育コンソーシアムみえは、県内全高等教育機関に三重県を加えた組織体であり、平成28年3月に設立された。COC+事業の後継組織として位置づけられており、三重創生ファンタジスタ資格認定を含む教育プログラムや受託事業等、多種多様に展開している。平成29年度には、同年4月に開学したユマニテク短期大学を加え、14高等教育機関と三重県で事業を実施している。

沿革

1. 平成28年3月
高等教育コンソーシアムみえ協定締結式開催
2. 平成29年3月
ユマニテク短期大学が高等教育コンソーシアムみえに加盟
3. 平成29年4月
全国大学コンソーシアム協議会加盟
4. 平成29年6月
単位互換協定締結

單位互換協定

平成29年6月に単位互換協定を締結した。平成30年度にあたっては、高田短期大学、四日市大学、三重大学の3校、計14の授業を単位互換科目として開放することとし、今後より単位互換科目を充実していくこととなった。



地方創生に取り組む市町、地域の支援について

三重県内を3つの区域に分け、四日市大学、皇學館大学、三重大学の3校が地域のハブ機能を担い、県内それぞれの市町や企業のニーズ把握を行った上で、地域の課題解決に向けた事業や共同研究の提案などを行い、平成30年度に向けたプロジェクト組成を行った。

大学生の結婚等意識調査及び大学のライフプラン教育促進事業業務

コンソーシアムの自立化に向け、三重県より大規模な受託契約を行った。本事業は、県内高等教育機関に在学する全学生を対象とした妊娠・出産に関する医学的知識及び結婚に関する意識等の調査を実施するとともに、妊娠・出産に関する正しい知識の普及啓発を図ることを目的としている。また、三重県の働き方改革と企業の取組を啓発コンテンツで紹介する等、学生が三重県に目を向けるきっかけになるようにしている。

1. 全高等教育機関学生を対象とした結婚等に関する意識調査
- 県内全高等教育機関学生（対象者数16,156人）に向け、結婚や子育て、働くこと等についての意識のほか、妊娠・出産に関する医学的に正しい情報の認知度等を計る項目を普及啓発も兼ねてアンケート（質問数32）を行った。

●結婚・出産・子育て、仕事に関するアンケート集計結果



2. 学生向け啓発コンテンツの作成

学生が結婚をはじめとするライフプランやキャリアデザイン等について考えるきっかけとなるよう、リーフレット及び動画の啓発コンテンツを制作し、各高等教育機関の授業等で利用する等啓発を行うこととした。

● 仕事・結婚・妊娠・出産・子育て
今、考えておきたい将来のこと
ライフプランHAND BOOK



● 仕事・結婚・妊娠・出産・子育て
今、考えておきたい将来のこと
ライフプランHAND BOOK
に関するアンケート



● 今、考えておきたい将来のこと
ライフプラン（動画）



3. 講義用資料教材の開発

啓発コンテンツ以外でも各高等教育機関の講義で啓発できるよう、講義用資料教材を開発し、各高等教育機関で利用することとなった。

● 講義用資料教材



学生地域活動報告

平成29年度に実施した、各高等教育機関の学生地域活動を共有するため、コンソーシアムとして活動発表の場を設けた。

● 平成30年2月12日（月）みえまちキャンパス



FD・SDの相互開放・合同FD

県内高等教育機関のFD・SDを相互開放し、連携して教職員の能力向上の取組を行うこととなった。

● 四日市大学SD講演会

平成30年3月13日（火）15：30-17：00

テーマ：「SDをどのように進めていくのか」-大学職員に期待される役割-

他高等教育機関参加教職員：三重大学1名

● 三重県立看護大学高大接続シンポジウム

平成30年3月20日（火）13：30-16：30

テーマ「高大接続から高大社接続へ」

他高等教育機関参加教職員：三重大学2名



● コンソーシアム合同FD・SD

平成30年2月28日（水）15：00-17：00

テーマ「研究費・事業費獲得を目的としたクラウドファンディングのススメ」



高等教育機関参加教職員：52名（三重大学、皇學館大学、四日市大学、鈴鹿医療科学大学、

鈴鹿大学、三重県立看護大学、ユマニテク短期大学、三重県）

会議開催実績

● 高等教育コンソーシアムみえ総会

第1回	6月29日（木）
臨時総会	10月18日（水）
臨時総会	2月15日（木）
第2回	3月22日（木）

● 高等教育コンソーシアムみえ企画運営委員会

第1回	6月2日（金）
第2回	10月17日（火）
第3回	2月5日（月）

● 高等教育コンソーシアムみえ地域貢献部会

第1回	5月23日（火）
第2回	7月3日（月）
第3回	8月30日（水）
第4回	10月3日（火）
第5回	12月14日（木）
第6回	1月23日（火）
第7回	3月22日（木）

● 自立化検討WG

第1回	1月19日（金）
第2回	1月23日（火）
第3回	3月19日（月）

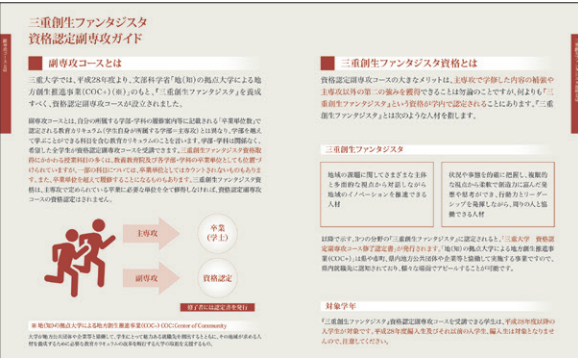
各種制作物

平成29年度に制作した印刷物等一覧。

三重大学合格者向け資格案内チラシ



平成29年度三重大学三重創生ファンタジスタ資格認定副専攻ガイド



三重創生ファンタジスタ（ベシック）資格案内チラシ



▲表面（共通）



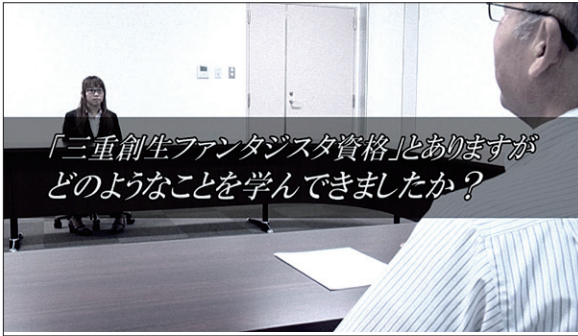
▲裏面（授業はイメージ）

<その他>

企業向け三重創生ファンタジスタ資格啓発チラシ



企業向け三重創生ファンタジスタ資格啓発動画



高等学校生向け 三重創生ファンタジスタ資格啓発チラシ



三重COC+拠点ロゴ



COC+ロゴ入り三重大学名刺



三重大学教室掲示用ポスター



平成27、28年度報告書



COC+シンポジウム報告書



各種会議

<その他>



補助期間終了後、高等教育コンソーシアムみえへ事業として統合。

▲各種会議や事業全体の関係図

<COC+を推進する会議の主な役割と構成メンバー>

● COC+事業推進会議

(主な役割)

COC+事業における数値目標を達成するため、各会議体及び事業協働機関より挙げられた審議事項やその他COC+事業推進に関し必要な事項について扱う。

(構成メンバー)

三重大学、四日市大学、皇學館大学、三重県立看護大学(医療系大学代表)、鈴鹿大学短期大学部(短期大学代表)、近畿大学工業高等専門学校(高等専門学校代表)、三重県、三重県商工会議所連合会、三重県商工会連合会、三重県農業協同組合中央会

● 教育プログラム開発委員会

(主な役割)

COC+事業における教育プログラムについて、各会議体及び事業協働機関より挙げられた審議事項やその他教育プログラムの開発及び実施に関し必要な事項について扱う。

(構成メンバー)

三重大学、四日市大学、皇學館大学、鈴鹿医療科学大学(医療系大学代表)、三重短期大学(短期大学代表)、鳥羽商船高等専門学校(高等専門学校代表)、三重県、株式会社マスマグループ本社、ICDAホールディングス株式会社、中外医薬生産株式会社

● 第1分科会(高等教育機関マネジメント分科会)(以下、「第1分科会」という。)

(主な役割)

COC+数値目標達成に向けた具体的方策や事業協働機関の拡大、県内就職率向上に向けた入口・出口戦略の検討を行う。

(構成メンバー)

三重県(分科会長)、三重大学、四日市大学、皇學館大学、鈴鹿医療科学大学、事業協働機関でない協力企業2社

● 第2分科会

（主な役割）

第2分科会直下の教学WG及び産学WGから挙げられた事項について検討を行う。

（構成メンバー）

四日市大学（分科会長）、株式会社マスヤグループ本社、株式会社光機械製作所、株式会社百五総合研究所、中外医薬生産株式会社、皇學館大学、鈴鹿医療科学大学、鈴鹿大学、三重県、三重大学、事業協働機関でない協力企業2社

● 第2分科会教学WG

（主な役割）

県内高等教育機関が連携した教育プログラムの開発、資格証書発行の詳細、三重創生ファンタジスタ資格（上級）の検討、企業向け資格啓発チラシの制作
（構成メンバー）

四日市大学（WG主査）他、県内全ての高等教育機関（計13高等教育機関）

● 第2分科会産学WG

（主な役割）

三重創生ファンタジスタ資格（上級）の検討、資格の広報に関する方策、企業向け資格啓発チラシの制作、事業協働機関満足度向上に向けた方策
（構成メンバー）

株式会社百五総合研究所（WG主査）、中外医薬生産株式会社、株式会社医用工学研究所、三重県中小企業家同友会、株式会社サン浦島、大王運輸株式会社、有限会社深緑茶房、有限会社野瀬商店、扶桑工機株式会社、株式会社ハツメック、株式会社中村製作所、株式会社前田テクニカ、橋本電子工業株式会社、株式会社ヒラマツ、株式会社メディサポジャパン、三重大学

● 第3分科会（情報アセスメント分科会）

（以下「第3分科会」という。）

（主な役割）

企業情報データベースの検討、三重創生ファンタジスタ資格の情報発信、HPでの情報発信、実務家教員データベースの検討、事業協働機関との相互の情報発信
（構成メンバー）

三重大学（分科会長）、四日市大学、皇學館大学、鳥羽商船高等専門学校、事業協働機関でない協力企業2社

● 地域創発部門会議

（主な役割）

三重大学内の三重創生ファンタジスタ資格に関することや調書、高等教育コンソーシアムみえに関すること等幅広く審議、検討を行う。
（構成メンバー）

三重大学内の各部局教職員

＜各会議の主な実績＞

● COC+事業推進会議

・COC+シンポジウムについて検討を行い、学生が主体となって発信し、地域の活動や三重創生ファンタジスタ養成事業を理解してもらう内容とすることが決まった。本シンポジウムでは学生会の他、7高等教育機関による9つの地域活動事例報告がポスターセッションを通して共有される等、学生の取組が全面に出たシンポジウムを開催できた。（前述14～17ページ参照）
・平成29年4月に発足した三重大学内の三重創生ファンタジスタクラブを、三重大学以外の高等教育機関の地域活動を行う学生団体に本クラブ名称の冠を共有して実施してもらうことで、県内全体で三重創生ファンタジスタクラブの活動が実施できるようにした。

● 教育プログラム開発委員会

・ベーシック資格の資格発行権者をCOC+後継組織である高等教育コンソーシアム会長名で発行することに決めたことで、本資格が県内全体で作り上げていく資格であることが再認識された。（前述65ページ参照）
・COC+補助期間終了後を見越して、教育プログラム開発委員会直下の分科会構成を以下のように再編した。

◆ 新第1分科会

旧第1分科会と旧第3分科会を統合し、情報発信と数値目標達成に向けた方策を連動させ、一体的に県内就職率向上に向けた企画、情報発信等を行うこととした。

◆ 新第2分科会

旧教学WGを第2分科会に格上げし、教育プログラム全体の検討、高等教育コンソーシアムみえへの引継ぎに向けた検討等を行うこととした。

◆ 新第3分科会

旧産学WGを第3分科会に格上げし、産業界の目線を取り入れながら三重創生ファンタジスタ資格の充実、出口戦略の検討等を行うこ

ととした。第3分科会にあたっては、名称を「産学連携推進分科会」とした。

● 第1分科会の実績

・COC+事業協働機関の拡大について検討を行い、事業当初から各種事業に協力いただいた3企業・団体に事業協働機関として加入いただくこととなった。
・高等学校への入口戦略について検討を行い、高校生向けの三重創生ファンタジスタ資格啓発を作成した。

● 第2分科会の実績（教学WG、産学WG含）

・ベーシック資格の発行要件、手順等を検討し、平成29年度には県内初めての三重創生ファンタジスタが誕生した。（前述65ページ参照）
・企業向けの三重創生ファンタジスタ資格啓発チラシを制作し、県内企業・団体に啓発を行った。
・平成30年度新規開講授業の検討やルーブリック、トランス・ラーニング等、教育プログラムの強化を行った。
・平成30年度にベーシック資格養成機関が1校増えることとなり、県内10高等教育機関で三重創生ファンタジスタを養成できることとなった。

● 第3分科会の実績

・COC+の実績を県内の様々な関係者に共有するため、HPの充実を行った。
・企業情報データベースの充実について検討を行い、掲載企業件数の増加や学生のアクセス数増加に向け、ID・PASSの制度を撤廃した。

● 地域創発部門会議

・三重大学における副専攻コース登録者数を増やすため、各部局の教員から様々な手法で学生にアピールを行い、大幅に登録者数を増やすことができた。（前述37ページ参照）
・学内教職員への理解促進を進めた結果、高等教育コンソーシアムみえ単位互換制度に基づき県内全高等教育機関へ開放できる平成30年度新規開講授業を開発した。

＜COC+の進捗を管理、チェックする各会議
の役割と構成メンバー＞

● 内部評価委員会

（主な役割）

8月には上半期のCOC+進捗状況を確認し、
下半期に向けた戦略の検討を行う。12月には
下半期のCOC+進捗状況の確認や残り期間の
戦略を検討するとともに、次年度のCOC+事業
内容を検討する。

（構成メンバー）

COC+事業協働機関全て

● 外部評価委員会

（主な役割）

評価実施年度の年間を通したCOC+の進捗
状況を評価し、数値目標達成に向けた助言等
を行う。

（構成メンバー）

岐阜大学 教授

東海旅客鉄道株式会社 特別顧問

公益社団法人みえ犯罪被害者総合支援セン
ター カウンセラー

三重大学 監事

＜外部評価委員会における平成28年度自己評
価及び外部評価結果＞

総合評価：

Ⅲ計画を十分に実施している（自己）

Ⅲ計画を十分に実施している（外部）

＜開催実績＞

年月	地域創発部門会議 （旧地域創発センター 運営委員会）	教育プログラム 開発委員会	COC+事業 推進会議	分科会、WG			内部評価委員会 外部評価委員会
				第1分科会 （高等教育機関 マネジメント分科会）	第2分科会 （教育プログラム・ ファンタジスタ資格検討分科会）	第3分科会 （情報アセスメント分科会）	
平成29年4月					平成29年度第1回教学WG	平成29年度第1回	
平成29年5月	平成29年度第1回	平成29年度第1回	平成29年度第1回	平成29年度第1回	平成29年度第1回産学WG	平成29年度第2回	
平成29年6月	平成29年度第2回				平成29年度第2回教学WG	平成29年度第3回	平成28年度 外部評価委員会
平成29年7月	平成29年度第3回			平成29年度第2回	平成29年度第2回産学WG		
平成29年8月				平成29年度第3回（メール会議）	平成29年度第3回教学WG	平成29年度第4回（メール会議）	平成29年度第1回 内部評価委員会
平成29年9月	平成29年度第4回			平成29年度第4回	平成29年度第3回産学WG 平成29年度第1回		
平成29年10月	平成29年度第5回				平成29年度第4回教学WG	平成29年度第5回	
平成29年11月	平成29年度第6回				平成29年度第4回産学WG	平成29年度第6回	
平成29年12月					平成29年度第5回教学WG	平成29年度第7回	平成29年度第2回 内部評価委員会
平成30年1月	平成29年度第7回			平成29年度第5回（メール会議）	平成29年度第5回産学WG		
平成30年2月	平成29年度第8回	平成29年度第2回	平成29年度第2回		平成29年度第6回教学WG	平成29年度第8回	
平成30年3月	平成29年度第9回				平成29年度第6回産学WG		

COC+中間評価

＜その他＞

日本学術振興会による中間評価結果については、A評価であった。

地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）				中間評価結果
整理番号	20	COC+大学名	三重大学	
事業名	地域イノベーションを推進する三重創生ファンタジスタの養成			
【総括評価】				
A：計画どおりの取組であり、現行の努力を継続することによって本事業の目的を達成することが期待できる。				
【コメント】				
＜優れている点＞				
・ COC+大学と COC+参加校の連携がうまく機能して、取組を進めていることは評価できる。				
・ 産学官の連携が図られており、県内の高等教育機関や産業界など多数のステークホルダーを巻き込んだ取組を丁寧に行っている。その結果、協働体制が円滑かつ加速的に形成された取組となっており、評価できる。				
・ 学長の強力なリーダーシップの下で、地域課題に密着しながら制度的改革が進められていることは評価できる。				
＜改善を要する点＞				
・ 今まで以上に全体の計画、制度・体制を踏まえた教育カリキュラムの内容等をしっかり開発・充実させることが必要である。				

外部評価委員会 各委員の評価(平成28年度事業評価)

<その他>

	総合 III	委員長 III	委員A III
総合評価	○事業実施体制の基盤形成が着実なものとなっている。体制とともに、年間事業計画において評価を適切に実施することでPDCAを確信しやすとするシステムが形成されており高く評価される。 ○「三重創生ファンタジスタの養成」のために、三重大の副専攻コースの開始、他大学におけるベーンシップ資格を設計しており、能力育成の視点を加味した教育プログラムの提供と人材育成への取組は順調であると評価できる。 ○県内の教育機関だけでなく、企業、金融機関、行政等の参画体制を形成し、それぞれの立場で地方創生に取組むとともに、これを有機的に機能させるために、三重大に副学長(地方創生出産)を配置し、サテライト構想に基づき地域との連携体制が強化となっていると評価できる。 ○数値目標については、地域内就職率等は産業構造の長い歴史の中で形成されていることもあり、一朝一夕に変化することは難しいことは理解できる。しかし、出口戦略は事業の要であることから、目標に対する現状を多角的に分析し達成のための道筋や見通しを明らかにするマネジメントへの取組が期待される。とくに、事業協働機関はそれぞれの立場に沿った活動を行うことで数値目標、そして地方創生に貢献することが求められている。	事業実施体制の基盤形成に伴い平成28年度の実業取組は着実なものとなり、計画以上の取組が行われています。また、この間にPCDCを確信しやすくするための評価委員会等の年開スケジュールの見直し、教育プログラム開発の体制変更等にも着手し、意欲的な改善が進められていることは高く評価されます。 教育プログラム開発については、単位取得の段階から能力育成の視点を加味した段階に入りルーブリック開発、科目群で育成する資質、能力の明確化、ベーンシップ資格から中級、状況という実質的な育成の段階設定などに着手しています。大学の資格認定は単位取得を中心に構成されますが、副専攻プログラムは、これに縛られるのではなく、資質・能力育成を中核に置いて授業科目、インターンシップ、各種活動への参加、自主活動の企画・実施等の多様な学習経験を組み入れるとともに、最終の資格認定は面接評価によることも考えられます。面接評価には大学教職員のみならず企業や自治体の面接員を加えることで学生像を共有しながら多面的に評価することも想定できでしょう。これは一例ですが、三重大の教育プログラムを本事業の関連する取組を統合して組み上げ、体系として確立することが期待されます。そのため地域連携の体制構築も順調に進められていると考えます。 一方、数値目標については、目標達成のみが単独で抜われる傾向にあります。評価分野の数値目標は、それ以前に示される他の評価分野の進捗、教育、地域連携・情報発信の全体を数値として見極めるものと考えと、数値の背景にある要因を探って事業全体のPDCAを確信させることに意味があると考えられます。数値目標の達成状況から運営、教育、地域連携・情報発信の向を変えようとするのか検討されるようになることが期待されます。	○地域創生事業は、地域全体の課題である。人口の減少、高齢化の進展する現状において、行政、企業それぞれの立場で取組んでいる。 ○地域の拠点大学においても、そのことを推進する事業として「地域イノベーション」を推進する三重創生ファンタジスタの養成に取り組んでいる。 ○そのため大学等高等教育機関との協働、教育プログラム、学生への啓発や教育、県はもとより、地域自治体、地元企業などの連携を創出している。間口の広い事業計画は関係者の努力と熱意で着実に進捗し、成果をあげつつある。 ○それらを見ると総体として、計画を十分にあるいは上回って実施していることもあり、一朝一夕に変化することは難しい。しかし、本プロジェクトにある事業計画の内容が積み重なることにより、数値的な変化を導くことが可能となる。その基礎となる質的な変化は着実に進んでおり、そのことにより幅広い地域創生に結びつくものと考え。
運営 事業実施体制の整備に関すること 事業の推進に関すること	総合 IV IV	委員長 IV IV	委員A IV IV
	○事業実施計画に基づいた実施体制の整備は着実である。新規に地方創生出産副学長を配置したことで、関連事業が統括され組織的で持続的な推進を可能とする体制が計画以上に整備されたと評価できる。 ○県県COC+には「システムイノベーション」高等教育コンソーシアムみえ」の自立化に向けた検討、試行の創出しと計画を上回りながら人的・物的・財政的支援が着実に進められており持続的な推進基盤が形成されつつあると評価される。 コーディネータの勤務体制を見直し、実質的に機能する体制に凝集させた組織改編の意思決定は評価される。組織の中核が強化となったことから、各高等教育機関におけるキャリア教育、就職支援、地域連携等の専門家と企業連携へと体制整備が進展することが期待される。このとき、企業情報データベースの効率的な活用についての検討が一の突破点となると考えられる。 ○教育プログラム開発や資格認定等に関し、ルーブリック開発に着手し、人材像を明確にして関係者間で共有可能として育成しようとする取組は着実に進展している。	事業実施体制の整備が高く評価されます。基盤となる教員、事務及びコーディネーターが計画どおり配置されるとともに、新規に地方創生出産の副学長を配置する体制としたことで関連事業が統括され、組織的で持続的な推進を可能としています。その成果は県からの事業受託、資格認定教育プログラムの構築等で確認することができます。 事業推進については、PDCAが効果的となるよう評価委員会等の開催時期と課題整理を行い改善に着手されたことは高く評価されます。教育プログラム開発に際しても、ルーブリック開発により人材像を明確にして大学間で共有可能とするともに、委員会の下の分科会を内容別から課題別に編成し直す等、改善しながら事業推進しようとする構えが反映されたものとなっています。また、コストシェアにおいて人的・物的・財政的支援が着実に機能しており、持続的な推進の基盤が形成されつつあると判断されます。	○体制は着実に整備されている。 ・ファンタジスタについても養成科目、受講、資格など整備された。 ・コーディネーターも課題ニーズなど自治体や教育機関と協働している。 ○コンソーシアムについても ・体制を整え動き出している。 ・自立化の選択肢である、受託調査事業も県からの委託を受けるなど動いている。
教育 教育プログラムの開発に関すること 教育プログラムの実施に関すること	総合 IV III	委員長 IV III	委員A IV IV
	○三重創生ファンタジスタ養成の資格認定副専攻コースの開始、ベーンシップ資格の創設、単位互換協定の締結協議など着実な取組が評価される。とくに、資格認定副専攻コースでは年間登録者数の着実な増加が期待され計画を上回る結果が見込まれる。○ビデオ教材制作に継続的に取り組む新卒に3本制作し、第一次産業ツアーの実施とともに地域の課題把握の機会とした結果、地域活性化の関連事業に学生が参加しはじめなど、能動的な姿勢が育ち始めており、今後の展開に期待できるものとなっている。 ○新規にPBL型集中科目の3科目を各高等教育機関の教職員との協働で開発したり、リアルプロジェクトインターンシップ(RPI)を実施するなどプロジェクト型の教育プログラムを充実させていることは高く評価される。これらの教育プログラムは課題追究を通して業界と関係機関についての深い理解を獲得できるような真のリアルプロジェクトが期待される。 ○高等教育コンソーシアムみえにおいて、インターンシップ授業の創設やeラーニング科目の活用、単位互換の具体化についての検討などを通して、高等教育機関間重層的に連携、協働を重ねる機会が増加し、教育プログラムの策定、実施に向けた活動が加速していると捉えることができ、計画を上回る取組となっていると評価される。 ○地域活性化コーディネータは一定の役割を担っていると判断できるが、地域と大学の接点点としてその知識や専門性等を活かすことの重要性は増すと考えられ、さらなる活動の充実が期待される。	資格認定副専攻コースを開始し、登録者数の着実な増加が期待されるとともに、スタートアップセミナーの地域課題探求を学ぶことで関連事業への参加学生が増加する等、着実な開発が進められています。副専攻コースの科目群毎で育つ資質、能力が明示され、ルーブリック開発が進むなど能力重視の資格説明が志向され、この能力等を地域関係者と共有し始めており、さらに各授業科目の充実発展が期待できます。 教育プログラム実施に関して、ベーンシップ資格を設定することでCOC+参加校への展開を図ることができたことは評価できます。また、資格に段階を設定することは上級資格について検討する契機となっており、今後の資格内容の評価や充実を期待できます。 コーディネータの活動については一定の役割を担っていると判断されますが、地域と大学の接点点としての重要性は更に増すと考えられ、さらなる活動の充実が期待されます。	○着実に進んでいる。 ・単位互換協定は締結の見込みまでこぎつづけている。 ・ベーンシップ資格の創設により、三重大外9機関で三重創生ファンタジスタの養成ができる扱いになった。 ・産学WGを置き、産業界の求める人材の養成プログラムの検討に入る一方、企業のデータベースを学生の目線で整備を進めている。 ・様々なタイプのインターンシップを創設し、単位化を進めている。 ・第一次産業ツアーの実施、それを踏まえたビデオ教材により問題点と未来を考えた。 ・県の歴史文化産学を学ぶ科目を構築、eラーニング化や集中講義に取り組んだ。
地域連携・情報発信 地域との連携に関すること 事業の情報発信に関すること	総合 III III	委員長 III III	委員A III III
	○学長自ら県内企業107社を訪問するなど前年度を継続するトップセールスは特筆すべきであり、各企業の経営陣に熱意が伝わり、社長セミナーの開催、Jobキャラバンの実施などの展開が図られる等、点から線や面へ広がりつつある地域連携の方針は高く評価できる。 ○三重県全市町との包括連携協定の締結、サテライト構想の構築は着実に進められ、地域連携活動の基盤強化が進展している。この連携基盤の上に共同研究やプロジェクトの組み立てにも着手しており、自治体との共同研究、受託研究、受託事業の増加にも意欲的なことが評価できる。 ○情報発信は機会を得ながらその都度発信されているが、個別的で受身な取組も散見される。情報発信は、事業協働機関(高等教育機関、自治体、企業)が各々できることを工夫しながら自立的で有機的な取組となることが期待される領域であることを考えると、「戦略」の明確化が重要となる。地域連携強化のための広報戦略のような方針が事業協働機関で共有されることを期待される。	学長の企業訪問を契機として、社長セミナーの開催、Jobキャラバンの実施等の展開が図られています。各取組を点で実施するのではなく、線や面へ広げようとする地域連携の方針は高く評価できます。 三重県の全市町との包括連携協定の締結、サテライト構想の構築は着実に進められ、地域連携活動の基盤強化が整ってきています。さらにこの連携基盤の上に共同研究やプロジェクトの組み上げにも着手しており、自治体との共同研究、受託研究、受託事業の増加にも意欲的なことが評価できます。 事業の情報発信は機会を得ながら適切に進められています。県内高校生に対する情報発信は本事業において一定の効果が期待できると考えられており、積極的な展開が期待されます。	○三重大学(学長)の企業訪問は各企業の経営陣に熱意が伝わっている。 ○全市町村自治体との包括協定を締結、それを踏まえて自治体の要望をくみとり、課題の解決にマッチする教員に対応させている。 ○地域との共同研究等の実績を上げている。 ○情報発信については、様々な方法やイベント等で取り組んでいる。引き続き、実効的な情報発信に取組むことを望む。
数値目標 数値目標の達成状況	総合 II II	委員長 II II	委員A III III
	○事業協働機関へのインターンシップ参加者数、事業協働機関雇用創出数は目標を達成している。インターンシップは三重大学の増加に支えられており、全高等教育機関が参画するインターンシップ事業の早期創設が期待される。事業協働機関雇用創出は、県内企業の工場増設のチャンスを的確にとらえたものとして高く評価できる。 ○事業協働地域就職率、事業協働機関からの寄付講座数は目標を下回っている。事業協働地域就職率は平成26年度からほぼ横ばいであり難しい数値と考えられる。その要因は、取組がまだ効果を及ぼすに至っていない状況が、現在の手法が就職率を促進するために有効に働いていないこと等が推察されるが、必ずしも要因の分析までは踏み込めずあらず、印象に基づき対応に留まることが懸念される。 ○「達成状況の要因分析と改善」というような評価項目を「数値目標の達成状況」に加えて設定されることを提案したい。要因は各種データを活用して直接的なものや時間を要するもの、仕組みに起因するものなどの観点から分析されるとともに、事業協働機関である高等教育機関、自治体、企業は各々視点からどのように要因を分析して改善策を立案するのかの検討も重要となる。もともと数値目標は三重大学のみにて達成できるものでないことから、事業協働機関の責任と積極的な参画のもとで協力の裾野が広がることを期待する。	事業協働地域就職率は目標を下回りますが本事業の取組のみの要因で向上するのではなく、景気等による求人数の変動、学生の出身地等の影響を受けると考えられます。また、一人ひとりの学生に着目した場合には、副専攻コースやインターンシップ、事業関連イベントへの参加等による影響が事業協働地域への就職につながることを期待されます。このため、数値目標については、結果のみの表記にとどまらず、その要因を分析することが重要となり、その分析結果から事業取組の改善に着手するPDCAを生成させることが、本事業に期待される取組であると考えられる。 そこで、数値目標については、「数値目標の達成状況」のみでなく「達成状況の要因分析と改善」のような評価項目を設定することも考えられます。	○前年に対し、事業協働機関へのインターンシップは対前年大きく増加し、目標値に達している。また、事業協働機関雇用創出数も大きく伸び、努力が見られる。 地域就職率は横ばいであり、難しい数値と考える。 ○目標値に対して、就職率、寄付講座数が下回っているが、インターンシップ数は到達している。事業計画は着実に進んでいるので、今後に期待している。
その他のコメント	総合 ○事業関連で集積されるデータは固まってきたと考えられるので、それらの経年変化や詳細分析が可能となるように生データの集積を進める。これにより、運営、教育、地域連携、情報発信の個別項目についても経年変化による取組効果を一部の内容については説明しやすいとなると考える。 ○評価対象の当該年度と次年度計画の資料を区分けて整理していただけたとわかりやすい。	委員長 教育プログラムに関する副専攻等の規則を確認させていただくことはできますが、	委員A ●COC+関連事業として位置付けて行事を開催された場合は、常に結果(回数、参加人数)を定量的に把握し、広報等に明示されることをお勧めします。(公式「事業報告書」39ページ、社長セミナー参加人数が実数でなく「約」と記載されている。また、先般セミナーについては記載なし。) ●平成28年度事業自己評価シート)の「実績」欄に、平成29年度に実施予定であったり、実施されている内容が記入されていることに違和感を覚えました。理想を言えば、この自己評価シートは記入者自身が、年度内に何ができて、何ができなかったか、半年度における成果、中・長期における成果など、事業を振り返り、整理し、今後の方策を練るためのものだと思います。基本的に「実績」欄には、同年度中に実際に実施された内容だけをご記入いただいてほしいかと思います。(例：資料4、7ページ「実績欄」全高等教育機関が受講できるPBL型集中講義3科目をやり、平成29年度に開講した。)→「全高等教育機関が受講できるPBL型集中講義3科目の教育プログラムの内容と導入計画を策定した。(次年度年度当初より、導入を予定・計画している。)」 ●「外部評価委員会資料」に関して、平成28年度事業実施関係資料として準備していただいた会議やイベント関係の書類については、行事の種類別に開催回数、参加者数、テーマ等がわかる集約した内容の文書と検討内容と結果、具体的なチラシ等を添えていただくことで足りるのではないかと思います。短時間で議事録等の詳細を確認することが難しいように思います。なお、添付するチラシなどは、平成28年度中のものであることをご確認ください。(社長セミナーのチラシを探しましたが、平成29年度実施の「エースセミナー」(33冊)のものしか見つかりませんでした。) ●「外部評価委員会資料」に関して、参考資料として、平成29年度事業計画の資料を添付していただいている場合は、目次を分けていただいて、「平成29年度事業実施関係資料」として添付していただければ、わかりやすくなると思います。

	委員B III	委員C II
	平成28年度より、三重大学において「三重創生ファンタジスタ資格認定副専攻コース」がスタートし、各高等教育機関においては、平成29年度、平成30年度と段階的に「三重創生ファンタジスタ(ベーンシップ)」資格を立ち上げる予定であり、教育プログラムの提供と人材育成に関しては順調に進んでいる様子がうかがえる。 一方、最終的な目標である県内における就職率の向上については、平成28年度も数値目標を達成できず、2年連続、事業開始前と同程度の水準に留まったままである。数字が全てではないが、そのことについて、組織として状況整理し取り組まれた様子が見受けられないのは残念である。 2年目を迎え、事業の根幹である教育プログラムと資格認定制度の整備に重点を置いて進めるのは妥当なことと思われるものの、出口戦略は事業の肝であるので、年度中における状況の把握や改善の検討など、目標を意識したマネジメントも必要であると考える。 三重県内の就職率を上げるのはたやすいことではなく、ましてや三重大学だけでできることではない。そこに協働事業機関が参加するCOC+事業として実施することの意義があると思う。協働事業は、関係者間の情報・認識の共有や意志決定等に手間や時間がかかる。しかし、各高等教育機関や行政、企業が協働し、それぞれの特色や強みを生かすことで、相乗効果が期待できる手法である。様々な制約や困難があるうとは思いますが、それぞれの特性に合った役割分担をしつつ、事業を発展させ、地域課題を真に解決するオンラインワンの「三重モデル」構築を目指していただきたいと切に願っている。	COC+は、県内の高等教育機関だけでなく、企業、金融機関、行政なども参画している事業であり、それぞれが立場に沿った活動を行うことで地方創生に貢献することが大切と理解している。 地方創生の仕事としては、人口減少を如何にして最小限にするかが課題。人口増減要因としては、結婚・出産などの自然増減と転勤・引越などの社会増減の要因の2つに大別されるが、COC+で高等教育機関が担うべきは、当然のことながら社会増減の方へ属する県内企業への就職率アップということで、若者の県外流出を防ぐことであると思われる。 しかしながら、資料5に記載されている「学生を対象とした結婚等に対する意識調査」(29年度にコンソーシアムとして受託契約締結)は、何故、大学等が中心になって行うかよく理解できない。結婚観や生活スタイルなどを調査することは、明らかに自然減少対策で、COC+には全く関係ないと思われる。 県内就職率のアップに関わる業務が順調で、ほかにも手を伸ばしているのであればともかく、超多忙でほかにすることがたくさんあるにも関わらず、このような事業に取組むのは甚だ疑問に思われる。
	委員B III III	委員C II II
	平成28年度事業実施計画に基づいて、実施体制の整備を行い、事業を実施しており、前年度評価を次年度の計画に反映させるなど、PDCAを意識した運営が行われている。 COC+大学である三重大学では、前年度に引き続き、三重大学長による県内企業訪問(107社)などトップセールスを進めながら、学内に「地方創生出産副学長」を配置して地方創生事業推進の一層の体制強化を図るなど、全学的な推進体制の整備を進めている。 また2年目に入り、COC+大学とCOC+参加校との関係についても、具体的な取組みを進める中で、互いの認識や連携が深まっていることがうかがえ、県県COC+とのコストシェアや「高等教育コンソーシアムみえ」の将来の自立化に向けた検討、試行が前倒しで行われていることなどから、事業は着実に進んでいるものと考えられる。 ため、教育プログラムの開発や資格認定等については、熟慮し取り組まれている様子が資料等からうかがえるものの、出口戦略(就職活動の情報提供、企業の掘り起こし、マッチングなど)に関しては、具体的に進められている様子が見受けられず、懸念が残る。 事業開始2年目のことであり、事業の根幹である教育プログラムの策定・提供、資格認定制度の枠組みづくりなどが優先されようというは理解できるものの、出口戦略は本事業の肝である。高等教育機関の得意とする人材育成や教育プログラムの開発にのみ偏注することなく、バランスク、キャリア教育と出口戦略の二本柱で進めていただければと考える。 なお、すでに決定している平成29年度実施体制の変更は、そのためのものではあろうと推察する。本事業の特色であった県内5地域に配置された「地域活性化推進コーディネーター」の担っている役割を、残りのコーディネーターに継承、負担させることなく、組織として、各高等教育機関におけるキャリア教育や就職支援の実務担当者、労働関係機関、キャリアコンサルタント等の専門家とも連携し、事業協働機関の間で役割の再配分を行うなど、より発展した形で実施体制の整備が進展していくことを期待すると共に、今後、全面に発信できるような「三重モデル」構築の布石をして、注目している。	資料3にあるように、コーディネーター制度が機能していなかったことが反省点としてあげられており、新たなコーディネーターに変えたことは、素晴らしい実績だったと評価できるが、十分に自治体のニーズを収集したとは言えず、資料34を見ても十分なニーズ調査とは認められない。なお、コーディネーターがニーズ収集をする場合、コーディネーターと自治体との信頼関係がないと、先方もニーズと見てとれてこない。従って、ニーズ収集をするのであれば、コーディネーターよりも日常的に接触のある地域の教育機関の方が適任と思われる(鈴鹿市や鈴鹿医療科学大学、伊勢市や皇學館大学等)。 企業情報データベースについては、努力の跡は見られるが、結果としては、6月中旬の段階で32社なので、実績としてはかなり低いと評価せざるを得ない。
	委員B IV III	委員C II II
	平成28年度より、三重大学において「三重創生ファンタジスタ資格認定副専攻コース」がスタートし、また、各高等教育機関において、平成29年度、平成30年度と段階的に「三重創生ファンタジスタベーンシップ」資格を立ち上げる予定であり、順調に進んでいる様子がうかがえる。 三重大学では、平成27年度に引き続き、平成28年度も新たにビデオ教材3本を作成し、平成30年度の導入を目指すなど、教育プログラムの充実を図っている。 また、平成28年度は、各高等教育機関教職員が連携して、PBL型集中講義3科目を作成するなど、教育プログラムの開発を共同で行う動きも始めている。 平成28年度は、COC+の枠組みの中で、三重創生ファンタジスタ養成にかかるルーブリックについての情報共有、検討が行われ、他方、高等教育コンソーシアムみえにおいて単位互換の具体化について検討が行われるなど、高等教育機関が重層的に連携、協働を重ねる機会が増え、教育プログラムの策定、実施に向けた動きが加速している感がある。 なお、教育プログラム開発に関して、「地域活性化推進コーディネーター」の果たしている役割が、授業や講義科目におけるゲストスピーカー及び講師の選定・依頼、自治体のニーズ調査、体験ツアー企画、ビデオ教材作成に限られており、コーディネーターの知識や専門性、企業や自治体から聞き取ったニーズなどをどのように教育プログラム開発に活かしているのかプロセスが見えにくいのは残念である。	ビデオ教材の内容は、第1巻が知事と三重大学西村教授との対談で、内容とも前向きで、COC+の趣旨にも沿っていると評価できる。しかしながら、第2巻以降は、中心市街地のシッター街化、公共交通機関の不便さ、衰退していく一次産業と三重県の負の部分ばかりの内容で、三重県に学生を留め置く事業でなく、三重県から連れ出したくなるような内容で、評価できない(あくまでも課題把握ということだとでは思うが、受け止め側としては悪い内容。また、その中でも頑張っている事業者の紹介はあるものの、学生が一緒にやって一生を捧げようと思うとは考えにくい内容)。 高等教育機関のニーズマッチングのための市町ニーズ調査については、「運営」の部分と同じ評価。 3科目のうち、医療・福祉分野は、内容・講師陣を見る限り、「学習」の要素は少なく、単に「ひとの話を聴きみにする」要素が多い。例えば、医薬品という業界に絞り、業界の特徴(景気に左右されない)業界、工業、統計などで、自動車や電気電子業界などと比較して、リノベーション前後の安定性を比較する。次に都道府県県にその伸び率を調べ、他の都道府県に比べて三重県が高い伸び率であることを確認する。何故そのようなことになっているか、業法改正による受託製造解禁の制度改正の動きを見る。何故そのような制度改正があったか、グローバルな動向(海外の大手10～20社)の動向、決算書類の分析、商品別の売上高推移)を調べ、国内メーカーの動向は大手製薬会社の有価証券報告書と製造原価計算書を調査し、大手メーカーから中小への製造委託が行われていることを決算書で裏取り調査する。などをした上で、県庁の事業事業担当や企業にヒヤリングすれば、他方面に亘るグローバルな業界動向、厚労行政、その中で業界ニーズを事業にキッチした県の行政施策、企業動向などを理解することができる。その際、企業の決算分析をするときに必要簿記や財務分析も学習でき、真の意味での勉強ができてくると思われる。 予定している志摩病院や美杉病院へのヒヤリングは無駄ではないかもしれないが、「産業の理解」には遅く、単なる物見通しの域は超えないと思われる。
	委員B III III	委員C III III
	地域・企業との連携について、特筆すべきは、三重大学長が自ら県内企業107社を訪問するなど、平成27年度に引き続き、トップセールスとして存在感を示していることである。 ため、本来、地域・企業との連携を担うはずの「地域活性化推進コーディネーター」の活動は、企業回りなど(良い意味で)ルーティーンの仕事になっていないかもしれないが、その活動がどのような結果・成果に結びついたのかわかりづらいため、平成27年度との違い、発展などを感ずることができなかったのは残念である。 全般的に、産学WGとの意見交換や企業を訪問しての広報紙「三重大X」の手交、イベントでの広報など、COC+参加企業とコーディネーター等による散発的な活動に留まり、そこから地域戦略の全体像は見えてこない。 今後、三重大学の29市町(自治体)との包括連携協定が、COC+事業や高等教育コンソーシアムみえにどのように関わっていくのかという点を含めて、COC+事業の地域戦略について、明確化を期待したい。 情報発信については、COC+事業のパンフレットを作成配布したこと、事業HPを作成し、運用していること、「三重大X」へのCOC+事業の掲載、COC+高等教育機関におけるSD・FDの開催、各種イベント(みえリーディング産業展、県外でのシンポジウム)での情報発信など、対象が主に三重大学内、もしくはCOC+高等教育機関を対象としたものが多い。外部の事業対象者をも意識した情報発信をお願いしたい。 なお、百五総合研究所発行の情報誌「HIREPORT」へのCOC+事業の記事については、企業との連携の有効さを感じさせるものである。事業協働機関(高等教育機関、自治体、企業)がそれぞれであるとの中で工夫をしながら、情報発信していくことが肝要であると考える。	
	委員B II II	委員C II II
	事業協働地域就職率、および事業協働機関からの寄付講座数は目標を達成できていない。 には、事業協働地域就職率については、経年変化として見た場合、事業開始前の平成26年度からほぼ横ばい、状態で推移しており、COC+事業の取組がまだ効果を及ぼすに至っていないが、現在の手法が就職率を促進するために有効に働いていないことが推察される。 なお、事業協働機関雇用創出数は増えているものの、「工場新設による増員」という理由であるため、継続的な雇用の確保に結びつくかは不明である。しかし、日常的な企業訪問等の結果、求人の掘り起こしや新規雇用につながっているのではないかと推察されるので、成果を出すことは必要であるが、地道で成果が出にくい活動であつても疎かにせず、日々の積み重ねを大事にしたい。 また、事業協働機関へのインターンシップ参加者数は目標を達成しているものの、三重大学以外の学生の参加者数は、事業開始前の平成26年度より少ない水準で推移しており、三重大学以外の高等教育機関学生へのニーズに沿ったインターンシップの提供ができていない可能性があるため、学生のニーズを汲み取ってインターンシップ先として掘り起こし、インターンシップ先にはCOC+企業として事業協働機関への参画を促し、協力の裾野を広げていただきたい。 総じて、数値目標を達成するために行われた工夫や特段の取組みについて、資料からは読み取れず、口頭による説明もなかったことは残念である。 三重大学がCOC+事業の事務局を担っているとはいえ、三重県内の就職率を上げるのは、三重大学だけでできることではなく、そこにCOC+事業の意義があると考える。各高等教育機関の特色や強みを生かして、学生のニーズと企業のニーズを上手くマッチングし、若年層の県内定着が促進されるよう、工夫していただければと思う。 目標の数値は達成可能な数値を設定しているはずであるので、1年ごとの目標達成を意識しながら、進めていただければと今後に期待する。	計画自体は下回っているものの、数少ない県内企業の工場増設のチャンスをつ捉えて就職率アップに繋げたことは高く評価。

「地域イノベーションを推進する三重創生ファンタジスタの養成」事業自己評価シート

<その他>

評価対象年度：平成28年度			【評価基準】Ⅱ 計画を十分に実施していないⅣ 計画を上回って実施している		
総合評価（自己評価）			Ⅰ 計画を実施していないⅢ 計画を十分に実施している		
Ⅲ 計画を十分に実施している					
分野	項目	年度計画	実績	成果	自己評価
運営	事業実施体制の整備に関すること	「三重大学地域創生センター」専任教員1名の採用と特任教員1名、コーディネーター6名及び事務補佐員2名を継続して配置し、業務を推進する。	○平成28年4月1日付で、地域創発センター専任教員を1名雇用した。 ○平成27年度から継続して、特任教員（教授）1名、県内5地域に配置したコーディネーター5名及びそれを統括するコーディネーターの計6名と、業務を補助する事務補佐員2名を配置した。 ○地方創生を推進するため、学内体制を強化し、副学長（地方創生担当）を平成28年4月付で配置した。 ○COC+の推進体制を強化するため、三重大学内にCOC+担当の副学長やインターンシップ担当の副学長を平成29年度に配置できるよう体制を整備した。	①専任教員及び特任教員（教授）が、 三重創生ファンタジスタ養成科目を5科目構築 した。 →三重創生ファンタジスタ養成に特化した科目を5科目構築したことで、 全高等教育機関の学生が受講 できる仕組みを整えることができた。 （5科目の内訳及びその詳細資料は「「三重創生ファンタジスタ」資格認定教育プログラムのCOC+参加校への展開についての検討項目」を参照。） ②教育プログラム開発委員会第2分科会（教育プログラム・ファンタジスタ資格検討分科会） 教学WG （以下、「 教学WG 」という。）を設置した。 →専任教員が主体となり、 全高等教育機関教務関係者で構成する教学WGを設置し、全高等教育機関が連携して教育プログラムを構築する体制を整えることができた 。それに伴い 三重大学以外の高等教育機関の「三重創生ファンタジスタ（ベージック）資格」 （以下、「 ベージック資格 という。」）を作ることができた。 ③ コーディネーターは、各市町の課題を吸い上げ、三重県と協働して自治体のニーズを調査した 。 →取りまとめた結果は、平成29年度以降順次、 高等教育機関のシーズとマッチング する予定であり、県内においてCOC+及び高等教育コンソーシアムみえ（以下、「 コンソーシアム 」という。）が果たすべき役割を県内関係者が認識するきっかけとすることが期待できる。 （ニーズ調査及び高等教育機関のシーズとのマッチングに関する資料は「コーディネーターの地域における活動と教育プログラムへの参加」を参照。） ④事務補佐員は、COC+における業務を推進し、専任教員、コーディネーターが業務に集中できる体制を整えることができた。 →出張申請、HP更新、物品請求、書類整備、会議準備等、多種多様な業務補助を行った。 ⑤ 三重大学内に副学長（地方創生担当）を新たに配置し 、COC+における地方創生に協力したことに加え、 三重大学におけるサテライト構想 に基づき（後述参照）、地域との連携に尽力したことで、三重大学と地域との関係が整い、COC+推進への協力体制がより強固となった。（資料1） （補足・平成29年度の状況） ⑥平成29年4月付で、 三重大学内に副学長（教育・COC+担当）を置き 、COC+の推進体制を強固にした。また、 副学長（学生総合支援・インターンシップ担当）を置く ことで、三重大学がインターンシップ活性化に向け推進する体制を整えた。（資料2） ⑦平成29年度は、教員・コーディネーター及び事務体制を整備した。具体的な変更内容及び理由は（資料3）参照。	Ⅳ
	COC+の後継組織であるコンソーシアムの自立化に向けた運営を検討する。	○コンソーシアムの事務局を三重大学が担い、COC+の推進と連動させて運営を行った。 ○コンソーシアム総会、企画運営委員会、及び学生の地域活動等を促進する地域貢献部会の設置及び運営を行った。 ○自立化に向けた動きを加速化するため、三重県からの予算負担である「県内就職と地域活動に関する意識調査アンケート」（以下、「 意識調査アンケート 」という。）を実施した。	①コンソーシアムの魅力向上のため、三重創生ファンタジスタ養成に係る授業科目の開発、検討に関してコストシェアを行った。 →地域に愛着を持ち、主体性や協働性のある地域人材である「 三重創生ファンタジスタ 」を養成するため、 「三重を及ぶ共同授業開発」 に対して約120万円の予算を事業協働機関である 三重県が負担し（資料4）、事業協働機関（高等教育機関・県）が連携してコンソーシアムを運営する体制を整えた 。COC+機能の移管を見越しつつ、コンソーシアム事業を前倒して推進している。 ②コンソーシアムでは、総会（臨時総会含む）を2回、企画運営委員会を3回、地域貢献部会を3回実施する等、運営を着実にを行った。（資料5） → 総会及び企画運営委員会 は 三重大学及び三重県が担当 となり、 地域貢献部会 は 皇學館大学及び三重県が担当 となる等、作業分担が行われている。また、総会で行われた 南大阪地域大学コンソーシアム統括コーディネーターの講演 や 以前に行った先進事例調査を参考に、コンソーシアムの自立化に向けては、受託事業を選択肢の一つとして検討を進めることとなった 。 →平成29年3月に開催されたコンソーシアム総会では、 コンソーシアムの自立化に向けて三重県知事も交えて県内高等教育機関代表者と協議 を行った。南大阪地域大学コンソーシアム統括コーディネーターの講演内容を参考に、活発に意見交換を行い、今後も自立化に向けて検討を行うことが全高等教育機関で改めて確認された。（資料6） ③「意識調査アンケート」を全高等教育機関で実施し、分析結果をまとめた。（資料7） →コンソーシアムの自立化に向けては、会費負担だけでなく、受託事業を一つの選択肢として考える必要があり、 意識調査アンケートの実施は、今後様々な受託事業を受ける大きな実績 となり得る。また、このアンケート結果は報告書としてまとめあげ、項目毎のクロス集計を実施する等、丁寧な分析を進めており、 各高等教育機関の県内就職に関する分析に利用するだけでなく、事業協働機関である三重県の施策に反映できる等、様々な方向を模索できる有意義なものとなった 。 （補足・平成29年度の状況） ④「意識調査アンケート」の実績から、平成29年度は「 大学生の結婚意識等調査及びライフプラン教育促進事業 」を 三重県より受託し、約1,400万円の事業規模を実施 することとなった。（資料8）アンケート項目の検討については、三重大学及び三重県が中心になって行い、その後の対応は地域貢献部会（皇學館大学）が実施する等、作業分担もなされている。全高等教育機関の全学生（大学は1～4年生（医学部、薬学部は1～6年生）、高等専門学校は4～5年生、短期大学は1～2年生）が対象となっており、 全高等教育機関との連携体制も整っている 。		
分野	項目	年度計画	実績	成果	自己評価
運営	事業の推進に関すること	内部評価委員会（2月）及び外部評価委員会（5月）の開催	○外部評価委員会を平成28年5月20日（金）に開催し、特に教育プログラムの開発について資格認定副専攻コースの制度化やビデオ教材制作等、特徴的な取組について評価を得た。 ○内部評価委員会を平成29年1月30日（月）に開催し、数値目標の達成にとらわれるのではなく、県内高等教育機関の学生が県内に定着するよう、原因分析をしっかりと行う必要がある旨指摘があった。 ○PDCAサイクルを円滑に循環させるため、内部評価委員会のあり方を検討した。	①外部評価委員会の評価をもとに、教育プログラムの充実を図った。 →教育プログラムの充実を平成28年度検討したことにより、 三重創生ファンタジスタ養成に係る5科目の構築、三重大学以外の高等教育機関のベージック資格の構築、ルーブリック（評価基準）の検討 等を行うことができた。学生を育てる仕組みが整った。ルーブリックについては、平成28年度に三重大学地域人材教育開発機構の専任講師が行った木曽町との共同研究に参加した学生に対して、 試行的にルーブリックを展開し 、平成29年度開講した3つのPBL型集中講義に沿ったルーブリックを検討、開講している。 （ルーブリックに関する資料は「教育プログラム開発委員会直下の3つの分科会の開催」参照。） ②内部評価委員会の評価をもとに、県内就職率の推移に対しての対応策が高等教育機関毎に異なるという予測に鑑み、高等教育機関別の細かな数値上昇に繋げる原因分析の検討を行った。 →平成29年度に検討を行うよう、計画を立案した。検討の結果、まずは全高等教育機関による「意識調査アンケート」のクロス分析等、細かな検討を行ったうえで原因分析を行うこととなり、クロス分析を含めた報告書作成を行っている。 ③内部評価委員会のあり方を含めたPDCAサイクルを検討した。 →外部評価及び内部評価の意向が適切にCOC+の計画に反映させるよう検討を行った。その結果、5月または6月に開催される 外部評価委員会の内容をもとに、事務局を中心に年度計画の修正等 を行い、 8月に内部評価委員会を開催し、前期における計画の進捗状況及び外部評価に係る指摘事項の検討状況を確認 することとした。それに伴い、後期の計画内容を精査することとした。 12月の内部評価委員会において、これまでの進捗状況の確認と、次年度の事業計画の戦略を検討することとし、1月以降の補助金調書作成に反映 できるようにした。 （補足・平成29年度の状況） ④平成29年度は地域イノベーション学科目群の構築、インターンシップの科目化、ルーブリックの構築等、更に強化を行うため検討を進めている。特にルーブリックは開発が進んでおり、平成29年度前期集中講義に利用することとなっている。 ⑤内部評価委員会開催予定日：第1回平成29年 8月22日（火） 前期の進捗確認、後期の計画修正 第2回平成29年12月25日（月） 前後期の進捗確認、次年度の計画検討（参照） 内部評価委員会及び外部評価委員会事項書、議事概要は（資料9）参照。	Ⅳ
	COC+事業推進会議（5月、2月）、教育プログラム開発委員会（5月、2月）の開催	○教育プログラム開発委員会及びCOC+事業推進会議を5月2月にそれぞれ開催し、平成28年度事業計画に基づく検討やその成果報告を行った。 ○教育プログラム開発委員会の直下に3つの分科会を設置した。 ○全高等教育機関による単位互換協定締結に向けて検討した。	①教育プログラム開発委員会及びCOC+事業推進会議において、COC+の検討体制を整えた。 →教育プログラム開発委員会の直下に3つの分科会を設置し、その分科会において細かな検討を行うことにした。ただし、年2回の会議開催では、スピード感を持って意思決定できないことから、「 COC+審議依頼書 」を整え、 メール会議を必要な時期に行える体制を整えた （資料10）。また、事業内容の報告が細やかに出来ていなかったため、「 COC+報告書 」を整備し、 各年度の末頃に事業報告を全事業協働機関に対して行うこととし 、情報の共有を図るとともに、事業内容に対して意見を出しやすくした。（資料11） ② 教育プログラム開発委員会の直下に3つの分科会を設置したことで、細やかな検討を行うことができた 。 →各高等教育機関が持つ、三重県的重要施策である①食と農②次世代産業③医療・健康・福祉の3つの分野で養成する人材等を検討することとしたが、分科会に養成する人材像にばらつきが生じる可能性があることから、検討する内容を分科会毎に分けた方が推進しやすいという判断のもと、 1高等教育機関マネジメント分科会（以下、「第1分科会」という。）Ⅱ教育プログラム・ファンタジスタ資格検討分科会（以下、「第2分科会」という。）Ⅲ情報アセスメント分科会（以下、「第3分科会」という。）の3つに分け、検討することとした 。 ③ 全高等教育機関が連携した教育プログラムが更に推進できるよう、単位互換協定締結 に向けた検討を行った。（資料12） →各高等教育機関が持つ、三重創生ファンタジスタの養成に資する科目の提供が進むことで、より 教育プログラムの質を高めることができる 。 （補足・平成29年度の状況） ④平成29年6月2日（金）開催のコンソーシアム企画運営委員会において、改めて単位互換協定案について審議し、課題点を共有した。6月29日開催予定のコンソーシアム総会にて諮られ、締結される予定。 （参照） 各会議における構成員、目的、開催実績、平成29年度検討内容については（資料13）参照。 各会議の事項書、議事概要については（資料14）参照。		

分野	項目	年度計画	実績	成果	自己評価
運営	事業の推進に関すること	教育プログラム開発委員会直下の3つの分科会の開催	○第1分科会を2回開催し、数値目標達成に向けた方策を検討した。 ○第2分科会を1回開催し、教育プログラムの方針について検討した。 ○第2分科会教学WGを6回開催し、教育プログラムの詳細、全高等教育機関の三重創生ファンタジスタ資格の運用方法を検討した。 ○第2分科会産学WGを準備WGを含め3回開催し、産業界が望む三重創生ファンタジスタの在り方、県内就職における出口戦略について検討した。 ○第3分科会を3回開催し、コンソーシアムと連携して、学生の意識調査を行った。またHPの運用、データベースの方針等の検討を行った。	① 第1分科会において、数値目標達成に向けた方策を検討した 。 →第1分科会では三重県を分科会長とし、各高等教育機関の県内就職率及びインターンシップ数等、COC+に係る数値目標について調査、分析、検討等を行った。その結果、当初全高等教育機関に対して方策を検討する予定にしていたが、 高等教育機関毎に県内就職における特徴があり（資料15） 、対応策が異なる可能性があることから、高等教育機関毎に検討することとした。まずは「意識調査アンケート」のクロス分析等、詳細の分析、検討を終えてから、高等教育機関毎の詳細な原因分析を別途行うこととした。（資料7） ② 第2分科会において、高等教育機関教務関係者が集まる教学WGと産業界関係者が協議する場である産学WGを設けた 。 →教学WGと産学WGは、より連携して事業を推進すべきであることから、各会議資料、議事概要、録音データを全て送付し、情報共有を行うことや、互いのWGに対して意見を申し立てることができるよう、審議事項に依順事項を設け協議することとした。 ③教学WGにおいて、教育プログラムの充実を図ることができた。 → 県内9高等教育機関（四日市大学、皇學館大学、鈴鹿大学、鈴鹿医療科学大学、三重県立看護大学、四日市看護医療大学、三重短期大学、鈴鹿工業高等専門学校、鳥羽商船高等専門学校）において、ベージック資格を創設し 、平成29年度よりスタートすることとなった。このことにより、 三重大学以外の県内高等教育機関から三重創生ファンタジスタを養成することができるようになった 。残りの3高等教育機関においても平成29年度以降順次ベージック資格を創設することが確認され、高田短期大学は平成30年度に創設することで検討が進められている。 → PBL型集中講義3科目は、全高等教育機関学生が参加できるものとなるよう検討、構築し、平成29年度に開講した 。 →学生の成長度合いを可視化するため、 ルーブリックの検討を行い、三重大学地域創生センターの専任講師が行う共同研究で試行的に運用 を行い、その評価結果を検討しながらPBL型集中講義で利用できるよう、検討、開発を行った（資料16）。 ④ 産学WGにおいて、産業界が求める人材の養成方法や三重創生ファンタジスタ資格の啓発方法を検討した 。 →県内就職率を向上するための出口戦略を検討するなかで、労働局やハローワーク、県内企業が集まる会議、イベント等に啓発チラシを配付、掲示することが効果的であるとの意見があったことから、平成29年度の実業計画に啓発チラシ作成を盛り込み、10,000部印刷することとした。内容については教学WG及び産学WGにて検討を行うこととした。 →産業界関係者からは、主体性を持って様々な提案ができる、個性的な人材を求める声が多いことが分かった。平成29年度以降は、地域が求める人材が養成できるプログラム、イベントを随時検討することとした。 ⑤ 第3分科会において、HPや企業情報データベース、意識調査アンケート等について検討した 。 →意識調査アンケートについてアンケート項目の立案、配付、回収集計等の業務を行い、県内学生の就職やインターンシップ、地域活動についての潜在意識を知ることができた。また、ホームページの運用を実施し、様々なイベントや取組についての情報の発信を行った。企業情報データベースについては、分科会であり方について再検討を行い、企業情報を紹介するデータベースとして整備を進めた。（報告書P.12） ⑥各種会議については議事概要、資料の他、録音データも送付をしており、欠席した事業協働機関においても情報を共有できるようにした。 （補足・平成29年度の状況） ⑦啓発チラシの検討を第2分科会教学WG及び産学WGで行っており、当初1種類の啓発チラシを作成予定だったが、生徒・学生向けと企業向けに啓発チラシを分けたほうが、より伝わりやすいとの意見から、まずは企業向けに啓発チラシを10,000部作成し、その後学生向けのチラシを別途作成することとした。予算については業者と調整することができた。 （参照） 各分科会における構成員、目的、開催実績、平成29年度検討内容については（資料17）参照。 各分科会における事項書、議事概要は（資料18）参照。	Ⅳ
	事業の推進に関すること	COC+の事業の実施体制におけるコストシェアの状況について	<人的支援> （三重県） ○COC+事業推進会議の構成員1名、教育プログラム開発委員会2名。（資料13） ○日本理解特殊講義（授業テーマ：三重の歴史と文化）及び現代社会理解特殊講義（授業テーマ：三重の産業）「ゲストスピーカーを4名派遣。（資料19） ○第1分科会2名 第2分科会2名 第3分科会2名（資料17） ○COC+事業推進会議の構成員3名、教育プログラム開発委員会3名。（資料13） ○日本理解特殊講義（授業テーマ：三重の歴史と文化）及び現代社会理解特殊講義（授業テーマ：三重の産業）「ゲストスピーカーを4名派遣。（資料19） ○第2分科会4名 第2分科会産学WG3名（資料17） （COC+参加校） ○COC+事業推進会議の構成員5名、教育プログラム開発委員会5名（資料13） ○第1分科会3名 第2分科会4名 第2分科会教学WG12名 第3分科会5名（資料17） ○PBL授業科目構築（教職員の協力）食と観光実践4名 次世代産業実践2名 医療・健康・福祉実践1名 ●食と観光実践：（四日市大学教授、皇學館大学助教、鈴鹿大学教授・専任講師） ●次世代産業実践：（鈴鹿工業高等専門学校教務主事、鳥羽商船高等専門学校副校長） ●医療・健康・福祉実践：（鈴鹿医療科学大学・教務課職員） <物的支援> （三重県） ○各会議における会場、地域と県内高等教育機関の魅力を伝える情報冊子「みえコレ」し（席次資料） ○（株）百五総合研究所によるHRIREPORT発行（席次資料） （COC+参加校） ○各会議における会場＜財政的支援＞ （三重県） ○高等教育機関魅力向上支援補助金 ○コンソーシアムでの「三重を知る」共同授業の開発に係る学費負担	<人的支援> （三重県） ○COC+事業推進会議の構成員1名、教育プログラム開発委員会2名。（資料13） ○日本理解特殊講義（授業テーマ：三重の歴史と文化）及び現代社会理解特殊講義（授業テーマ：三重の産業）「ゲストスピーカーを4名派遣。（資料19） ○第1分科会2名 第2分科会2名 第3分科会2名（資料17） ○COC+事業推進会議の構成員3名、教育プログラム開発委員会3名。（資料13） ○日本理解特殊講義（授業テーマ：三重の歴史と文化）及び現代社会理解特殊講義（授業テーマ：三重の産業）「ゲストスピーカーを4名派遣。（資料19） ○第2分科会4名 第2分科会産学WG3名（資料17） （COC+参加校） ○COC+事業推進会議の構成員5名、教育プログラム開発委員会5名（資料13） ○第1分科会3名 第2分科会4名 第2分科会教学WG12名 第3分科会5名（資料17） ○PBL授業科目構築（教職員の協力）食と観光実践4名 次世代産業実践2名 医療・健康・福祉実践1名 ●食と観光実践：（四日市大学教授、皇學館大学助教、鈴鹿大学教授・専任講師） ●次世代産業実践：（鈴鹿工業高等専門学校教務主事、鳥羽商船高等専門学校副校長） ●医療・健康・福祉実践：（鈴鹿医療科学大学・教務課職員） <物的支援> （三重県） ○各会議における会場、地域と県内高等教育機関の魅力を伝える情報冊子「みえコレ」し（席次資料） ○（株）百五総合研究所によるHRIREPORT発行（席次資料） （COC+参加校） ○各会議における会場＜財政的支援＞ （三重県） ○高等教育機関魅力向上支援補助金 ○コンソーシアムでの「三重を知る」共同授業の開発に係る学費負担	<人的支援> ① 事業協働機関より各種会議体への出席、授業での講演、授業模範等、様々な場面で協力を得た 。 →特にPBL型集中講義科目の構築においては、科目の作りこみ時点で各高等教育機関と密着に打合せを重ね、三重大学以外の高等教育機関の学生が参加できる授業科目を作り上げることができた。 ② 三重県は、地域と県内高等教育機関の魅力を伝える情報冊子「みえコレ！」を作成し、数多くの生徒に三重県の魅力を情報発信した 。 →若者の県内定着に向け、 情報冊子を県内全高校2年生に配布した 。生徒に伝わりやすいように、漫画で紹介する等、興味・関心を引く構成に定着しており、県内定着率向上に役立てている。 ③各会議体における会場も各事業協働機関より、COC+を協働して作り上げる意識付けができた。 →教学WGは開催頻度も高く、県内高等教育機関を往來することになったが、多数の高等教育機関が毎回出席し、（株）百五を連携して構築することができた。 ④（株）百五総合研究所が発行するHRIREPORTについては、後述「情報冊子等を用いたCOC+事業の発信」参照。 <財政的支援> ⑤ 三重県は、県内高等教育機関の魅力向上を促進するため、「高等教育機関魅力向上支援補助金（県版COC）」を用いて支援した 。 →三重県が学生の確保、学生の県内への就職又は地域課題の解決に取り組む県内高等教育機関を支援するための公費事業であり、 平成28年度は平成27年度継続事業及び平成28年度新規採択事業の計6件（計約4,900万円）を支援 した。また、コンソーシアムは各高等教育機関の協力により、入学者を増加させることが大きな目的の一つでもあるため、「三重を知る」共同授業の開発に係る教育プログラムの構築の費用負担や、県版COCの支援はCOC+及び後継組織のコンソーシアムに大きく貢献している。（資料20） （参照） ⑥ 三重県は、県内高等教育機関の魅力を向上させるため、「高等教育機関魅力向上支援補助金（県版COC）」を用いて支援した 。 →三重県が学生の確保、学生の県内への就職又は地域課題の解決に取り組む県内高等教育機関を支援するための公費事業であり、 平成28年度は平成27年度継続事業及び平成28年度新規採択事業の計6件（計約4,900万円）を支援 した。また、コンソーシアムは各高等教育機関の協力により、入学者を増加させることが大きな目的の一つでもあるため、「三重を知る」共同授業の開発に係る教育プログラムの構築の費用負担や、県版COCの支援はCOC+及び後継組織のコンソーシアムに大きく貢献している。（資料20） （参照） ⑦ 三重県は、県内高等教育機関の魅力を向上させるため、「高等教育機関魅力向上支援補助金（県版COC）」を用いて支援した 。 →三重県が学生の確保、学生の県内への就職又は地域課題の解決に取り組む県内高等教育機関を支援するための公費事業であり、 平成28年度は平成27年度継続事業及び平成28年度新規採択事業の計6件（計約4,900万円）を支援 した。また、コンソーシアムは各高等教育機関の協力により、入学者を増加させることが大きな目的の一つでもあるため、「三重を知る」共同授業の開発に係る教育プログラムの構築の費用負担や、県版COCの支援はCOC+及び後継組織のコンソーシアムに大きく貢献している。（資料20） （参照） ⑧ 三重県は、県内高等教育機関の魅力を向上させるため、「高等教育機関魅力向上支援補助金（県版COC）」を用いて支援した 。 →三重県が学生の確保、学生の県内への就職又は地域課題の解決に取り組む県内高等教育機関を支援するための公費事業であり、 平成28年度は平成27年度継続事業及び平成28年度新規採択事業の計6件（計約4,900万円）を支援 した。また、コンソーシアムは各高等教育機関の協力により、入学者を増加させることが大きな目的の一つでもあるため、「三重を知る」共同授業の開発に係る教育プログラムの構築の費用負担や、県版COCの支援はCOC+及び後継組織のコンソーシアムに大きく貢献している。（資料20） （参照） ⑨ 三重県は、県内高等教育機関の魅力を向上させるため、「高等教育機関魅力向上支援補助金（県版COC）」を用いて支援した 。 →三重県が学生の確保、学生の県内への就職又は地域課題の解決に取り組む県内高等教育機関を支援するための公費事業であり、 平成28年度は平成27年度継続事業及び平成28年度新規採択事業の計6件（計約4,900万円）を支援 した。また、コンソーシアムは各高等教育機関の協力により、入学者を増加させることが大きな目的の一つでもあるため、「三重を知る」共同授業の開発に係る教育プログラムの構築の費用負担や、県版COCの支援はCOC+及び後継組織のコンソーシアムに大きく貢献している。（資料20） （参照） ⑩ 三重県は、県内高等教育機関の魅力を向上させるため、「高等教育機関魅力向上支援補助金（県版COC）」を用いて支援した 。 →三重県が学生の確保、学生の県内への就職又は地域課題の解決に取り組む県内高等教育機関を支援するための公費事業であり、 平成28年度は平成27年度継続事業及び平成28年度新規採択事業の計6件（計約4,900万円）を支援 した。また、コンソーシアムは各高等教育機関の協力により、入学者を増加させることが大きな目的の一つでもあるため、「三重を知る」共同授業の開発に係る教育プログラムの構築の費用負担や、県版COCの支援はCOC+及び後継組織のコンソーシアムに大きく貢献している。（資料20） （参照） ⑪ 三重県は、県内高等教育機関の魅力を向上させるため、「高等教育機関魅力向上支援補助金（県版COC）」を用いて支援した 。 →三重県が学生の確保、学生の県内への就職又は地域課題の解決に取り組む県内高等教育機関を支援するための公費事業であり、 平成28年度は平成27年度継続事業及び平成28年度新規採択事業の計6件（計約4,900万円）を支援 した。また、コンソーシアムは各高等教育機関の協力により、入学者を増加させることが大きな目的の一つでもあるため、「三重を知る」共同授業の開発に係る教育プログラムの構築の費用負担や、県版COCの支援はCOC+及び後継組織のコンソーシアムに大きく貢献している。（資料20） （参照） ⑫ 三重県は、県内高等教育機関の魅力を向上させるため、「高等教育機関魅力向上支援補助金（県版COC）」を用いて支援した 。 →三重県が学生の確保、学生の県内への就職又は地域課題の解決に取り組む県内高等教育機関を支援するための公費事業であり、 平成28年度は平成27年度継続事業及び平成28年度新規採択事業の計6件（計約4,900万円）を支援 した。また、コンソーシアムは各高等教育機関の協力により、入学者を増加させることが大きな目的の一つでもあるため、「三重を知る」共同授業の開発に係る教育プログラムの構築の費用負担や、県版COCの支援はCOC+及び後継組織のコンソーシアムに大きく貢献している。（資料20） （参照） ⑬ 三重県は、県内高等教育機関の魅力を向上させるため、「高等教育機関魅力向上支援補助金（県版COC）」を用いて支援した 。 →三重県が学生の確保、学生の県内への就職又は地域課題の解決に取り組む県内高等教育機関を支援するための公費事業であり、 平成28年度は平成27年度継続事業及び平成28年度新規採択事業の計6件（計約4,900万円）を支援 した。また、コンソーシアムは各高等教育機関の協力により、入学者を増加させることが大きな目的の一つでもあるため、「三重を知る」共同授業の開発に係る教育プログラムの構築の費用負担や、県版COCの支援はCOC+及び後継組織のコンソーシアムに大きく貢献している。（資料20） （参照） ⑭ 三重県は、県内高等教育機関の魅力を向上させるため、「高等教育機関魅力向上支援補助金（県版COC）」を用いて支援した 。 →三重県が学生の確保、学生の県内への就職又は地域課題の解決に取り組む県内高等教育機関を支援するための公費事業であり、 平成28年度は平成27年度継続事業及び平成28年度新規採択事業の計6件（計約4,900万円）を支援 した。また、コンソーシアムは各高等教育機関の協力により、入学者を増加させることが大きな目的の一つでもあるため、「三重を知る」共同授業の開発に係る教育プログラムの構築の費用負担や、県版COCの支援はCOC+及び後継組織のコンソーシアムに大きく貢献している。（資料20） （参照） ⑮ 三重県は、県内高等教育機関の魅力を向上させるため、「高等教育機関魅力向上支援補助金（県版COC）」を用いて支援した 。 →三重県が学生の確保、学生の県内への就職又は地域課題の解決に取り組む県内高等教育機関を支援するための公費事業であり、 平成28年度は平成27年度継続事業及び平成28年度新規採択事業の計6件（計約4,900万円）を支援 した。また、コンソーシアムは各高等教育機関の協力により、入学者を増加させることが大きな目的の一つでもあるため、「三重を知る」共同授業の開発に係る教育プログラムの構築の費用負担や、県版COCの支援はCOC+及び後継組織のコンソーシアムに大きく貢献している。（資料20） （参照） ⑯ 三重県は、県内高等教育機関の魅力を向上させるため、「高等教育機関魅力向上支援補助金（県版COC）」を用いて支援した 。 →三重県が学生の確保、学生の県内への就職又は地域課題の解決に取り組む県内高等教育機関を支援するための公費事業であり、 平成28年度は平成27年度継続事業及び平成28年度新規採択事業の計6件（計約4,900万円）を支援 した。また、コンソーシアムは各高等教育機関の協力により、入学者を増加させることが大きな目的の一つでもあるため、「三重を知る」共同授業の開発に係る教育プログラムの構築の費用負担や、県版COCの支援はCOC+及び後継組織のコンソーシアムに大きく貢献している。（資料20） （参照） ⑰ 三重県は、県内高等教育機関の魅力を向上させるため、「高等教育機関魅力向上支援補助金（県版COC）」を用いて支援した 。 →三重県が学生の確保、学生の県内への就職又は地域課題の解決に取り組む県内高等教育機関を支援するための公費事業であり、 平成28年度は平成27年度継続事業及び平成28年度新規採択事業の計6件（計約4,900万円）を支援 した。また、コンソーシアムは各高等教育機関の協力により、入学者を増加させることが大きな目的の一つでもあるため、「三重を知る」共同授業の開発に係る教育プログラムの構築の費用負担や、県版COCの支援はCOC+及び後継組織のコンソーシアムに大きく貢献している。（資料20） （参照） ⑱ 三重県は、県内高等教育機関の魅力を向上させるため、「高等教育機関魅力向上支援補助金（県版COC）」を用いて支援した 。 →三重県が学生の確保、学生の県内への就職又は地域課題の解決に取り組む県内高等教育機関を支援するための公費事業であり、 平成28年度は平成27年度継続事業及び平成28年度新規採択事業の計6件（計約4,900万円）を支援 した。また、コンソーシアムは各高等教育機関の協力により、入学者を増加させることが大きな目的の一つでもあるため、「三重を知る」共同授業の開発に係る教育プログラムの構築の費用負担や、県版COCの支援はCOC+及び後継組織のコンソーシアムに大きく貢献している。（資料20） （参照） ⑲ 三重県は、県内高等教育機関の魅力を向上させるため、「高等教育機関魅力向上支援補助金（県版COC）」を用いて支援した 。 →三重県が学生の確保、学生の県内への就職又は地域課題の解決に取り組む県内高等教育機関を支援するための公費事業であり、 平成28年度は平成27年度継続事業及び平成28年度新規採択事業の計6件（計約4,900万円）を支援 した。また、コンソーシアムは各高等教育機関の協力により、入学者を増加させることが大きな目的の一つでもあるため、「三重を知る」共同授業の開発に係る教育プログラムの構築の費用負担や、県版COCの支援はCOC+及び後継組織のコンソーシアムに大きく貢献している。（資料20） （参照） ⑳ 三重県は、県内高等教育機関の魅力を向上させるため、「高等教育機関魅力向上支援補助金（県版COC）」を用いて支援した 。 →三重県が学生の確保、学生の県内への就職又は地域課題の解決に取り組む県内高等教育機関を支援するための公費事業であり、 平成28年度は平成27年度継続事業及び平成28年度新規採択事業の計6件（計約4,900万円）を支援 した。また、コンソーシアムは各高等教育機関の協力により、入学者を増加させることが大きな目的の一つでもあるため、「三重を知る」共同授業の開発に係る教育プログラムの構築の費用負担や、県版COCの支援はCOC+及び後継組織のコンソーシアムに大きく貢献している。（資料20） （参照） ㉑ 三重県は、県内高等教育機関の魅力を向上させるため、「高等教育機関魅力向上支援補助金（県版COC）」を用いて支援した 。 →三重県が学生の確保、学生の県内への就職又は地域課題の解決に取り組む県内高等教育機関を支援するための公費事業であり、 平成28年度は平成27年度継続事業及び平成28年度新規採択事業の計6件（計約4,900万円）を支援 した。また、コンソーシアムは各高等教育機関の協力により、入学者を増加させることが大きな目的の一つでもあるため、「三重を知る」共同授業の開発に係る教育プログラムの構築の費用負担や、県版COCの支援はCOC+及び後継組織のコンソーシアムに大きく貢献している。（資料20） （参照） ㉒ 三重県は、県内高等教育機関の魅力を向上させるため、「高等教育機関魅力向上支援補助金（県版COC）」を用いて支援した 。 →三重県が学生の確保、学生の県内への就職又は地域課題の解決に取り組む県内高等教育機関を支援するための公費事業であり、 平成28年度は平成27年度継続事業及び平成28年度新規採択事業の計6件（計約4,900万円）を支援 した。また、コンソーシアムは各高等教育機関の協力により、入学者を増加させることが大きな目的の一つでもあるため、「三重を知る」共同授業の開発に係る教育プログラムの構築の費用負担や、県版COCの支援はCOC+及び後継組織のコンソーシアムに大きく貢献している。（資料20） （参照） ㉓ 三重県は、県内高等教育機関の魅力を向上させるため、「高等教育機関魅力向上支援補助金（県版COC）」を用いて支援した 。 →三重県が学生の確保、学生の県内への就職又は地域課題の解決に取り組む県内高等教育機関を支援するための公費事業であり、 平成28年度は平成27年度継続事業及び平成28年度新規採択事業の計6件（計約4,900万円）を支援 した。また、コンソーシアムは各高等教育機関の協力により、入学者を増加させることが大きな目的の一つでもあるため、「三重を知る」共同授業の開発に係る教育プログラムの構築の費用負担や、県版COCの支援はCOC+及び後継組織のコンソーシアムに大きく貢献している。（資料20） （参照） ㉔ 三重県は、県内高等教育機関の魅力を向上させるため、「高等教育機関魅力向上支援補助金（県版COC）」を用いて支援した 。 →三重県が学生の確保、学生の県内への就職又は地域課題の解決に取り組む県内高等教育機関を支援するための公費事業であり、 平成28年度は平成27年度継続事業及び平成28年度新規採択事業の計6件（計約4,900万円）を支援 した。また、コンソーシアムは各高等教育機関の協力により、入学者を増加させることが大きな目的の一つでもあるため、「三重を知る」共同授業の開発に係る教育プログラムの構築の費用負担や、県版COCの支援はCOC+及び後継組織のコンソーシアムに大きく貢献している。（資料20） （参照） ㉕ 三重県は、県内高等教育機関の魅力を向上させるため、「高等教育機関魅力向上支援補助金（県版COC）」を用いて支援した 。 →三重県が学生の確保、学生の県内への就職又は地域課題の解決に取り組む県内高等教育機関を支援するための公費事業であり、 平成28年度は平成27年度継続事業及び平成28年度新規採択事業の計6件（計約4,900万円）を支援 した。また、コンソーシアムは各高等教育機関の協力により、入学者を増加させることが大きな目的の一つでもあるため、「三重を知る」共同授業の開発に係る教育プログラムの構築の費用負担や、県版COCの支援はCOC+及び後継組織のコンソーシアムに大きく貢献している。（資料20） （参照） ㉖ 三重県は、県内高等教育機関の魅力を向上させるため、「高等教育機関魅力向上支援補助金（県版COC）」を用いて支援した 。 →三重県が学生の確保、学生の県内への就職又は地域課題の解決に取り組む県内高等教育機関を支援するための公費事業であり、 平成28年度は平成27年度継続事業及び平成28年度新規採択事業の計6件（計約4,900万円）を支援 した。また、コンソーシアムは各高等教育機関の協力により、入学者を増加させることが大きな目的の一つでもあるため、「三重を知る」共同授業の開発に係る教育プログラムの構築の費用負担や、県版COCの支援はCOC+及び後継組織のコンソーシアムに大きく貢献している。（資料20） （参照） ㉗ 三重県は、県内高等教育機関の魅力を向上させるため、「高等教育機関魅力向上支援補助金（県版COC）」を用いて支援した 。 →三重県が学生の確保、学生の県内への就職又は地域課題の解決に取り組む県内高等教育機関を支援するための公費事業であり、 平成28年度は平成27年度継続事業及び平成28年度新規採択事業の計6件（計約4,900万円）を支援 した。また、コンソーシアムは各高等教育機関の協力により、入学者を増加させることが大きな目的の一つでもあるため、「三重を知る」共同授業の開発に係る教育プログラムの構築の費用負担や、県版COCの支援はCOC+及び後継組織のコンソーシアムに大きく貢献している。（資料20） （参照） ㉘ 三重県は、県内高等教育機関の魅力を向上させるため、「高等教育機関魅力向上支援補助金（県版COC）」を用いて支援した 。 →三重県が学生の確保、学生の県内への就職又は地域課題の解決に取り組む県内高等教育機関を支援するための公費事業であり、 平成28年度は平成27年度継続事業及び平成28年度新規採択事業の計6件（計約4,900万円）を支援 した。また、コンソーシアムは各高等教育機関の協力により、入学者を増加させることが大きな目的の一つでもあるため、「三重を知る」共同授業の開発に係る教育プログラムの構築の費用負担や、県版COCの支援はCOC+及び後継組織のコンソーシアムに大きく貢献している。（資料20） （参照） ㉙ 三重県は、県内高等教育機関の魅力を向上させるため、「高等教育機関魅力向上支援補助金（県版COC）」を用いて支援した 。 →三重県が学生の確保、学生の県内への就職又は地域課題の解決に取り組む県内高等教育機関を支援するための公費事業であり、 平成28年度は平成27年度継続事業及び平成28年度新規採択事業の計6件（計約4,900万円）を支援 した。また、コンソーシアムは各高等教育機関の協力により、入学者を増加させることが大きな目的の一つでもあるため、「三重を知る」共同授業の開発に係る教育プログラムの構築の費用負担や、県版COCの支援はCOC+及び後継組織のコンソーシアムに大きく貢献している。（資料20） （参照） ㉚ 三重県は、県内高等教育機関の魅力を向上させるため、「高等教育機関魅力向上支援補助金（県版COC）」を用いて支援した 。 →三重県が学生の確保、学生の県内への就職又は地域課題の解決に取り組む県内高等教育機関を支援するための公費事業であり、 平成28年度は平成27年度継続事業及び平成28年度新規採択事業の計6件（計約4,900万円）を支援 した。また、コンソーシアムは各高等教育機関の協力により、入学者を増加させることが大きな目的の一つでもあるため、「三重を知る」共同授業の開発に係る教育プログラムの構築の費用負担や、県版COCの支援はCOC+及び後継組織のコンソーシアムに大きく貢献している。（資料20） （参照） ㉛ 三重県は、県内高等教育機関の魅力を向上させるため、「高等教育機関魅力向上支援補助金（県版COC）」を用いて支援した 。 →三重県が学生の確保、学生の県内への就職又は地域課題の解決に取り組む県内高等教育機関を支援するための公費事業であり、 平成28年度は平成27年度継続事業及び平成28年度新規採択事業の計6件（計約4,900万円）を支援 した。また、コンソーシアムは各高等教育機関の協力により、入学者を増加させることが大きな目的の一つでもあるため、「三重を知る」共同授業の開発に係る教育プログラムの構築の費用負担や、県版COCの支援はCOC+及び後継組織のコンソーシアムに大きく貢献している。（資料20） （参照） ㉜ 三重県は、県内高等教育機関の魅力を向上させるため、「高等教育機関魅力向上支援補助金（県版COC）」を用いて支援した 。 →三重県が学生の確保、学生の県内への就職又は地域課題の解決に取り組む県内高等教育機関を支援するための公費事業であり、 平成28年度は平成27年度継続事業及び平成28年度新規採択事業の計6件（計約4,900万円）を支援 した。また、コンソーシアムは各高等教育機関の協力により、入学者を増加させることが大きな目的の一つでもあるため、「三重を知る」共同授業の開発に係る教育プログラムの構築の費用負担や、県版COCの支援はCOC+及び後継組織のコンソーシアムに大きく貢献している。（資料20） （参照） ㉝ 三重県は、県内高等教育機関の魅力を向上させるため、「高等教育機関魅力向上支援補助金（県版COC）」を用いて支援した 。 →三重県が学生の確保、学生の県内への就職又は地域課題の解決に取り組む県内高等教育機関を支援するための公費事業であり、 平成28年度は平成27年度継続事業及び平成28年度新規採択事業の計6件（計約4,900万円）を支援 した。また、コンソーシアムは各高等教育機関の協力により、入学者を増加させることが大きな目的の一つでもあるため、「三重を知る」共同授業の開発に係る教育プログラムの構築の費用負担や、県版COCの支援はCOC+及び後継組織のコンソーシアムに大きく貢献している。（資料20） （参照） ㉞ 三重県は、県内高等教育機関の魅力を向上させるため、「高等教育機関魅力向上支援補助金（県版COC）」を用いて支援した 。 →三重県が学生の確保、学生の県内への就職又は地域課題の解決に取り組む県内高等教育機関を支援するための公費事業であり、 平成28年度は平成27年度継続事業及び平成28年度新規採択事業の計6件（計約4,900万円）を支援 した。また、コンソーシアムは各高等教育機関の協力により、入学者を増加させることが大きな目的の一つでもあるため、「三重を知る」共同授業の開発に係る教育プログラムの構築の費用負担や、県版COCの支援はCOC+及び後継組織のコンソーシアムに大きく貢献している。（資料20） （参照） ㉟ 三重県は、県内高等教育機関の魅力を向上させるため、「高等教育機関魅力向上支援補助金（県版COC）」を用いて支援した 。 →三重県が学生の確保、学生の県内への就職又は地域課題の解決に取り組む県内高等教育機関を支援するための公費事業であり、 平成28年度は平成27年度継続事業及び平成28年度新規採択事業の計6件（計約4,900万円）を支援 した。また、コンソーシアムは各高等教育機関の協力により、入学者を増加させることが大きな目的の一つでもあるため、「三重を知る」共同授業の開発に係る教育プログラムの構築の費用負担や、県版COCの支援はCOC+及び後継組織のコンソーシアムに大きく貢献している。（資料20） （参照） ㊱ 三重県は、県内高等教育機関の魅力を向上させるため、「高等教育機関魅力向上支援補助金（県版COC）」を用いて支援した 。 →三重県が学生の確保、学生の県内への就職又は地域課題の解決に取り組む県内高等教育機関を支援するための公費事業であり、 平成28年度は平成27年度継続事業及び平成28年度新規採択事業の計6件（計約4,900万円）を支援 した。また、コンソーシアムは各高等教育機関の協力により、入学者を増加させることが大きな目的の一つでもあるため、「三重を知る」共同授業の開発に係る教育プログラムの構築の費用負担や、県版COCの支援はCOC+及び後継組織のコンソーシアムに大きく貢献している。（資料20） （参照） ㊲ 三重県は、県内高等教育機関の魅力を向上させるため、「高等教育機関魅力向上支援補助金（県版COC）」を用いて支援した 。 →三重県が学生の確保、学生の県内への就職又は地域課題の解決に取り組む県内高等教育機関を支援するための公費事業であり、 平成28年度は平成27年度継続事業及び平成28年度新規採択事業の計6件（計約4,900万円）を支援 した。また、コンソーシアムは各高等教育機関の協力により、入学者を増加させることが大きな目的の一つでもあるため、「三重を知る」共同授業の開発に係る教育プログラムの構築の費用負担や、県版COCの支援はCOC+及び後継組織のコンソーシアムに大きく貢献している。（資料20） （参照） ㊳ 三重県は、県内高等教育機関の魅力を向上させるため、「高等教育機関魅力向上支援補助金（県版COC）」を用いて支援した 。 →三重県が学生の確保、学生の県内への就職又は地域課題の解決に取り組む県内高等教育機関を支援するための公費事業であり、 平成28年度は平成27年度継続事業及び平成28年度新規採択事業の計6件（計約4,900万円）を支援 した。また、コンソーシアムは各高等教育機関の協力により、入学者を増加させることが大きな目的の一つでもあるため、「三重を知る」共同授業の開発に係る教育プログラムの構築の費用負担や、県版COCの支援はCOC+及び後継組織のコンソーシアムに大きく貢献している。（資料20） （参照） ㊴ 三重県は、県内高等教育機関の魅力を向上させるため、「高等教育機関魅力向上支援補助金（県版COC）」を用いて支援した 。 →三重県が学生の確保、学生の県内への就職又は地域課題の解決に取り組む県内高等教育機関を支援するための公費事業であり、 平成28年度は平成27年度継続事業及び平成28年度新規採択事業の計6件（計約4,900万円）を支援 した。また、コンソーシアムは各高等教育機関の協力により、入学者を増加させることが大きな目的の一つでもあるため、「三重を知る」共同授業の開発に係る教育プログラムの構築の費用負担や、県版COCの支援はCOC+及び後継組織のコンソーシアムに大きく貢献している。（資料20） （参照） ㊵ 三重県は、県内高等教育機関の魅力を向上させるため、「高等教育機関魅力向上支援補助金（県版COC）」を用いて支援した 。 →三重県が学生の確保、学生の県内への就職又は地域課題の解決に取り組む県内高等教育機関を支援するための公費事業であり、 平成28年度は平成27年度継続事業及び平成28年度新規採択事業の計6件（計約4,900万円）を支援 した。また、コンソーシアムは各高等教育機関の協力により、入学者を増加させることが大きな目的の一つでもあるため、「三重を知る」共同授業の開発に係る教育プログラムの構築の費用負担や、県版COCの支援はCOC+及び後継組織のコンソーシアムに大きく貢献している。（資料20） （参照） ㊶ 三重県は、県内高等教育機関の魅力を向上させるため、「高等教育機関魅力向上支援補助金（県版COC）」を用いて支援した 。 →三重県が学生の確保、学生の県内への就職又は地域課題の解決に取り組む県内高等教育機関を支援するための公費事業であり、 平成28年度は平成27年度継続事業及び平成28年度新規採択事業の計6件（計約4,900万円）を支援 した。また、コンソーシアムは各高等教育機関の協力により、入学者を増加させることが大きな目的の一つでもあるため、「三重を知る」共同授業の開発に係る教育プログラムの構築の費用負担や、県版COCの支援はCOC+及び後継組織のコンソーシアムに大きく貢献している。（資料20） （参照） ㊷ 三重県は、県内高等教育機関の魅力を向上させるため、「高等教育機関魅力向上支援補助金（県版COC）」を用いて支援した 。 →三重県が学生の確保、学生の県内への就職又は地域課題の解決に取り組む県内高等教育機関を支援するための公費事業であり、 平成28年度は平成27年度継続事業及び平成28年度新規採択事業の計6件（計約4,900万円）を支援 した。また、コンソーシアムは各高等教育機関の協力により、入学者を増加させることが大きな目的の一つでもあるため、「三重を知る」共同授業の開発に係る教育プログラムの構築の費用負担や、県版COCの支援はCOC+及び後継組織のコンソーシアムに大きく貢献している。（資料20） （参照） ㊸ 三重県は、県内高等教育機関の魅力を向上させるため、「高等教育機関魅力向上支援補助金（県版COC）」を用いて支援した 。 →三重県が学生の確保、学生の県内への就職又は地域課題の解決に取り組む県内高等教育機関を支援するための公費事業であり、 平成28年度は平成27年度継続事業及び平成28年度新規採択事業の計6件（計約4,900万円）を支援 した。また、コンソーシアムは各高等教育機関の協力により、入学者を増加させることが大きな目的の一つでもあるため、「三重を知る」共同授業の開発に係る教育プログラムの構築の費用負担や、県版COCの支援はCOC+及び後継組織のコンソーシアムに大きく貢献している。（資料20） （参照） ㊹ 三重県は、県内高等教育機関の魅力を向上させるため、「高等教育機関魅力向上支援補助金（県版COC）」を用いて支援した 。 →三重県が学生の確保、学生の県内への就職又は地域課題の解決に取り組む県内高等教育機関を支援するための公費事業であり、 平成28年度は平成27年度継続事業及び平成28年度新規採択事業の計6件（計約4,900万円）を支援 した。また、コンソーシアムは各高等教育機関の協力により、入学者を増加させることが大きな目的の一つでもあるため、「三重を知る」共同授業の開発に係る教育プログラムの構築の費用負担や、県版COCの支援はCOC+及び後継組織のコンソーシアムに大きく貢献している。（資料20） （参照） ㊺ 三重県は、県内高等教育機関の魅力を向上させるため、「高等教育機関魅力向上支援補助金（県版COC）」を用いて支援した 。 →三重県が学生の確保、学生の県内への就職又は地域課題の解決に取り組む県内高等教育機関を支援するための公費事業であり、 平成28年度は平成27年度継続事業及び平成28年度新規採択事業の計6件（計約4,900万円）を支援 した。また、コンソーシアムは各高等教育機関の協力により、入学者を増加させることが大きな目的の一つでもあるため、「三重を知る」共同授業の開発に係る教育プログラムの構築の費用負担や、県版COCの支援はCOC+及び後継組織のコンソーシアムに大きく貢献している。（資料20） （参照） ㊻ 三重県は、県内高等教育機関の魅力を向上させるため、「高等教育機関魅力向上支援補助金（県版COC）」を用いて支援した 。 →三重県が学生の確保、学生の県内への就職又は地域課題の解決に取り組む県内高等教育機関を支援するための公費事業であり、 平成28年度は平成27年度継続事業及び平成28年度新規採択事業の計6件（計約4,900万円）を支援 した。また、コンソーシアムは各高等教育機関の協力により、入学者を増加させることが大きな目的の一つでもあるため、「三重を知る」共同授業の開発に係る教育プログラムの構築の費用負担や、県版COCの支援はCOC+及び後継組織のコンソーシアムに大きく貢献している。（資料20） （参照） ㊼ 三重県は、県内高等教育機関の魅力を向上させるため、「高等教育機関魅力向上支援補助金（県版COC）」を用いて支援した 。 →三重県が学生の確保、学生の県内への就職又は地域課題の解決に取り組む県内高等教育機関を支援するための公費事業であり、 平成28年度は平成27年度継続事業及び平成28年度新規採択事業の計6件（計約4,900万円）を支援 した。また、コンソーシアムは各高等教育機関の協力により、入学者を増加させることが大きな目的の一つでもあるため、「三重を知る」共同授業の開発に係る教育プログラムの構築の費用負担や、県版COCの支援はCOC+及び後継組織のコンソーシアムに大きく貢献している。（資料20） （参照） ㊽ 三重県は、県内高等教育機関の魅力を向上させるため、「高等教育機関魅力向上支援補助金（県版COC）」を用いて支援した 。 →三重県が学生の確保、学生の県内への就職又は地域課題の解決に取り組む県内高等教育機関を支援するための公費事業であり、 平成28年度は平成27年度継続事業及び平成28年度新規採択事業の計6件（計約4,900万円）を支援 した。また、コンソーシアムは各高等教育機関の協力により、入学者を増加させることが大きな目的の一つでもあるため、「三重を知る」共同授業の開発に係る教育プログラムの構築の費用負担や、県版COCの支援はCOC+及び後継組織のコンソーシアムに大きく貢献している。（資料20） （参照） ㊾ 三重県は、県内高等教育機関の魅力を向上させるため、「高等教育機関魅力向上支援補助金（県版COC）」を用いて支援した 。 →三重県が学生の確保、学生の県内への就職又は地域課題の解決に取り組む県内高等教育機関を支援するための公費事業であり、 平成28年度は平成27年度継続事業及び平成28年度新規採択事業の計6件（計約4,900万円）を支援 した。また、コンソーシアムは各高等教育機関の協力により、入学者を増加させることが大きな目的の一つでもあるため、「三重を知る」共同授業の開発に係る教育プログラムの構築の費用負担や、県版COCの支援はCOC+及び後継組織のコンソーシアムに大きく貢献している。（資料20） （参照） ㊿ 三重県は、県内高等教育機関の魅力を向上させるため、「高等教育機関魅力向上支援補助金（県版COC）」を用いて支援した 。 →三重県が学生の確保、学生の県内への就職又は地域課題の解決に取り組む県内高等教育機関を支援するための公費事業であり、 平成28年度は平成27年度継続事業及び平成28年度新規採択事業の計6件（計約4,900万円）を支援 した。また、コンソーシアムは各高等教育機関の協力により、入学者を増加させることが大きな目的の一つでもあるため、「三重を知る」共同授業の開発に係る教育プログラムの構築の費用負担や、県版COCの支援はCOC+及び後継組織のコンソーシアムに大きく貢献している。（資料20） （参照） ㊽ 三重県は、県内高等教育機関の魅力を向上させるため、「高等教育機関魅力向上支援補助金（県版COC）」を用いて支援した 。 →三重県が学生の確保、学生の県内への就職又は地域課題の解決に取り組む県内高等教育機関を支援するための公費事業であり、 平成28年度は平成27年度継続事業及び平成28年度新規採択事業の計6件（計約4,900万円）を支援 した。また、コンソーシアムは各高等教育機関の協力により、入学者を増加させることが大きな目的の一つでもあるため、「三重を知る」共同授業の開発に係る教育プログラムの構築の費用負担や、県版COCの支援はCOC+及び後継組織のコンソーシアムに大きく貢献している。（資料20） （参照） ㊾ 三重県は、県内高等教育機関の魅力を向上させるため、「高等教育機関魅力向上支援補助金（県版COC）」を用いて支援した 。 →三重県が学生の確保、学生の県内への就職又は地域課題の解決に取り組む県内高等教育機関を支援するための公費事業であり、 平成28年度は平成27年度継続事業及び平成28年度新規採択事業の計6件（計約4,900万円）を支援 した。また、コンソーシアムは各高等教育機関の協力により、入学者を増加させることが大きな目的の一つでもあるため、「三重を知る」共同授業の開発に係る教育プログラムの構築の費用負担や、県版COCの支援はCOC+及び後継組織のコンソーシアムに大きく貢献している。（資料20） （参照） ㊿ 三重県は、県内高等教育機関の魅力を向上させるため、「高等教育機関魅力向上支援補助金（県版COC）」を用いて支援した 。 →三重県が学生の確保、学生の県内への就職又は地域課題の解決に取り組む県内高等教育機関を支援するための公費事業であり、 平成28年度は平成27年度継続事業及び平成28年度新規採択事業の計6件（計約4,900万円）を支援 した。また、コンソーシアムは各高等教育機関の協力により、入学者を増加させることが大きな目的の一つでもあるため、「三重を知る」共同授業の開発に係る教育プログラムの構築の費用負担

分野	項目	年度計画	実績	成果	自己評価
教育	教育プログラムの開発に関すること		○三重大学における、平成28年度入学生より、三重創生ファンタジスタ資格認定副専攻コースを修修できるようスタートさせた。	①三重創生ファンタジスタ資格認定副専攻コースを、地域志向科目群48科目、地域実践交流科目群70科目、地域イノベーション「三重大学」科目群92科目をもって構成される教育プログラムとしてスタートさせることができた。（席次資料P.19） → 全学が連携して教育プログラムを構築することし、各学部で履修モデルを作成する等、連携して三重創生ファンタジスタを養成する土台を作成することができた。 ② 平成28年度入学生全員に対して、ビデオ教材導入部分で本副専攻コースの紹介を行ったことや、各種ガイダンス等で説明を行い周知を図った。 （報告書P.18） →平成28年度入学生全員が三重創生ファンタジスタ養成事業を知ることができ、平成29年3月末時点で、125名の学生が本副専攻コースに意向届をもって登録し、地域志向の意思表示が示された。 ③全学生の1年次前期必修科目である「スタートアップセミナー」の中で、学生は地域課題を探索した。（報告書P.20、21） →課題探索については、地域における課題を扱うこととしており、ビデオ教材を用いて、三重県の特徴及び課題をより深く知ることができるようにしたことで、自治体との共同研究や各自治体の地域活性化事業に、学生が参加する姿勢が多々見受けられるようになり（資料26）、三重県のような課題を探索する力や解決に向けて踏み出す力を醸成することができた。スタートアップセミナーにおける学生の評価も高く、三重創生ファンタジスタ養成において重要な役割を果たしている （補足・平成29年度現在の成果） ④平成29年度は新生入生全員に副専攻ガイドを配布して詳細な説明を行ったことや、各学部・学科の必修科目で説明の時間を設け、各学部教授会等に出向き教職員の協力を仰いだ結果、平成28年度末時点では125名の登録であったが、現時点で平成28年度入学生登録者数は155名、平成29年度入学生登録者数は335名であり、大幅に登録者数を増やすことができた。三重大学では多数の学生が地域のリーダーとして活躍すべく、三重創生ファンタジスタの養成を目指している。（資料27）	IV
		インターンシップの単位化に関する検討と科目設定	○平成29年度三重大学三重創生ファンタジスタ資格認定副専攻コースにおける養成科目の中に、三重大学の「インターンシップ入門」科目及びPBL型集集中講義3科目を地域実践交流科目群として位置づけた。 ○平成30年度に向け、三重創生ファンタジスタオリジナルのインターンシップ科目を作成するため、産業界との協議場である産学WG及び全高等教育機関で構成される教学WGで検討を行った。 ○RP1（リアルプロジェクトインターンシップ）を用いて、学生がインターンシップを通して主体的に学ぶ姿を整えた。	＜三重大学＞ ① 三重大学のキャリア教育科目である「インターンシップ入門」及びPBL型集中講義3科目を地域実践交流科目群に位置付けた。 →インターンシップやPBL科目等、地域実践交流科目群の授業を多数用意することで、学生の主体性や協調性を養うことができ、三重創生ファンタジスタの質を高めることが期待できる。（席次資料（29年度版副専攻ガイド）） ②学内でRP1プロジェクトを実施し、学生の成長を確認することができた。 →RP1の詳細及び平成28年度活動実績は、下記URL及び（資料29）を参照。長期間のリアルな仕事を体感できるインターンシップであり、平成28年度RP1報告会においては、事業協働機関である（株）マサグループでインターンシップを行い、新商品が抱える課題に対して学生自らの提案を解決した等、学生が力をつけるだけでなく、企業も学生自らの柔軟なアイデアを参考にすることができ、双方にとってwin-winのあるインターンシップ像が確認できた。 （三重の学生向けキャリアナビ みきやなURL）：https://cocpls-ap.cocpls.mie-u.ac.jp/cocpls/internportal/feature/rpi/yokoyamasyokuhin.html ＜全高等教育機関＞ ③ 全高等教育機関が参加できるインターンシップ授業を創設するため、教学WG及び産学WGで事前検討を行った。 →検討した結果、教学WGでは高等教育機関のインターンシップ関連科目の情報を知ることができ、既にあるインターンシップ科目との差別化を産学WGでは産業界と高等教育機関の双方よりメリットが創出できるインターンシップ科目を協議して作ることが承認されたため、H29年度にインターンシップ授業科目を構築し、平成30年度に開講する。 （補足・平成29年度の状況） ④平成30年度に教養教育機構にインターンシップ授業科目を置くことで検討しており、 全高等教育機関と協議の上（第2分科会教学WG）、科目を構築している。 （資料30）	
		三重大学における「地域イノベーション」学科科目群」の在り方と三重創生ファンタジスタ資格の認定基準の検討	○三重大学三重創生ファンタジスタ資格認定副専攻コースにおける3つの科目群（地域志向科目群、地域実践交流科目群、地域イノベーション「三重大学」学科科目群）の定義、資格認定基準を定め、三重創生ファンタジスタ資格認定副専攻ガイドを発行した。	①三重大学における三重創生ファンタジスタ資格認定副専攻コースに係る、3つの科目群の定義、資格認定基準等を定めたことで、平成28年度より本副専攻コースを開始することができた。 →3つの科目群の定義 地域志向科目群：「知る」（再発見・再認識） 三重県や地域に関して「知る」ことに重点を置き、三重県へ愛着を持たせる 地域実践交流科目群：「学ぶ」（体験・経験を通して学ぶ） 実際に現場に出て、他者と協働してグループワーク等を行うことで、主体性や協調性が磨かれる。 地域イノベーション学科科目群：「考える」（再構成・発信） 2つの科目群を通して、他者の考えを知り、自身の考えを省みることで、柔軟な考えを養う。また、課題に対して具体的な提案を行うことで、リーダーシップを養う →12単位修得後、学びの振り返りであるレポートを課すことで、これまでの学びの軌跡を振り返り、自身の成長を発見できるようにした。	

分野	項目	年度計画	実績	成果	自己評価
教育	教育プログラムの開発に関すること	○学生企画・交流行事	○学生を中心に熟識運営委員会を組織のうえ、熟識を7月16日（土）に開催し、学生30名（四日市大学、三輪学園大学、鈴鹿大学、高田短期大学、三重大学、三重県立松阪工業高等学校）が参加した。 ○8月24日（水）～26日（金）に林業体感ツアーを開催し、学生5名（皇學館大学、三重大学）が参加した。 ○8月31日（水）～9月2日（金）に農業体感ツアーを開催し、学生9名（四日市大学、三重大学）が参加した。 ○9月6日（火）～7日（水）に水産業体感ツアーを開催し、他県学生含め、学生34名（三重大学、立命館大学、愛知学院大学）が参加した。 ○9月6日（火）～9日（金）に留学生による地域大発見と情報発信ツアーを開催し、留学生13名（四日市大学、鈴鹿大学、三重大学）が参加した。 ○2月12日（日）に第一次産業体感ツアー報告会を午前で開催し、学生18名（皇學館大学、四日市大学、鈴鹿医療科学大学、三重大学）が参加した。また、第一次産業の振興策を検討する熟識を午後に開催し、学生21名（皇學館大学、四日市大学、鈴鹿医療科学大学、三重大学）が参加した。 ○三重創生ファンタジスタを目指す学生の質を高めることや、職業観のマインドセット及び県内企業に目を向けさせるため、第1分科会及び第2分科会教学WGでJobキャラバンを計画し、三重大学、四日市大学、皇學館大学を会場に開催することとした。 ○社長セミナーを実施し、三重大学生に対して、県内企業の社長等が企業の理念や業務内容を説明する機会を16回設けた。 ○社長セミナーを発展させ、社長だけでなくエース社員を招き、より学生が身近に感じることができるよう、平成29年度からはエースセミナーを実施することとした。	①平成28年7月16日（土）に開催した第一回目の熟識（テーマ：地域の魅力を考える～地域にあるもの都会にあるもの）では、三重大学生4名を熟識運営委員会メンバーとし、学生の学生による学生のための熟識を開催した。 →企画の初期段階から、学生は、エース、スタッフ分担当作成等、様々な業務を教職員のサポートを受けて進めることで、 主体性や責任感を醸成することにつながった。 特に、開催までの打ち合わせの度に、学生が打ち合わせ事項の整理、資料作成、議事概要作成を行うことで、 スケジュール管理や資料作成能力が向上した。 熟識では、学生達が考えた地域の魅力をアピールするユニークなアイデアも出されるなど活発な意見交換の場となった。（報告書P.29、30） ② 3つの第一次産業体感ツアーを開催し、学生は東紀州地域の第一次産業の課題やその歴史等を肌で実感する機会を得ることができた。 （報告書P.32～34）（資料31） →提出された報告書には、今まで知らなかった三重県の新しい一面を知ることができた喜びが記されており、実際に現場で従事する社会人との交流を通じて、三重県で働くということを改めて考えさせる機会を設けることができた。 →第一次産業体感ツアーを題材に、 第一次産業の未来を考えさせるビデオ教材を3本（林業・農業・水産業）制作し、HPで公開した。 （報告書P.36） ○ ツアーに参加した留学生は、訪問した場所やアクティビティの魅力やSNS等に約800回情報発信し、本ツアーを通して、三重県の魅力を知ることができた。 （報告書P.35）（資料30） →学生からの報告書では、ツアーを通しての 三重県の魅力発見とは別に、三重県の観光施設等に対する提案も記載 されており、三重県に深く関わろうとする姿勢を確認することができた。 → ツアーに参加した学生の中には、みえリーディング産業展に参加しHPで記事を作成したり（資料30）、三重大学地域創生センター専任講師の共同研究に参加する学生もあり、積極的に地域と関わりを持とうとする主体性を養うことが出来た。 ③第一次産業体感ツアー報告会を開催し、県内関係者に第一次産業が抱える課題や解決する方向性等の情報を共有することができた。その後、熟識を開催し、報告会の参加者が第一次産業の振興策についてグループワークを通して討議し、学生による発表を行ったことで、学生のユニークな発想が第一次産業従事者や関係者に伝えられた。（報告書P.31） → テーブルファシリテーター役に学生を配置した事で、立場の違う主体との議論をまとめる力が磨かれた。 → 熟識の参加者の中には、前述の三重創生ファンタジスタクラブに加入する学生もあり、地域で活動する楽しさや楽しさを主体的に活動する姿が見受けられるようになった。 ④三重大学長が訪問した県内企業を主な対象とする社長セミナーを16回開催し、各回約30名（最大50名程度）が参加した。 →事業協働機関では、辻製油株式会社、万協製薬株式会社、株式会社医用工学研究所、株式会社マサグループの講演があった。講演後は、学生が積極的に社長等質問を投げかける等、 県内企業の魅力が学生が知るきっかけとなった。 （資料31） （補足・平成29年度の状況） ③3本のビデオ教材は、平成30年度に向けスタートアップセミナーで使用できるよう、担当者や協議を進めている。また、COC+事業推進会議（平成29年5月29日（月））において、三重大学以外の高等教育機関においてもビデオ教材を使用できないか検討依頼があった。 ④平成29年4月29日（土）にJobキャラバンを開催し、三重大学会場では三重大学生21名、三重短期大学学生13名が参加した。四日市大学会場では四日市大学生7名が参加した。平成29年5月10日（水）に皇學館大学にて開催し、皇學館大学生92名が参加した。（資料32） ⑤社長セミナーの形を変えたエースセミナーを、以下の日程で開催する予定としている。（資料33） 6月7日（水） 株式会社百五銀行、株式会社マサグループ 50人（学生） 6月21日（水） 株式会社伊賀の里もくもく手作りファーム、株式会社ビーイング 7月5日（水） 北伊勢上野信用金庫、株式会社おやつカンパニー 7月19日（水） 株式会社三重電子計算センター、御木本製菓株式会社 後期：10月～12月で計6回開催予定	

					①事業協働機関である（株）百五総合研究所から地域創生センターに50部が寄贈され、三重創生ファンタジスタ養成に係る新規授業科目において活用することとした。（席次資料） （補足・平成29年度の成果） 「日本理解特殊講義（授業テーマ：三重の歴史と文化）」授業内で活用することし、履修生生全員（24名）に配付した。三重県の動向に学生が詳しくなり、三重創生ファンタジスタの質保証に繋げることができた。 ③事業協働機関及び県内企業の魅力を発信することで、大学生及び県内高等学校の生徒が三重県の魅力を知ることができた。 →三重大Xはオープンキャンパス等、様々な場面で配付されており、三重大学生だけでなく県内高等学校生にも情報が発信されている。三重大が発信する魅力や三重大の魅力を発信する情報発信者（高校生・高校生）も増え、情報発信者（高校生・高校生）とも相まり、県内居住者魅力に捉えらる学生が増えることは県内就職率の向上に繋がるだけでなく、取材を受けた事業協働機関の満足度向上にも繋げることが出来る。（資料36）
--	--	--	--	--	--

分野	項目	年度計画	実績	成果	自己評価
教育	教育プログラムの実施に関すること		○「三重創生ファンタジスタ」資格認定教育プログラムのCOC+参加校への展開についての検討 ○平成29年度より、三重大学を除く、9高等教育機関（四日市大学、皇學館大学、鈴鹿大学、鈴鹿医療科学大学、三重県立看護大学、四日市看護医療大学、三重短期大学、鈴鹿工業高等専門学校、鳥羽商船高等専門学校）がベネシック資格を立ち上げ、各高等教育機関において三重創生ファンタジスタを養成することが出来るようになった。平成30年度に向け、残り3つの高等教育機関も養成できるよう、検討を進めることが確認された。 ○ベネシック資格の対象科目に関しては、第一段階として、各高等教育機関で三重県について学ぶことが出来る科目を選定し、第二段階として、教学WGにおいてシラバス等を用いて認定に関する審査を行った。 ○ベネシック資格の案内チラシを高等教育機関毎にアレンジを加え制作し、対象学生全員に配付した。 ○三重大学の教養教育授業に、三重の歴史、文化、産業を学ぶ産学授業2科目を配置し、平成29年度に開講した。全高等教育機関に公開できるように、ビデオ撮影することが確認された。 ○全高等教育機関が受講できるPBL型集中講義3科目を作り、平成29年度に開講した。 ＜三重大学＞ ○コーディネーターの地域における活動と教育プログラムへの参加 ＜三重大学＞ ① 地域志向科目群「三重の歴史と文化」「三重の産業」の授業におけるゲストスピーカーの選定及び依頼を行った。 ②三重大学が実施した県内企業訪問に複数回同行し、COC+の広報を行った。 ③三重大学で実施した社長セミナーの講演者として紹介を行った。 ○PBL型集中講義科目のうち2科目（次世代産業実践、医療・健康・福祉実践）について、コーディネーターと協力して担当講師を設定する等、授業を構築した。 ④各市町のニーズを各自自治体に訪問し、調査を進めている。各高等教育機関には、制作したビデオ教材3本のデータを送付し、COC+事業推進会議（5月29日）において別途ビデオ教材利用について依頼をしている。 ⑤高等教育コンソーシアムみえにおける地域拠点サテライト運営会議（サテライト運営部会）において、各市町のニーズと高等教育機関のニーズのマッチングを行うべく、四日市大学、皇學館大学、三重大学が平成29年度以降順次、組成の提案を行うこととなっている（資料35）。今後、各市町のニーズや課題に着手する学生が出てくることで、地域志向を持った学生を多数輩出することが期待できる。	① ベネシック資格を立ち上げ、各高等教育機関から三重創生ファンタジスタが養成されることとなった。 →ベネシック資格及び三重大学・三重創生ファンタジスタ資格の概要は（資料34）を参照。 → ベネシック資格の対象科目を第2分科会教学WGにおいて審査したことで、三重県について知り、愛着を持った学生を輩出することに関し、教育プログラム上の質保証をすることに繋がった （資料16 教学WG第4・5回議事概要）。 ②高等教育機関毎にベネシック資格案内チラシを対象学生全員に配付し、三重創生ファンタジスタ養成事業を多数の学生に周知した。 →ベネシック資格の案内チラシを高等教育機関毎にアレンジを加え作成し、 対象学生全員に配付 することで、本事業の意義や資格を取るメリット（県内就職へのインセンティブ等）を提示し、 三重県の特徴や課題等を学ぶきっかけを提供 することができた。（報告書P.27、28） ③ 三重の歴史、文化、産業を学ぶ産学授業2科目を構築し、学生が三重県を知り、愛着を持つ機会を作った。 （報告書P.22、23） →多数のゲストスピーカーが様々な切り口で三重県を掘り下げた内容となっており、学生は多様な視点で三重県を知ることができ、三重県への愛着が育まれる。この科目は ビデオ撮影を行い、全高等教育機関にeラーニング化等して公開する等、教材として活用 できるように検討を進めている。 ④PBL型集中講義3科目を、実際に現場に出向き体感する内容とし、主体性や協調性を育てる授業とした。（報告書P.24～26） →科目構築にあたっては、 各高等教育機関の教職員と連携して作りこみを行い、高等教育機関の協働体制が強固 となつた。 →主体性・協調性を養う三重創生ファンタジスタ養成に特化した科目を用意でき、 三重創生ファンタジスタの質の保証に繋げることができた 。この3科目は、三重県的重要施策である①食と観光②次世代産業③医療・健康・福祉の内容に即しており、三重県が求める地域人材を養成することができる。この科目は全高等教育機関の学生が参加することができるよう目指している。 （補足・平成29年度の状況） ⑤三重の歴史、文化、産業を学ぶ産学授業履修人数及びPBL型集中講義3科目の履修人数は以下の通り。 I 日本理解特殊講義（授業テーマ：三重の歴史と文化） 24名 II 現代社会理解特殊講義（授業テーマ：三重の産業） 後期授業のため未定 III食と観光実践（集中講義） 鈴鹿大学1名、四日市大学4名、皇學館大学1名、三重大学12名 IV次世代産業実践（集中講義） 鈴鹿工業高等専門学校4名、鳥羽商船高等専門学校1名、三重大学14名 V医療・健康・福祉実践（集中講義） 鈴鹿医療科学大学2名、三重大学8名 ① 教員とコーディネーターと連携し、授業の骨子やゲストスピーカーを選定することで、幅広い視点から三重県を知るきっかけを学生に与えることができる授業を4科目作成することができた。 ② 平成29年度に向け、各高等教育機関のニーズとマッチングさせるため、三重県と協議して各市町のニーズを調査した （資料34）。 →コーディネーターが自治体に出向き、担当者にはヒアリングを行って、ニーズ調査を行った。高等教育機関に依頼したくても、どこに依頼すればいいかわからない実態も判明したため、コンソーシアムで窓口を1本化する意義を確認できた。また自治体がCOC+事業を知るきっかけとなることになった。 ③第一次産業体感ツアーで学生が実感した課題や学びをビデオ教材にし、HPで公開した。 ④みえリーディング産業展では、ブースにて説明を行う以外に、COC+事業パンフレットを用いて、出展企業に対し説明を行い、COC+の周知化に努めた。 （補足・平成29年度の状況） ⑤平成30年度に向けて、三重大学教養教育機構のスタートアップセミナーにおいてビデオ教材化できるよう、検討を進めている。各高等教育機関には、制作したビデオ教材3本のデータを送付し、COC+事業推進会議（5月29日）において別途ビデオ教材利用について依頼をしている。 ⑥高等教育コンソーシアムみえにおける地域拠点サテライト運営会議（サテライト運営部会）において、各市町のニーズと高等教育機関のニーズのマッチングを行うべく、四日市大学、皇學館大学、三重大学が平成29年度以降順次、組成の提案を行うこととなっている（資料35）。今後、各市町のニーズや課題に着手する学生が出てくることで、地域志向を持った学生を多数輩出することが期待できる。	IV

		【評価基準】		Ⅳ 計画を上回って実施している		Ⅲ 計画を十分に実施している		Ⅱ 計画を十分に実施していない		Ⅰ 計画を実施していない		
分野	項目	年度計画	実績	成果								自己評価
地域連携・情報発信	地域との連携に関すること											
	三重大学長による県内企業訪問実施		○平成27年度に引き続き、三重大学長が県内企業を訪問しており、平成28年度末の時点で107の企業を訪問した。	① 三重大学長が訪問した企業には、就職、インターンシップ、共同研究を通じた学生の関与等を中心に対話を行い、訪問した企業を中心に社長セミナーを開催する等、学生のもとへ企業の声が届くようにした。 →県内就職意向向上にあたっては、県内企業の魅力を学生に伝えることが重要であるため、三重大学においては就職支援チームのインターンシップ・就職支援情報、社長セミナー等、全高等教育機関にあたっては企業情報データベース等、様々なツールを用いて情報を発信している。 （補足・平成29年度の成果） ②現時点において、企業訪問数は124であり、着実に数を重ねている。今後は学生目線で企業をインタビューすることも検討しており、三重創生ファンタジスタクラブの学生等が主体的に動ける場となるよう、検討を進めている。								
	三重大における29市町包括連携協定の締結とサテライト構想の構築		○平成28年度中に三重県の中29市町と包括連携協定を締結し、多数の自治体から大学への要望を受け取った。そして、自治体の要望に対して、課題解決に対応する教員を割り当て、連携活動を強化した。 ○伊賀サテライトと東紀州サテライトを11月に設置し、伊賀サテライトでは、3月20日に皇學館大学と連携し、「マチとムラから考える伊賀で暮らし続けるために」を伊賀市のイベントで伊賀で開催し、三重大の伊賀に関する研究成果を発表した。また東紀州サテライトでは、3月8日に「環境農林水産フォーラムinおおせ」を熊野市熊野古道センターで開催し、三重大の東紀州に関連する研究成果を発表した。 ○伊勢志摩サテライトを平成29年度に設置する準備として、三重県立総合博物館と連携し、3月11日に三重県立総合博物館・三重大連携シンポジウム「先志摩の魅力を一緒にしゃべろうやー人と自然、今と昔」を志摩市磯部生涯学習センターで開催し、三重大の2名の教員が伊勢志摩に関する研究発表（越賀の絵図面を読み解く、先志摩海女が迎えた近代→朝鮮流通と漁業専業化へ）を行った。	① 三重県の中29市町と包括連携協定を締結し、地域連携活動を強化する体制を整えた。 →三重大の地域拠点サテライトの設置に関して平成28年4月に副学長（地方創生担当）を配置し、理事（研究担当）・副学長がサテライト（地域拠点）設置準備の議長となり、学部局の意見を聞きながら、サテライト設置の趣旨、サテライトの機能、サテライトの体制整備、社会連携研究センターの組織替えについて議論した。その結果、地域拠点サテライト全体を運営する会議「三重大地域拠点サテライト運営会議」の基に各サテライト毎に学内会議である「サテライト運営検討部会」、各地域の外部の関係者を入れた「サテライト運営委員会」を設置することを決めた。 ②各自治体の総合戦略を調査すると共に、三重大への要望をヒアリングし、三重大の各部署の教員に対応できるように内容をマッチングし、自治体と具体的な共同研究やプロジェクトを組上げるための準備を行った。								
	三重県が主催する学生地域活動		○三重大が主体となり、県内高等教育機関学生が参加できる地域活動イベントを実施した。 （平成28年度の学生による地域活動の一例） 1 いなべ市町（かなえ）地区での空き家を活用した交流拠点づくり ・三重大 2名 ・三重短期大学 1名 ・皇學館大学 1名 2 ゆずを使った商品づくり（i n立梅用水） ・三重大短期大学 1名 ・皇學館大学 8名 3 サンタクロースでゴミ拾い（コンソーシアム地域貢献部会） ・三重短期大学、三重大、皇學館大学、鈴鹿大学、鈴鹿大学短期大学部、中京大学	COO+での学生地域活動や県内定着の動きを加速化するため、事業協働機関の三重県が各種の地域活動イベントを企画し、COO+で学生確保の支援を行った。（席次資料） ①いなべ市町（かなえ）地区での空き家を活用した交流拠点づくりを実施し、学生が参加を行った。 （内容） 郡（かなえ）地区の自治会の方と、地域の活性化に向けて、空き家を活用した交流拠点の整備を行う。また、郡地区内の良・自然・史跡を利用したおもてなしメニュー開発、イベントの企画・運営、情報発信などに取り組む。 ②ゆずを使った商品づくり（i n立梅用水）を実施し、学生が参加を行った。 （内容） 地域を元気にしようと取り組んでいる「水士里ネット立梅用水」（多気町）の方と、地域外から人を呼び込めるような地域の魅力づくりに向け、ゆずを使った商品の開発などに取り組む。 →各種活動を通じて、今まで知らなかった三重県の間を知ることで、三重県への愛着を高める動きを加速化することができた。 ③三重短期大学が主催となり、三重短期大学、三重大、皇學館大学、鈴鹿大学、鈴鹿大学短期大学部、中京大学の学生が参加し、学生同士が交流できた。 （補足・平成29年度の成果） 地域活動の動きを強化しており、平成29年度は以下活動等が計画されている。参加者募集支援はCOO+でも実施した。 ④ 国指定名勝「三多気（みたけ）の桜」で景観まちづくり！！ 「三多気の桜」の保全活動」、「さくらマップの作成」、「イベントの企画・運営」のテーマで景観まちづくり活動を実施する。 ・三重短期大学 2名 皇學館大学 4名 鳥羽商船 1名 ⑦ 桑名市で竹あかりイベントに成功させよう ―桑名市竹プロジェクトSeason2― 「竹の三多気」という竹を活用した秋のイベント「竹あかり」などイベントの企画運営をする。イベントに必要な竹の伐採をし、放棄竹林の環境整備も実施する。団体に関わる深い地元企業を視察し、CSR活動について意見交換などを行う。 ・三重大 1名 三重県立看護大学 1名 皇學館大学 4名 ⑧ いなべ市町（かなえ）地区での空き家を活用した交流拠点づくり （同上）、三重大 3名 三重短期大学 1名 ⑨ ゆずを使った商品づくり（i n立梅用水） （同上）、三重大短期大学 1名 皇學館大学 8名								
	（株）百五総合研究所が発行する「三重県経済のあらまし2017」を用いた地域に関する情報発信		○（株）百五総合研究所が発行する「三重県経済のあらまし2017」を授業で活用し、学生が三重県について知るきっかけを増やした。	① 事業協働機関である（株）百五総合研究所から地域協働センターに50部が寄贈され、三重創生ファンタジスタ養成に係る新規授業科目において活用することとした。（席次資料） （補足・平成29年度の成果） 「日本理解特別講座（授業テーマ：三重の歴史と文化）」授業内で活用することとし、履修学生全員（24名）に配付した。三重県の動向に学生が詳しくなり、三重創生ファンタジスタの育成証に繋がることができる。								
	三重大Xを用いた事業協働機関及び県内企業の魅力情報発信		○三重大が発行する情報冊子三重大Xで、事業協働機関及び県内企業の魅力を発信した。（席次資料 三重大X）	① 事業協働機関及び県内企業の魅力を発信すること、大学及び県内各高等学校の生徒が三重県の魅力を知ることができた。 →三重大Xはオープンキャンパス等、様々な場面で配付されており、三重大だけでなく県内各高等学校にも情報が発信されている。三重県が発行する「三重県や県内各高等教育機関の魅力を発信する情報冊子「みなコレ！」」（席次資料）とも相まり、県内居住を魅力的に捉える学生が増えることには県内就職率の向上に繋がるだけでなく、取材を受けた事業協働機関の満足度向上にも繋げることができる。（資料36）								

III

平成28年度事業協働機関へのインターンシップ実績一覧

土建

①

参考：平成26年度)

者数(A)	就職者数(B)
-------	---------

～ Memo ～

平成27年度大学教育再生戦略推進費
「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」
地域イノベーションを推進する三重創生ファンタジスタの養成

編集・発行 三重大学地域人材教育開発機構

問合せ先

三重大学学務部地域人材教育機構チーム

〒514-8507 三重県津市栗真町屋町1577

TEL■059-231-9902・9969・9940 FAX■059-231-2354 MAIL■jimu@cocpls.mie-u.ac.jp

HP■<http://www.cocpls.mie-u.ac.jp/> (COC+) <http://www.cocpls.mie-u.ac.jp/chiiki/> (地域創発センター)



twitter■@MieSFC (三重創生ファンタジスタクラブ)

発行月 平成30年 6月